

---

# 君のための魔法

かるびす。

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

君のための魔法

### 【Nコード】

N2910R

### 【作者名】

かるぴす。

### 【あらすじ】

黒田は銀行強盗に意味分からず殺されて神様と出会う。

チートな能力を渡されて『魔法先生ネギま!』の世界へ転生させられる黒田、彼はその膨大な数の魔法を誰のために使うのか。

注意!この小説は綺麗ではありません。

## プロローグ(前書き)

処女作です、宜しく願います。

## プロローグ

黒い、黒い、一面が黒い部屋、そこに一人の青年が横たわっている。スーツ姿、黒い髪、小麦色の肌、その風貌は一般的な日本人のそれである。

その青年が意識を覚醒していく。

「……ん、ここは……、何処でしょうか？」

意識を覚醒させたものの辺り一面が黒い風景、最初は夜の野外かとも思ったが明らかに変であると感ずる。

森、林の草や木や地面と接している感触もなければ、人口的なコンクリートと接している感覚もないし建物もない。

「まだ夢の中なのでしょうが」

青年は夢を見ている最中だと結論づける。

偶に夢の中で今自分は夢の中だと分かり、意識も若干あるそういう状態なのだと青年は考える。

それにこのような場所に来た記憶もない。

そして青年がまた瞼をとじようとすると

すると。

「おいおい、また寝てもらっちゃこまるぜ？ やつと起きたんだからよ、あまり俺様を待たせるんじゃないぞ」

まだ夢を見ている最中だと思っていた世界で人の声が聞こえた。青

年はすぐに上半身を起こしそちらに顔を向ける。顔を向けた先には幼児がいた。しかし、なぜだか青年はこの黒い世界で幼児だけが光輝いているように感じた。

「あなたは？」

ついつい自分よりも明らかに小さく歳も低いであろう幼児にあなたと言ってしまふ青年。

「あなたじゃねえよ、俺様は神様だ」

明らかに青年よりも身長が低いであろう幼児は上から見下すように青年に返事をする。

「神様ですか？」

青年は戸惑いながらも問いかける。

「ああ、そつだ。俺様は神様だ」

青年は少しの間考えこむ。

「では、ここは何処ですか？」

結果的に青年はこの幼児が神様だと不思議にも思えてしまった。ただ今まで夢の中だと思っていたが、ここはいったい何処だろうと思ひ、神様と名乗る幼児に聞いてみる。

「ああ、ここか？　ここはな下界とあの世の狭間ってところかな」



綺麗に片付けられた部屋に無機質なアラーム音が鳴り響く。  
その音により青年の意識は覚醒していく。

「んあ……。もう朝か」

アラームを消して会社へ行くために支度を始める。

「午後に雨降るのか……」

天気予報で午後に雨が降ると分かり少し憂鬱な気持ちになる青年。  
そして支度を終えて玄関を出て行く。青年には朝食を作ってくれた  
り、見送ったりする嫁さんはいない。所謂独身というやつである。  
玄関を出ると隣の一室からも人が出てくる。

「あら、おはようございます。黒田さん」

「おはようございます」

青年、黒田はマンション暮らしである。  
そして腕時計で時間を確認しつつ歩きだす。

（うわ、午後から雨が降るんじゃないか？ もう雨降りそう  
じゃないか）

自動販売機でコーヒーを買くと、財布の中のお金が余りないことに  
気がつく。

そして近くの銀行に向かい銀行の中に入って行くことすると、銀行  
から顔をマスクで隠し、手に黒光りする物を持っている人がでてき  
た。

そして動揺して動けずにいると。

パアアアアン！

目の前の人が持っている物から大きな音がした。

黒田は何が何だか分からないと思った刹那、体の力がぬけたように前に倒れた。

（あれは……銃？ 私は撃たれ……たの、か。死ぬ……のか）

薄れゆく意識の中、雨が降り出した気がした。

……。

……。

……。

意識が戻ってくる。目の前の幼児が笑っている。

「どうだ？ 随分とつまらない人生の最後だったな？」

「……そうですね」

黒田はまさか自分が銀行強盗に殺されて人生を終えるとはと、憂鬱な気持ちになった。

「まア、とりあえずもうそんな事はどうだっていいんだ。それよりもこれからの事だ」

「これから？ 私は地獄か天国にでも行くのではないのですか？」

「ハア？ 馬鹿かお前、そんな事だったら俺様がわざわざお前に会



うと思えてるわけ？ バアカ」

黒田はてっきりこれから地獄か天国にでも行くのかと思っていた。しかし、そうではないのならなんだろう、黒田は考え込む。

「ククククツ、馬鹿かお前、天国、地獄じゃなかったら決まってるだろ、転生だよ！ お前等人間の一部分が憧れる、な！」

「……転生？」

黒田はそんな事に憧れる人がいるのかと思いながら、転生について考える。

(記憶は残るのだろうか。そしたら、学力の面も大丈夫なのだけど)

「記憶どころか、能力までつけてやるよ。俺様に感謝しろよ」

「わっ！ 人の考えてる事分かるんですか！？」

「それはそうだろう？ 俺様は全知全能の神様だぜ。まア、それはいいんだけどな。あと、お前が考えてるように会社に勤めて安定した生活もいいけどなっ、お前の行く世界は魔法があるんだぜ？」

「魔法ですか、それはメルヘンですね。……というか魔法って！？ 地球じゃないんですか？」

「ああ、確かに地球には違いないがな。その世界は魔法がある、秘蔵されているがな。まア、漫画の世界だしな」

黒田はまだ困惑で頭がまわらない中、幼児は話を続けていく。そんな頭が回らない黒田だが、聞き逃せない言葉があった。

「漫画……ですか？」

そう、漫画の世界と聞いたのである。

（漫画？ 漫画の世界って……漫画って人が作るものだろう？ そんなものが世界？ 訳が分からない）

「そうだ、確かに漫画は人が作るものだ。しかし漫画にだって世界がある、意思がある。つまりお前が生きてきたときと同じように人は意思があるし話せるし生きている、もちろん最後には死ぬのさ」

（また読まれた……）

黒田は幼児の話を聞いて少しの間考える。

「つまり……、漫画の世界であるけどそうではないのですか？」

「そうだ！ その世界に俺様がお前に能力を授けて行ってもらう能力を貰う、魅力的な話だが黒田は考える。

「しかし、私は別に能力など……」

「勘違いするなよ、お前は能力を手にするんだ。お前に拒否権はない」

「……分かりました。能力は貰ってもいいです。しかしその後どうするかは私が決めてもいいですよね」

その言葉に若干、気を悪くするような顔をする幼児。  
少しの間、顎に手をやり考え込む。

「……あア、いいだろう。後のことは好きにしている。だが、どんな能力を貰っても文句は言うなよ」

「分かりました」

「まずお前には、吸血鬼の真祖になって貰う。これで身体的にも、魔力的にも強くなる。そして、不老不死にもなるわけだ。あと……」

「待ってください！ 不老不死ってどういうことですか？」

突然、話の最中に黒田が叫びだすので不機嫌な表情になる幼児。

「あア？ そのままの意味さ。お前は一生死ぬことのない肉体になる。だが安心しろ条件が重なれば死ねるさ。あと話の途中にうるせエ黙ってる」

幼児、神様は有無を言わせない眼力で睨み付ける。

黒田は、圧倒されてしまい押し黙る。

「それでいいんだよ。……あとはそうだな、魔法に関する知識を森アカシクレコードシクレコードとお前の知識とを共有させてやる。まア、本当は膨大な知識で脳の方がイカレちまうんだが……そのへんは俺様に任せろ、つまりお前はなんの苦勞もなく何でもできてしまうのさ、魔法の力でな」

アカシックレコード  
森羅万象、ありとあらゆる事に関する事、その魔法についての知識を共有させると言う幼児。

黒田は次々と自分に『力』を与えていく幼児に疑問を抱く。  
何故こんなに『力』を与えるのだろう、何故自分に『力』を与えるのだろうと。

しかし、また話の途中で口を挟めば何を言われるか、されるかわからないので黙る。

幼児は話を続けようとする、黒田の考えが分かるはずなのに、その答えを言わない。

「まア、別にこのアカシックレコード森羅万象があればなんでもできるだろ。……さてと、そろそろ行ってもらおうか、黒田海斗！ 転生先『魔法先生ネギマ！』の世界へ！」

既に話が終わっていることに困惑する黒田、海斗は何か叫ぼうとする。

「ちよつ、ま……」

「サヨナラだ、来世をしっかりと堪能してきな」

そして、黒田は一瞬で光に包まれ消えていった。

この黒い世界に残るのはニヤニヤとする神様1人だけとなった。

「確かにお前が何をするかは勝手だ。しかしな俺様は全知全能、運命を操ることなど簡単だ。お前は原作に巻き込まれる運命なんだよ。せいぜい俺様を楽しませてくれよ黒田海斗。ククク、フハハハハ！」

誰もいないこの黒い世界で一人高らかと笑う幼児が、真の思惑を口

にしていた。

## ブログ（後書き）

パソコンで書いたので携帯で見ると変かもしれませんが、そのうち修正してみます。

原作を再確認しながら書きますので、多少更新が遅れるかもしれませんが。

ご感想、ご指摘お待ちしております！

遭難？いいえケファイアです。

私はあの幼児の会話に動揺していると、彼は話を終えて転生させようとしていた。

私はまだ話をまだ聞きたい事もあったので止めようとしたけど、言葉を言い切る前に私は

光に包まれた。

光は消えたけど、まだ風景は黒一色。

しかし、今は先ほどと違って落ちていく感覚がある。

それにしても、彼は最後に『魔法先生ネギま！』の世界へと、言っていた。

たしか、数年ほど前に十二巻ほど読んで、飽きてやめてしまった漫画だ。

正直内容はほとんど覚えていないし、この記憶は全然あてにはならないだろう。

あと、アカシックレコード森羅万象の魔法の知識と私の知識を共有させると言っていたけど、今は特にそのようなことはない。

……光が見えてきた、そろそろのようだ。

「森……ですよね。人は……いませんよね」

いやいや、殺風景な風景が変わったのはいいのですけど、森って…

…。

食料が手に入らず餓死なんて事にはなりませんよね。

嫌ですよ私、転生してすぐに餓死するなんて。

「……とりあえず歩きますか」

歩いてみれば町とか人とかに出会うかもしれないね。

歩く歩く、歩いて数分して私は立ち止まる。

歩いても歩いて木、木、木、木！ 町の気配はまったくないです。

遭難なんかではないですよ？ そうと信じたい。

いえいえ、ただ風景がずっと緑なだけで決して遭難のわけではないです。

ありえませんか「人はそれを遭難という」。

そもそも、私は吸血鬼の真祖になったのですかね。

もしそうなら、不老不死ですし大丈夫なのでしょうけど、そうでなければ……。

考えたくありませんね。

……もう少し歩きますか。

「……分かりました、認めましょう。私は遭難しました。しかし、それを認識したところで現状が変わることもないですね。本当にどうしましょう」

そろそろ日も暮れてきましたし。

今日は野宿ですね、幸い此処の気温は高いみたいですし。

あれ、頭が……。

「あ……れ、頭が……クラ……クラ、す……る」

その一言を最後に私は意識を閉ざした。

知識が……知識が。

術式が……。



頭に入ってくる、膨大な量の知識。

これが、アカシックレコード森羅万象？　これが魔法？　……危険すぎる。

「ん……、もう朝か。頭は……。大丈夫か」

魔法……。彼はなんでもできると言った。その意味が少し分かった気がした。

たしかにほとんどの事は出来てしまいそうだけど、同時にこれは危険なものだ。

人を簡単に壊してしまう。

使用するにあたっては気をつけなければ、どうでもいいモノならとにかく大切なモノまで壊してしまう。

「はあ……。あの幼児、なんてものを渡してくれたんだ」

まあいいか、今となってはどうにもならないし。

それよりも、もう簡単に町とかに行けるようになったけど、町とかでは暮らせそうにありませんね。

不老不死ですから絶対に怪しまれます。

ちなみに吸血鬼の真祖とやらにもなったようですね、体がさっきまどとは違い羽のように軽いです、これではれて私も化け物ですね。

んー、ならば町に近すぎず遠からずの場所にでも家でも作りますかね。

では、さっそく行動を開始しましょうか。

とりあえず私は魔法で空高く飛んでみた。

「うわっ、高いところは怖いですね」

あー、ありました町。

今まで歩いてきた道の正反対のところに。

というか、丁度良い位置ですし、この辺に家でも……。

おっ、湖も発見しました。

あの隣にでも家を建てますが、魔法と私の技術で。

ちなみに私の前世は建築士です。随分とテンプレな設定にされましたね。

……何を言ってるんでしょう私。

「……ふう、結構良い感じじゃないですかね。ちょっと調子に乗りすぎちゃいましたか」

いやー、魔法って便利ですね、二十分で立てちゃいました。

仕事早いですね、私。

ちなみに、水は湖の水を魔法で清浄な水にしました。

食料はたまに町にでも認識障害の術でもかけて旅人風に行けばいいですかね。

不老不死と言えどお腹はへるみたいですが、腹が減っては戦は出来ぬ、つてね。

あと、服やら生活用品も買いにいきますか。

では、今すぐにも行きますかね。

……。

……。

……。

……これは西洋の建物に白人。

どうみてもヨーロッパですね、しかも魔女狩りやらも行われているそうです、これは絶対に住めませんね、殺されてしまいます。

いや、厳密には不老不死だから、死なないかもしれませんが、痛

いのは勘弁です。

……何故気づかなかったのでしょうか、鏡を見て初めて気づくなんて私どうかしてますね。

はい、若返ってます。ピチピチです、だいたい二十歳ってところでしょいか、前世では三十代後半だったのですが……。

これも彼がやったのでしょうかね。

でも、正直これは嬉しいですね、シワが少し出来てきたオッサンなんかよりは若々しいお肌のほうが嬉しいですし、こればかりは彼に感謝しましょうか。

基本的な顔のつくりは変わっていませんよ、イケメソ？ いいえ、ケファイアです。

……とりあえず今日で、生活ができる最低限度の物はそろえましたね。

「ふー、これからどうなることやら」



遭難？いいえケファイアです。（後書き）

文才のなさに驚きますね。しかも原作キャラまだ出ていませんし、  
予定では

次かその次ほどに出したいと思っています。

ご感想、ご指摘お待ちしております。

猫耳って萌えますよね。(前書き)

2話連続投稿。

猫耳って萌えますよね。

私がこの世界に転生してきてもう1000年ほど経ちました。私が転生してきたのが1290年頃だったので今は、1390年です。

その間私はただ普通に生活していただけで何も面白みのある事はしていません。

魔法を手にしたといっても、何か特別なことをしたいわけではないです。

でもお金がなくては何も買えませんから、百年の間に錬金術を開発しました。

この錬金術は私の前世で読んでいた数少ない漫画の中の技で等価交換、物を作るのに必要な材料がいます。

最初等価交換をなくそうとしたのですがどうしてもそれはできませんでした。

やはり何にしても対価というものはあるのでしょうか。

これで物を作って売ればお金が手に入ります。

転生してすぐの数日間には仕方がないにせよ、認識阻害の魔法をかけて物を盗んでいましたが、さすがにいつまでもそういうことをするわけにもいきません。

多少生活にも慣れてきてからは森の生き物や野草、実、果物などを食べていました。

その生活も錬金術を開発して終わりになりました。

今はお金を使って食料などを買っています。

あと一度だけこの世界の魔法使いに襲われました、どうも1000年の間の途中から観察されていたようで、歳をとらないことで何を思ったか私を殺すことにしたようです。

思考回路が読めません。

何か偉大な魔法使い（マギステル・マギ）になるためにとかどうのここの言っていました。が、意味がわからないので、忘却の呪文で私に関する記憶を消そうとしたのですが、急に攻撃魔法を放ってきて手が狂いパーにしまいました。

決してワザではないですよ、攻撃してきて腹が立ったたなんてアリマセンヨ？

そのあとパーになったせい。が、攻撃魔法を出鱈目に唱えていたので、面倒になって何処かに転移させました。

いやー仮にですが、宇宙空間にでも転移していたらかわいそうですね。

まあ、ありえませんが私に限って。

それと、その魔法使いが私を観察していたのは、どうも、私の魔力が大きすぎたみたいなので、今は魔力を抑えていてそこら辺の一般人程度になっています。

つまりは微量の魔力って事ですね。これで余り魔法使いの人たちに怪しまれるようなことはないでしょう。

面倒な事は基本的に嫌なのでね。

それにしても……。

「この人は一体？」

なんででしょうか、とても現実逃避を続けたいほどの気が溢れ出している女性が倒れているのですが。

朝早くに起きて、貯蔵してある水がなくなったことに気づいて、湖に行こうとした道中に倒れていたのですが。

「とりあえず、このままではいけませんね」



家で寝かせる事にしましょう。  
勿論やましい事は考えていませんよ？

「ふう……」

とても軽かったです。

普通、身長と体重は比例するものではないのでしょうかね。  
女性にしては高い方だと思うのですが、背丈と不釣り合いなほど軽かったですね。

まあ、いいでしょう。

それよりも寝てる間に水でも補給しませんとね、時間は有限なので  
すから、効率的に行動しませんと。

……ふう、やっと補給終わりました、さて、あの女性はどうしましたかね。

「あれっ……起きましたか？」

部屋に戻ってみると女性はベッドに座っていました。

「はい。……ここは何処ですか？ それとあなたはいつたい？」

「ここは私の家、何故連れてきたかというと、あなたが倒れていたからです。あと、私は黒田海斗といいます」

女性が警戒していたようなので、やんわりとお答えします。  
すると女性も多少は警戒を解いたみたいですね。

……それとさつきから気になっていたのですが、猫耳が生えていま

す、黒髪から黒い猫耳が。

これが最近流行の突っ込んだら負けってゲームですかね。

「そうですか……。あっ、すみません。わたしは化け猫のアルメンと言います。……。あのすみません、お世話になったところ申し訳ないのですが、水をもらえませんか？」

「ああ、丁度いいです。さっき補給したんですよー」

「いやー、それにしても化け猫ですか。

ケット・シー  
猫妖精と何か違うのでしょうか。

まあ、害もないみたいですし、別にいいですけどね。

「はい、どうぞ」

「あっ、ありがとうございます」

そういうと、女性はコップに入っている水を全て飲み干した。喉が渴いていたのでしょうかね。

「ところで、どうしてあんなところで倒れていたのですか？」

「はい、実は……」

話を聞いてみると、どうやら、魔女狩りの影響で黒猫が大量に殺されていつているらしく、アルメンさんも人の姿になって逃げ回っていたらしいのだけど、気を随時減らしていつて体力も底をついてあそこに倒れていたそうだった。

そして、これからも逃げ回る生活をするそうだった。

ふーむ……。

「そうですね……。では提案なのですが、私の家で一緒に暮らしませんか？」

「え？ えええ……。さすがにそこまでしてもらう訳には……」

「いいですよ、別に。私もさすがに百年近く人と親密な関係になつていないので寂しいですよ」

「百年ですか？ 失礼ですが、海斗さんは人ではないのですか？」

「ああ、はい。私、吸血鬼なんですよ」

「そうですね……」

「どうです？ お互いのためにもここで住んでみませんか？」

「……はい、分かりました。よろしくおねがいます」

「良かった。あと、私のことは海斗でいいですよ」

「分かりました。ではわたしのこともアルメンと呼んでください」

こうして、これから増えていく家族のうちの一人と一緒に住みだす話だった。





猫耳って萌えますよね。(後書き)

原作キャラの前に、オリキャラ……。やっちなった話ですね。

ご感想をくださり作者は悶えるほど嬉しいです。ありがとうございます。

感想、ご指摘お待ちしております。

幼女！幼女！つるぺ（ry）前書き（

予定どおり今回は原作キャラだします。

幼女！幼女！つるぺ（ry

??? ?side

「はあ、はあ……」

ちい！ なんだっていうんだ！

わたしが追われるようになってから、初めの数年はそんなでもなかつたのに。

最近になって追っ手が増えだしたと思ったら、今度は魔法？ 奴らが言うに魔法使いと名乗る奴らに追われるようになった。わたしだって好きでこんな体になったわけじゃないのに……。

「待ちやがれ、吸血鬼！ おとなしく捕まりやがれ！」

「魔法の射手・連弾・光の十一矢！」

「がはっ」

奴らの一人が放った魔法がわたしの足に当たってわたしは転ぶ。

ここまでか……。

わたしがもうダメかと思って、涙を一滴落としたとき……。

「おや……。幼女を追い回す犯罪者集団ですかね」

……。

幼女って言うな。



私は起床してリビングたる所へ行くと、既にアルメンは起きていて料理を作っていた。

「おはよう、アルメン」

「はい、おはようございます」

ちなみにアルメンが料理を作るようになったのは、居候の身で何もしないのは嫌だそうで働かざる者食うべからず、だそうだ。

まあ、私としても、アルメンの料理はおいしいし助かるのだけど……。

ちなみにアルメンは家の中だとメイド服を着ています。

いえいえ、私の趣味ではないですよ。

アルメンと一緒に住み始めてから数年で何処からか仕入れてきて、メイド服を着て私に「どうでしょうか、ご主人様／＼」と言ってきました。

勿論、私は鼻血を噴水の如く噴き出して倒れました。

だってメイドに猫耳……。

反則ですよ。

もう、私死んでも思い遣すことなどないと思いました。

何故そんな服を着ているのか、問いただしたら、顔を赤くしてボソボソと呟くだけ。

訳が分かりません。

そういえば、最近、肌がちょっと触れるだけで過剰な反応をされるんです、嫌われてしまいましたかね。

まあ、それはないとは思いますが。

それにしても、前世の見ていたアニメでメイドさんに好かれている主人公とかいう設定ありましたね、羨ましいですね、リア充は爆発してほしいですね。

「出来ましたよ、お皿運んでください。……海斗、何怖い顔してるんです?」

「ああ、いえ。なんでもありませんよ。」

いけませんね、少しトリップしていたようです。おっと今日の料理もおいしそうです。

「「いただきます」」

うん、やはり今日の料理もおいしいです。

それにしてもアルメンって化け猫ですよ、どこで料理の勉強したんでしょうか。

「そつえば海斗、すみませんが食料を買ってきてくれませんか、もう蓄えてる物もなくなってしまっ」

「ああ、はい。いいですよ」

……? ちょっと面倒なことに巻き込まれる気がしますね、なぜでしょう。

そのあと私は料理を食べ終えて、町まで食料を買いに行った。

「ん……、魔力? 近いようですね。どうしましょうか」

んー、後で家まで面倒なことがまわってくるといけませんからね。  
一応、様子でも見に行きますか。

そして、私は魔力反応するところまで行って見たものは……。

「おや……。幼女を追い回す犯罪者集団ですかね」

あれ……。

金髪の女の子が殺意を込めて睨んでるんですが。

幼女という単語はタブーのようですね。

……というか、あの女の子何処か見たような？ 町で会ったこと  
ありましたっけ？ まあ、いいでしょう。

それよりもこれはどういう状況でしょうか。

幼女……、女の子の前に魔法使いらしき人達が十人ほどいますね。

いや、これはリアルな話そういう趣味の持ち主の集団でしたら危険  
ですね、そして私は怒りますよ。

YESロリータ！ NOタッチ！ ですからね、触ってしまったら、  
ただのペドフィリア。

ロリコンの方々を代表して私が成敗しますよ。

「貴様！ どけ！ その吸血鬼をよこせ！」

「吸血鬼？」

「そつだ！ 分かったら早くどけ！」

吸血鬼……、確か薄れ行く私の原作の知識にこんな子が……。

ああっ、思い出しました！

「失礼ですが、お嬢さん。エヴァンジェリン・A・K・マクヌメル

さん？」

「マクダウエルだ…。なんだ？ お前もわたしを捕まえようとする奴か？」

おっと、マクダウエルでしたか。

「ああ、失礼しました。私は黒田海斗といいます。私は別にあなたをどうもしませんよ」

「何？ どういうことだ？」

「どつって……。まあ、なんというか君が悪い子には見えないのですよ。それに……」

「？ なんだ？」

「いえ。ああ、話を続けるのは後にしましょう。そろそろ彼等が黙っていないので、ね」

「おい、お前も一緒に吹き飛ばすぞ！」

本当にうるさいですね、少しぐらい待てないのでしょうか、頭が弱いんでしょうね。

あつ、呪文唱え始めてる人がいますね。

「おい、馬鹿。やめろ一般人だぞ！」

「うるせえ！ 来れ雷精、風の精。雷を纏いて吹きすさべ南洋の嵐、雷の暴風！…！」

おっと、結構強い呪文が使えるようですね。  
まあ、私の障壁の前では全てが……。

「無駄ですけどね」

彼の放ったイカツチは私の障壁に触れると一瞬で消え去った。

「なっ……。俺の魔法が……」

おやおや、この程度の魔法で誇っているようですね、魔力が全然込められていない質が低い魔法で。

まあ、私を基準にしてはいけませんね。

では、大体状況がつかめましたし……。もう、消しましょうか。

「なっ!?!」

私は吸血鬼の脚力で正面から男の前まで走りぬける。

そして零距离で……。

「来れ雷精、風の精。雷を纏いて吹きすさべ南洋の嵐、雷の暴風！」

先ほど三下が放った質の低いイカツチではない一流の魔法が彼を襲う。

「あー、やりすぎちゃいました」

男は文字通り消し飛んでいた。

「ひいつ！？　なんだお前その魔力？　さっきまで……」

ああ、魔法を放つと同時に、魔力のリミッターをはずしたので、彼等顔面蒼白ですね！。

「お前！　なんで吸血鬼を助けるんだよ！？　人間だろ？　こっちにつけよ！」

「面白いことを言いますね。先に攻撃してきたのは貴方たちでしょう」

実力が分かったとたんこれだ、まったく、これだから下種は……。

「あと何故、彼女を助けるかという……、運命を感じたからです」  
ん……。

皆さん反応ないですね、きめたつもりなのですが。  
いや、しかし、原作のキャラとこんなところで会うのは、運命を感じずにはいられないのは、事実なのですけどね。

「……運命だなんて／＼／」

おや？　うしろで何か聞こえましたね。  
まあ、いいでしょう。

それにしても、先ほどの手ごたえですと、魔力を手に込めて殴れば  
すみすかね。

「ちと、もういいですよね？」

「うぐつ、ちい！ お前等、やつちまえ！」

ああ、大抵こういうことを言う人って殺されるんですよ、自覚してるんでしょうか、噛ませ犬って怖いですねー。

ドシユツ！

呪文を唱え始めている男に近づいて、詠唱を終える前に顔面を潰す。おっと消し飛ばしてしまいました、真っ赤に咲きましたね。

しかし、この人たち前衛もいないんですかね、パーティーとして成り立ってませんよ。

まったく、吸血鬼討伐と言いながら、吸血鬼を舐めているんでしょうか。

……ああ、そういえば。

「そういえば、さっき人間の味方がどうのこうの言っていましたけど。私は吸血鬼の真祖なのであしからず」

「なっ……」

何かを言おうとする男の顔面をまたしても殴る。

そんな調子で十人ほどいた魔法使いは全員殺して、後に残ったのは真っ赤になった地面のみでした。

「さてと、お嬢さんどうしま……」

寝てますね、いやこの場合安心して気を失ったんでしょうか。

まあ、いいでしょう、とりあえず、家まで運びますかね。

いやー、これからどうなることやら。





## 幼女！幼女！つるぺ（ry）（後書き）

はい！エヴァでした。まあ、この時代ですからこの子以外は考えられませんがね。感想、指摘お待ちしております！

勘違いって怖いです。

海斗side

「さて、どう説明しましょうか……」

エヴァさんを連れて帰ったはいいんですけど、アルメンがいませんでした。

たまたまアルメンはいなくなるんです。

どうやら、メイド服やらなんやらを仕入れに行ってるそうです、アルメンはコスプレ癖があるそうですね。

まあ、いいでしょう、アルメンにはあとで説明すると思いますかね。

「それにしても……」

真っ白な肌ですねー、まるで雪のようなお肌です、髪の毛もキューティクルが最高の状態ですね、ツヤツヤしています。

うん、人形のようなかわいらしさです。

ああ、いけませんね。

触ってはいないとはいえ、こんな食い入るように見ていては変態です、私。

ドサツ……。

「海斗……?」

「ああ、アルメン帰ってきたのですか。実は……」

「海斗、そ、そ、その子は？ 一体？」

あれ……。

何でしょう、非常にまずい予感が……。

「あの、実はこの子は……」

「ああ、いえ。いいんです、全て分かりました。とりあえずその子の親を探してから警察へ連絡しましょう。全て、わたしが悪いんです。わたしが海斗がそういう趣向を持っていると知らなかったから……。大丈夫です、海斗。そうですね、年齢詐称薬でも大量に仕入れましょう／＼」

いえ、何も分かっていませんよアルメン。

不味いです、絶対勘違いしています、このままでは私は社会的に死んでしまいます。

なんとしても、誤解を解かなければ……。

あと、アルメン、話は最後まで聞きましょう。

「いえ、違うんですアルメン、実はこの子は私……」

「……私の娘？ 海斗、そうだったんですか。……わたしというものがありません。……誰との子なんですか！ 海斗、教えてください！」

……状況が悪化した！？

このあと、こんな感じで負の連鎖が続き、誤解を解くのに数十分ほどかかった……。

「……なるほど、つまりこの子が襲われているところを海斗が乱入

して助けてつれてきたと……」

「そういうことです。アルメン、人の話は最後まで聞きましようね」

「うっ……。わたしとしたことが……。なんてはしたくないところを」

アルメンは顔を赤くして頂垂れている。

普段は冷静で良い子なんですけどねー。

ああ、そういうえば、アルメン……。

先ほど、袋落としたとき、中からでてきた物を、私、忘れませんよ。

「それにしても……。冷静になって見てみるとこの子、賞金首になつてる子ですね」

「知っていたんですね、アルメン？」

これからは冷静に状況を判断してください、という意味を込めて聞いてみる。

「は……。はい。たしか、生け捕りというのが条件だったような」

なるほど、まあ、大方観察やら実験などをするためですかね。

吸血鬼の真祖はこの時代では珍しいですし。

「それにしても、この子も家に住ませるんですか？」

「そうですねー、この子が望むなら。もちろん、私はこの家においておきたいですね。家族は多いほうがいいですし」

「クスっ、海斗らしいですね」

それにこの子は原作でも思い入れがありましたしね。  
600間もの間孤独に過ごすのは正直寂しいのでは？ と、ああ、  
でも途中からチャチャゼロ？ とかいう従者がいましたっけ。  
まあ、どちらにせよ今は一人ですし、それに、私的には、家族が多  
いほうがいいのは事実ですけどね。

「んん……」

エヴァ side

「んん……」

あれ……、わたしは一体……。  
たしか追っ手に囲まれて……。

「おや……。起きましたか」

「うわっ！ お前、さっきのー！」

そうだ、この男が追っ手を殺していくうちに、気分が悪くなって気  
絶したんだ……。  
この男……、黒田海斗だったか？ なんもしないとは言っていたが  
……。

「お前って……。海斗とおよびください、お嬢さん」

「ああ……。分かった。海斗……？ ここは一体何処なんだ？」

「ああ、ここは私の家ですよ、お嬢さん」

「なあ……、そのお嬢さんと言うのはやめてくれないか？ 凄く気になるんだが……」

そういえば、こいつ最初に少女とか言ってたな、思い出したら腹が立ってきた……。いや、待て。

気を失う前にわたしの衝動的なことを言われた記憶もあるんだが……。

あっ！ 思い出した、たしか運命を感じたとか言ってたな……、あれはもしかしてプロポーズってやつなのか。まあ、確かに顔も悪くはないんだがノノノ

何を考えてるんだ、わたしは！ 今はそんなことよりこの状況を理解しなければ……。

「では、なんとよんでほしいですか？」

「なんでもいいぞっ」

「では……。キティとでも……」

「それはダメだ！ ていうかなんでそれを……」

キティと呼ばれるのは普通は嫌なんだが、何故だろう、海斗に呼ばれると悪い気がしない。

まあ、それでも恥ずかしいからまだ駄目だけど……。

「わたしのことはエヴァでいい」

「分かりました、エヴァ」

「それよりも、海斗はわたしをどうするつもりなのだ？ さっきはどうもしないと行ってたが……」

「ああ、はい。私はあなたに何もしませんよ……」

「もしも、あなたが望むなら、いくらでもここにいていいですよ。エヴァが望むならいつまでも一緒に。ちなみに……」

……？ なんだ？

「ここにいるアルメンも、エヴァのように理由があってここで住み始めましたが、今ではもう血よりも深い絆……、家族として一緒に住んでいますよ」

と言ってニコッと笑う海斗……。

「ね？ アルメン？」

「はい、海斗っ」

そうか……、わたしは吸血鬼になって、もう家族というものが出来なくなると思っていたが……。

まさか、こんなところで。もしかしたら……、もしかしたらわたしはまた人として、家族としてやり直せるのかな……。

「どうしますか？ エヴァ？」

「……よろしくおねがいます、海斗、アルメン」

そう私が言うと、海斗とアルメンは目を合わせてニコリと笑って。

「」  
「」  
「よろしくお願いします、エヴァー！」

「さてと……、もう遅いですし寝ましようか。エヴァはこの部屋を  
使ってくださいね」

「ああ、ありがとう、海斗」

「いえいえ、おやすみ、エヴァ」

「おやすみなさい、エヴァ」

おやすみ、か……。

こんなふうに誰かに言われるのは何年ぶりだろうか……。

「おやすみ」

そう言って、二人が部屋を出て行くのを見て、わたしは布団の中  
はいる。

明日からの生活、楽しい日々が待っているという期待感と同時に、  
二人となじめられるか不安な気持ちを胸のなかに抱く。

でも、不思議とすぐに二人となじめてしまう気がする。





勘違いって怖いです。(後書き)

日常って難しいですね、ですが、頑張っ  
て慣れていきたいと思  
います。

ご感想、ご指摘お待ちしております！

ライラックの花。(前書き)

今日は、投稿遅くなってしまいました。

## ライラックの花。

海斗side

「海斗！ 今日こそ、魔法をわたしに教えてくれ！」

最近、私はエヴァに魔法を教えてほしいと頼まれている。

「ですから、エヴァ？ 何故魔法を教えてほしいのですか？」

「だから言っているだろ！ またわたしが奴らに襲われたときのためだ！」

私は理由もなくては教えるわけにはいかないの、毎回理由を尋ねているのですが、エヴァは毎回こう答えます。  
まだ他にもあるような気がするんですけどね。

「他には？ 何も理由はないのですか？」

まあ、たしかに護身用に教えてあげてもいいのですがね。  
頼み方が余りにも必死というか、もっと重要な理由がある気がします。

エヴァにとって重要な理由が……。

「い……いいや？ 何もないぞ、わたしが隠し事なんてするわけないじゃないか？」

エヴァ……冷や汗かきすぎですよ。それでは安易に隠し事がありま

すって言ってる様なものですよ。

エヴァは隠し事が苦手なようですねー、凄く純粋な子です。

「んー……。どうしましょうかねー」

まあ、エヴァにだって言いたくないことの二つや三つあるでしょうし……。

それを無理に聞き出すのは人として駄目ですかね。

「なあ、いいだろ海斗！」

「ふー、分かりました。エヴァがそこまで言うなら仕方ありませんね。ですが、私は人に教えたことはないので、余り期待しないでくださいかね？」

「本当か！　ありがとう、海斗！」

「わたしにも、保健体育とか教えてほしいです…… / / /」

あれ、私は何も聞いていませんよ？　アルメンが開口して最初に不謹慎なこと言うわけありませんよね。

私は信じていますよ、アルメン。

まあ、とりあえず、エヴァの得意な魔法でも調べてみますかね。

石化の魔法は少し苦手なんですけど……、一応魔法だったらなんでも出来るから、教えられないことはないでしょう。

見た感じエヴァは魔力の保有量が高いですから、あとは扱い方だけですかね。

エヴァ side

やったあああ！

今日まで四六時中頼んだかいがあつてか、海斗はついに了承してくれたぞ。

これでやっとあの男に復讐が出来る。

わたしを吸血鬼にしたあの男……。

あのときはまだわたしが弱かったから復讐出来なかったが、海斗に魔法を教わったからには復讐も達成出来るだろう。

……別に海斗に教えてもいいいんだが、復讐のために魔法を教わると言ったら断られるかも知れない。

海斗はきつと分かつてくれるだろう、しかし、もしもこの行為について否定されると思うとわたしは怖いんだ。

でも、家族としていつかは言わないといけないな。

あと、アルメン……、わたしも同意するぞ／＼

ああ！ わたしは何を考えてるんだ！ 最近のわたしは変だぞ……。  
今はいち早く魔法を習得して復讐を果たさなければ……。

海斗 side

「どうやら、エヴァの得意な魔法は氷、闇のようですね」

「おお！ そうなのかー。ところで海斗の得意な魔法はなんなのだ？ 雷はこの前使っていたし得意みたいだったが……」

「全ての属性使えますよ」

「……理不尽だ」

「良い褒め言葉として受け取っておきます」

「褒めてない」

まあ、理不尽なのは事実ですね。

ああ、あとアルメンは自宅で待機しています。

アルメンは気はありますけど、魔力は少ないようですから、魔法は関係ないんでしょうね、偶に見に来るとは言っていましたけど。

「じゃあ、とりあえずこの本読んでおいてください」と、分厚い魔道書を渡す。

「え？ 海斗が教えてくれるんじゃないのか？」

「まあ、私も教えるには教えますけど……。とりあえずその本で魔法の基本でも学んでください」

実際魔法なんて地味なこと繰り返しで、覚えていくしかないんじゃないでしょうかねー。

私がやれることなんてほんの些細な事です。

「う……うむ。分かった」

「あー、あと始動キーでも考えておいてください。じっくりくる奴ならなんでもいいですよ。決まったら儀式があるので言ってくださいね」

「始動キー？ なんだそれは？」

「ああ、魔法の頭に言う必要があるんですよ。簡単なやつだと省略できますけど」

「なるほどな。ちなみに海斗の始動キーはなんなんだ？」

「ああ、一応私の始動キーは、マンマンテロテロですけど……。ほとんどの魔法の始動キーは省略できますから余り聞くことはないでしょうね」

「なんだそのふざけた始動キーは……」

まあ、余り必要ないゆえにナギの始動キーを使ってるんですけど、ね。

「まあ、考えておいてくださいね」

「ああ、分かった」

エヴァ side

始動キーを考えておくように言われてから、その後にはわたしたちはちよつと座学を行って今日の魔法についての講義が終わった。

海斗いわく基本を学ぶことは大事だそうで、この妙に分厚い本を読んだから、海斗が実際に魔法を使うことを教えていくそうだ。

まあ、海斗がやることに間違いはないだろう。



……それで座学を終わらせたわたし達は家へ帰るために歩みを進み  
ている。

「それにしても……、始動キーか。何にしようかな」

「なんでもいいと思いますけどね」

海斗の始動キーは適當すぎると思うが……。

「ん？ 海斗何処行った？」

わたしが指導キーについて考えていると横で並んで歩いていた海斗  
がいなくなっていた。

「おい！ 海斗ー！」

「ここですよ、エヴァ」

わたしが少し心配になったところで、海斗がうしろから駆けてきた。

「まったく、急にいなくなったら心配するだろ！」

「すみませんね、エヴァ。綺麗な花があったので少しだけ摘んでき  
てしまいました。はい、エヴァ」と、花をわたしに渡してくる。

「これは……」

ライラックの花……。

確か花言葉に初恋があったな…… / / /。

「／／／」

「？ どうしました、エヴァ？」

「い……いや。なんでもないぞ！ 綺麗な花だな、海斗、ありがとう！」

「いえいえ」

それにしてもライラックか……。ん、そうだなっ。

「海斗！ 始動キーにはライラックといれてみるよ」

「ん、そうですね。なかなか良いじゃないですかー」

こんな感じでわたしの始動キーはライラックを含み、リク・ラク・ラ・ラック・ライラックとなった。

ライラックの花。(後書き)

ライラックの話はやってみたかったんですけど、ちょっと無理やりになっちゃいました。

ご感想、ご指摘お待ちしております！

覚悟、そしてスク水。(前書き)

今回は、若干シリアスでしょうか。

覚悟、そしてスク水。

エヴァ side

唐突だが……。

この家でのわたしの地位はとても低い。

それは、それは地位を這いずりまわるほどにだ。

と、まあ、そんな前置きはともかく……。

「なんなんだ、この状況は……」

「ふんふーん」

わたしの呟きが聞こえたか、聞こえないかは知らないが、アルメンは鼻歌を歌いながら、わたしを舐め回すように見ている。

見るからに上機嫌のようだ。

その目つきは気に入らないが、上機嫌なのは別にいい、むしろ、家族が上機嫌なのはわたしとしても嬉しいし、それはいいんだ。

しかし、だ。

それは機嫌の良い理由が健全な場合である。

さて、ここでアルメンが上機嫌な理由を教えるところでしょう。

わたしはとある理由によって、あるものを着ている。

黒くてピッチピッチで露出度の高い着物？ アルメン曰くスク水と言っらしい、アルメンが言うには本来学校の体育の時間で使い正式な名称はスクール水着。

これはスクエアアカットタイプらしいが、わたしはそんなことを言われても訳が分からない。

そして、このスク水、東洋の島国で萌えとかいう要素になっているらしい。  
それをアルメンは何処からか仕入れてきたようだ。

今の時代背景は中世のヨーロッパである。(〜千七百年)

仕入れてきたまではいいんだ、また、アルメンが着るのかと思ったからな。

しかし、とある理由……。

いや、これを理由と言っただけのものか。

エヴァ (回想) side

わたしは数年を要して魔法を勉強して、自分で言うのもなんだが結構強くなった。

そこで、わたしはそろそろ奴への復讐も出来るのではないかと考えている。

ちなみに、あの日から数十年がたって普通はもう既に死んでいるのでは？ と思うかもしれないが、奴はまだ生きている。

数年前に調べたが、わたしを吸血鬼としたあいつはその後に自らも吸血鬼となったようである。

わたしとしてはその点感謝している、復讐の相手をわたしはこの手で殺すことが出来るのだからな。

と、わたしは奴への復讐をすることを決意したところで、海斗に頼みたいことがあって、今は海斗のいるリビングにいる。

「ん、エヴァどうかしましたか。神妙な顔つきをして」

海斗はいつも見せる笑顔でわたしをむかえてくれる。

「実は海斗、折り入って頼みがあるんだ」

「……どうかしましたか？」

海斗もわたしの真剣さに気づいてか、真剣な顔になる。

「わたしと模擬戦をしてくれないか？」

「？ 模擬戦ならいつもやってるじゃないですか」

確かに模擬戦はいつもやってる……、だけど。

「いや、海斗が本気をだして模擬戦をやってほしいんだ」

そう、確かに海斗とわたしは普段から模擬戦をやっているけど、海斗は本気でやっていない。

それは海斗がわたしを軽視しているとか、ふざけているとかではなく、海斗とわたしとの実力が離れすぎているからだ。

だけど、今日は本気でやってほしい。今度やるのは実戦、ここで実戦としての経験値がほしいのである。

「エヴァ……」

海斗は何かを考え込んでいるようだ。

やはり、急にこんなこと言っても駄目だろうか……。

「分かりました。エヴァ、やりま……」

「ただいま帰りましたよ、海斗、エヴァ。今度はこんなやつ仕入れてきちゃいました」

……海斗が了承しようとしたところで、また服を仕入れに行ってたアルメンが帰ってきた。

これが噂のフラグブレイカーだろうか……、違うか。

「ああ、アルメン帰ってきてたのですか。おかえり」

「うん、ただいま。ささエヴァ早くこれ着ましようねー」

「ええ！？　なんで!?!」

「いいから、いいからー」

どうして、こっぴどくなった……。

エヴァ side

と、まあ、意味が分からないままにスク水を着せられたわけだが……。  
……。  
というか、アルメン！　永久保存とか言って、カメラでとるな！

ああ、あと海斗はわたしのスク水姿を見て血を吹かしながら倒れてしまったぞ？

……喜んでくれたかな／＼／



「って違う！ アルメン、わたしは何故こんなものを着せられてるんだ！？」

「えーと、模擬戦代つてところでしょいか」

「模擬戦は海斗がやるんだぞ？」

「うんー？ 模擬戦わたしがやるんですけど？」

「……は？」

「どういうことだ、というかアルメンが戦つてるところ見たことないぞ。」

「だから、わたしとエヴァが本気で模擬戦やるんですよ。海斗も了承済みだから大丈夫ですよー」

「海斗が？」

「はい、海斗と話し合った結果わたしがやることにしました」

海斗と話し合った？ どういう意味だ？

「では行きましょーねー」

……わたしが考え込んでいるうちに、いつのまにか、外で結界をしかれた場所に連れて行かれていた、ちなみに海斗もいる。そして、アルメンは今わたしと向かい合っ立っている。

どうやら本当にやるみたいだ、たしかに海斗の話だと膨大な量の気

があるらしいけど……。

アルメンが実際に戦うところなんて見たことがないから、どうにも実感がわかない。

あと、何故まだわたしはスク水を着ているんだ……。これを着て戦うのか？

海斗が見ているのに…… / / /

「では、はじめましょうか。エヴァ、準備はいいですか？」

アルメンがそう言うと、威圧感がわたしを襲う。

それだけで、わたしは分かった、アルメンはかなり強いであろうと。そして、アルメンは本気でくるであろう、そう感じた。

だから、わたしも気を改めて、神経を研ぎ澄まして深呼吸をする。

「……ああ、大丈夫だ。はじめようか」

アルメンはニコリと笑うと、左手に魔力、右手に気を集める。

あれは……。

「咸卦法!？」

魔力と気を合成させてアルメンはそれを纏う。

「つく! 氷の精霊十七頭、集い来たりて敵を切り裂け、魔法の射手・連弾・氷の十七矢!」

始動キーを省略して魔法の矢を放つ。

……しかし、全て手で払われてしまう。

アルメンは瞬動術で距離をつぶして、わたしの目の前へきて拳を叩きつける。

咸卦法で強化されたその拳はわたしの障壁を突き破りわたしの腹に叩きつけられる。

「……………っ！ ガ……………はっ……………」

その衝撃は背中まで貫いた。

内蔵が口から出そうになるほどの痛みがわたしを襲う。

バツ。

痛みを耐えながら、距離をとるために空に上がる。

すると、アルメンは今度は浮遊術を使って空に上がり、虚空瞬動でわたしに近づく。

今度はわたしも拳を出すが全て避けられる。

繰り出した拳のうちのひとつにアルメンはカウンターを合わせる、今度は顎にアッパー気味に入る、アルメンの力にわたしの拳をだす勢いが上乗せされて先ほどよりも強い衝撃がわたしを貫く。

脳を揺さぶられてわたしは地面に落ちる。

「ぐっ……………」

立ち上がるうえにも三半規管がまだ揺れていて、また、わたしは崩れ落ちる。

……アルメンがわたしを殺す気だったら、この時点でわたしは殺されているだろう。

だが、アルメンはわたしが立ち上がるのを待っている、わたしも負

けじと立ち上がり、呪文を詠唱する。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック。来たれ氷精、闇の精、闇を従え吹けよ常夜の氷雪、闇の吹雪！」

今度こそアルメンを捉えた闇の吹雪。

……。だけど……。

「幻影!？」

それは幻影でアルメンは既にわたしの後ろに回りこんでいた。わたしが振り返ると、そこでわたしの意識は途絶えた。

……こんなにも差があるなんて。

海斗 side

アルメンがエヴァを倒すと、私とアルメンはエヴァを運んで家に戻っていた。

しばらくして、エヴァが起き上がった。

「わたしは……」

「起き上がったか、どうでした？ エヴァ？」

「……わたしは何も出来なかった、何も。強くなったと思ったのに……」

エヴァはそう言って暗い顔になる。  
世の中上には上がいる、もちろん私にだって勝てない人はいるだろう。

「最後……。わたしはどうやって倒されたんだ？」

「わたしの右が側頭部に当たって、あなたは気絶しましたよ、エヴァ」

「そうか……」

「それと、エヴァ」

アルメンはそう続けて話し出す。

「このように世の中、上には上がいます。ときには、何も出来ずに終わってしまうことがあるでしょう。ですから……エヴァ。復讐をするなら、気をつけてください」

「なっ……知っていたのか？ どうして？」

エヴァ……、愚問ですね。

それは勿論。

「家族ですから。それぐらい分かって当然ですよ、エヴァ」

アルメンはニコリとそう言う。

エヴァは少しの間驚いた顔をしてポーとしてから、目に少し涙を浮かべて。

「ああ……！　そう……、だったな！」

満面の笑みでそう言った……。



覚悟、そしてスク水。(後書き)

今回の話は家族としての絆を深めたといったようにしたのですが…。  
いかかでしたでしょうか。

しかし書いていて、前衛の大切さを身にしみました。  
ご感想、ご指摘お待ちしております。



さようなら、わたし。(前書き)

今回もシリアスです。

さよなら、わたし。

エヴァ side

アルメンと模擬戦をして数日がたち、わたしは奴への復讐を果たすために、奴のいる暗黒大陸へ南下している。

海斗とアルメンには一応行き場所は教えたが、来ないように言っておいた。

このことはわたし一人でけりをつけたいしな。

「それにしても、ここは暑いな……」

この暗黒大陸へついて数日が経ったが、昨日まではそこまで暑くなかったんだが、今日歩いてきて途中から凄く暑くなった。

前に調べてみたところ、この辺に奴は城を建てて、そこへ一人で住んでいるらしい。

城の名前はレーベンスシュルト城。

こうして一歩、一歩と奴へと近づいていっていると思うとわたしの胸は高まる。

奴への復讐が果たせる、やっと、奴を殺せる。

わたしを吸血鬼にして平穩を奪った奴ヲ……。

吸血鬼になってからの百年は地獄のように思えた。

吸血鬼になり家族には恐怖の目で見られて、家をとびだして他の町に住みだしても、しばらくしてわたしがどこか変だと分かると、まず奇異の目で見られる、そのあとは町を追い出される。

野宿を繰り返したりしても、野生の動物に襲われるし、ときには追っ手に見つかり逃げ回る。

追っ手に捕まる夢を毎日のように見て、ぐっすり寝れた事などはなかった。

そして、わたしはこの世に絶望した、どうしてわたしが不幸にならないといけないの？ どうしてわたしはこんな目にあっているの？

一体わたしが何をしたの？ と……。

自殺もしたかった、だけどこんな体だから生半可なことでは死にはしない、それでも追っ手の奴らには絶対捕まってはたまるかと逃げ回った、奴らに捕まって何をされるかが怖かったからだ。

しかし、いつしかそれすらもどうだって良かったのかも知れないな、もう、奴らに捕まって何かをされても良い、こんな生活はもう嫌だ。そうやって、心の底では全てを投げ出していたのかも知れない。

だけど、あの日わたしの全てが変わった。

あの男に出会って……。

名前を呼ばれたときはまたわたしを捕まえようとする者かと思った、だけど、あの男は違うと言った。

わたしはそのときはまだ半信半疑だったけれど、次に目覚めたときに見たあの二人の姿を見たとき、わたしは救われた気がした。

ああ、今まで生きてきたのは無駄ではなかったと。

海斗、アルメン……、わたしの大好きな人たち、家族。

わたしはもう不幸だなんて思っていない、こんなに楽しい日常があるのだから。

だからこそ、今日わたしはけじめをつけないといけない、今までのわたしとのけりを……。奴を殺して。

……城が見えてきた。

しかし、正直わたしは不安を抱えている、わたしは吸血鬼になったものの今まで人を殺したことがない、わたしは殺すことが出来るだろうか？

……やってみせる。奴を殺さなければ前へ進めない気がする。

わたしは歩みを進めて奴の気配がする部屋の前へきていた。不思議なことに今までドアに一つも鍵がついていなかった。

そして、わたしは奴のいる部屋へと入った。

「……」

奴はいた、わたしの復讐の相手が。

私が最後に見たときのままの姿で、プラチナブロンドの髪、白い肌、整った顔立ち、そして、わたしが一番記憶にしている、人を見下したような青い目。

奴はわたしが入ってきたのに驚いた顔もせずになわたしを観察しているようだ。

そして、静寂が支配しているこの部屋の中で、奴がゆっくりと口を開きだした。

「やあ、ミス・エヴァンジュリン。来るとは分かっていたよ。君の噂は聞いているよ。吸血鬼の真祖として捕縛の対象になってるんだらうか？」

奴はわたしが殺気をこめて睨みつけているのをまったく気にした様子もしないで、相変わらずの人を見下したような口調で喋り続ける。

「クスクス……。そんなに睨まないでくれよ、むしろ俺には褒めて

ほしいくらいだよ。吸血鬼の真祖……、素晴らしいじゃないかー？  
永遠の生、老いない身体、高い身体能力……、まさしく人間を超越した高等生物だよ？ ああ、素晴らしい。君のおかげで吸血鬼化の術は完璧になった。そして……俺も。まあ、残念だけど俺は吸血鬼としての適応力が少なかったみたいで、君よりも劣化してしまったけどね。まあ、いいさ。永遠の生を得たんだからね？ ククク……クク」

奴の言葉にわたしは憤りを覚えるが、わたしはなんとか耐えてみせる。

「それで？ 今日俺を殺しにきたんだろう？ 殺せるのかな？  
この絶対的な力をもつ吸血鬼を……。君だって知っているだろう？  
吸血鬼は死にくいものなんだよ？」

「……。確かにわたしは貴様を憎く思っている。この身体になつてから一度も貴様の顔を忘れたことなどない。絶対に殺そうと思っていた」

「クク……。それは光栄だ」

わたしは奴の耳障りな声を無視して言葉を続ける。

「だがな、失ったものはたくさんあったが、得たものだってある。  
……それは、家族だ」

奴は一瞬キョトンとした顔をしたあと口角をあげて笑い始めた。

「ヒヤハハハハハアア。クククク……。くだらねえ。……高等生物であるはずの吸血鬼が家族……。だあ？ クツクツク……」

「だから……。わたしは貴様には曲がりなりにも感謝しているんだ。だからこそ、今日貴様を殺す。今までの生活が終わり、新しい生活を始めるために！」

「……いいぜえ。付き合つてやるよ」

そういつて、奴は立ち上がる。

「来れ氷精、爆ぜよ風精、氷爆！」

わたしの魔法で、奴のに向かつていくつかの氷が放たれる。

奴は驚いた顔をして動かずにいると、氷は爆発して奴は爆風に巻き込まれる。

爆発が終わつて奴が見えてくる。

「魔法が使えるようになったんだ？ 驚いたぜ。でも無駄だよ。俺は不死だからこの程度の傷はすぐに治つちまう」

そういつて奴はニヤニヤする。

確かにこの程度の魔法じゃ勝負は決まらないだろうな……。

だがっ！

「風の精霊十七人、縛鎖となりて敵を捕まえろ、魔法の射手・戒めの風矢！」

今度は奴も避けるが、タイミングをずらした一本一本の矢のうちの一本が奴に当たり、奴は動きを止める。

その間にわたしは奴の懐まで近づいていた。

「たしかに吸血鬼は死ににくい。だが蒸発してしまえば関係ないだろっ？」

「何!？」

「エクスキューションナーソード……」

剣先が奴に触れ、奴は蒸発する。

「終わった……」

疲れたな、早く帰りたい。

……この城、もう誰も使わないのかな。

さようなら、わたし。(後書き)

思いのほか、前置きが長かった割にあっけなかったですね。  
タイトルは分かりづらいかも知れませんが、今までの自分との別れ  
というのをイメージしました。

ご感想、ご指摘お待ちしております！



不幸とは唐突に訪れるものである。(前書き)

パソコンのオーディオデバイスが直ったので、久しぶりにニコニコ動画で

作業用BGMを聞きながら書きました。

不幸とは唐突に訪れるものである。

海斗side

「終わりましたね……、海斗」

「ええ……、そうですね」

それにしても性根が腐ってる男でしたねー、余りにもウザすぎて、燃える天空を発動しちゃいそうになりました。

まあ、途中でアルメンが隣でキレだして、アルメンを抑え付けてるうちに、逆に私の頭が冷えましたけれどね。

ちなみに、私達が何故ここにいるかというと、アルメンが発狂してるんじゃないか？ というくらいに心配だったので、私がアルメンと一緒に転移してきました。

エヴァが出て行って、しばらくは大丈夫だったんですけどねー。

三日ほどするとアルメンは目が虚ろになり、普段の日課の料理は奇怪なものになりました、寧ろ料理とは言えない物になってましたからね、金属が入ってたり……、刺激臭がしたり……、なんかよく分からない肉が皮がついて入ってたりもしました。

そんなものが目の前に並べていて、普段だったら、「こんなもの食えるか！」と、言うところですが目の前には虚ろな目で鍋を掻き混ぜているアルメン、あとで見てもみたら鍋の中は空で驚愕しましたが……。

まあ、とにかく、目の前にこの事態を認識できていないアルメンがいて、食えるかなんぞ言えるわけがありません……。

幸いにも私は不老不死……、死ぬことはないだろうと思ひ覚悟を決めて一口目を食べてみました。

…… 思えば、このときの私は不老不死だからと、たかをくくっていたのが間違えだったんでしよう。

薄れゆく意識の中、私は思いました。

料理とは一歩間違えば危険なものである、と、まあ、この場合一歩どころではないと思いますけれどね……。

しかし、これはほんの些細な事に過ぎず……。

次に目覚めたとき、アルメンが危険なことになっていました。

コスプレです……、かといってあれは既にもう……。

え、どんな姿かって？ …… 作者が通報されるから言えませんとこの事です。

あれ？ 私はまた何を言っているんでしょうか……、これが電波つてやつですかね。

…… 私はアルメンのコスプレ姿を見てまた意識を失いました、まあ、前のは違う意味で意識を失ったんですけれどね。

他にも数多の出来事が……。

あれ、おかしいですね、目から汗が……。

とまあ、数日のうちに何十と意識を失っていくうちに、ついに耐えられなくなってしまうて、…… アルメンがではなくて私ですが……、私はエヴァの様子を見に行こうとアルメンに提案したわけです。そのときのアルメンといったら……、それはもう虚ろな目が水を得た魚のように回復しましたね。

ヤンデレは絶対に好きにはなれませんね、ヤンデレの方と結婚したら意識がある時間よりも意識を失っている時間のほうが長くなって

しまいそうです。

というわけでここにきたという事です。

「どうしたんですか海斗、辛気臭い顔して？」

……。

「あなたのせいですよ、アルメン……」

「？」

アルメンに悪気はないんです、そうですとも、悪気は……。

ああ、駄目です！ このまま考え続けたら、目から汗が！ もう、忘れましょう。

あれは悪夢……、悪夢……、悪夢……。

私は決して忘れることの出来ないことを忘れようとして一分ほど自己暗示をかけた……。

「ふう……。もう大丈夫です。私はだいじょーぶ……」

「……そうですか、では帰りましょう、海斗」

アルメン、そんな目で私を見ないで下さい。

「ええ、帰りましょうか。……と、その前に」

「どうかしましたか？」

「いえ……、アルメン。このお城って、もう誰も住んでませんよね？」

「……はあ、多分そうでしょうけど」

「では貰っていつでも問題ありませんよね？」

「……海斗？ まさかあなた……」

ツフ……。リサイクルって言葉知っていますか？ ……違うか。

「まあ、こんな立派なお城もつたいないですしね」

「ですが、どうやって持ち帰るんです」

「まあ、それはこれを使えば大丈夫ですよー、っと」

ダイオラマ魔法球を地面に置いてみせる。

「なんですか、それ？ というか、何処から出したんです。」

「これはダイオラマ魔法球……、まあこの城を入れられる入れ物ですかね。あと何処から出したかというところの影から魔法で、ね」

この魔法便利なんですよねー！。

影を使う転移魔法を色々といじくって作って、影を倉庫代わりにすることが出来るようになったんですけれど。

副産物としてこの倉庫の中は時間が止まっていて、……まあ、つまり食料とか金属とかの劣化を防げるわけですね。

容量は無限大とまあ便利な魔法な訳ですね。

「それは便利ですね。それでどうやってその中にこの城を？」

「そのへんは私に任せてください。簡単に終わるんで安心して下さい」

「……城をダイオラマ魔法球に移動させてから私たちは家へ転移したんですが。」

「不幸だ……」

家が燃えてました。あ、目から汗が……。

不幸とは唐突に訪れるものである。(後書き)

ご感想、ご指摘お待ちしております。

スレッドの下は男の夢。(前書き)

今回は若干グロ注意です。



## ベッドの下は男の夢。

海斗 side

「ハ……ハハハ……ハ、ハ……」

盛大に燃えていますね。

そりゃ私の手作り、ほぼ木製のログハウスですからねー、それはメラメラと燃えていますよ。

「いやいや海斗、現実逃避はやめて下さいよ」

アルメンは私に冷静に突っ込みを入れてから、何かを思い出したのか、健康そうな小麦色の顔がみるみると青くなっていく。どうしたんでしょうか。

「コ……コスチュームが……。あ……。ああ……。あああ！」

……それは災難でしたね。

アルメンの部屋を最後に見たときは凄い量の服がありましたからね。あんなに集めるには多量の労力と多大なお金が必要だったでしょうに……。

「……………つハ!？」

私は隣で地面を殴りながら泣き散らしているアルメンを見ながら、他人事のようにそんなことを考えていたら、私も重要な事を思い出した。

……私の秘蔵の本があああああ！ そんな……馬鹿な……、冗談はよしてくれよ……、あれを集めるのにどれほどの労力をかけたか……。  
こんな時代ですからね……、私の好み合う本があるわけないので……。  
それでも！ 私は諦めずに、とある画家さんに私の欲求の好みを理解させるために、試行錯誤を繰り返して多大な時間をかけて……、画家さんに理解してもらい、オーダーメイドした私の前世での本のクオリティにも負けずとも劣らない最高の本が……。  
ツク……。  
こんなことならベッドの下などに置いておかないで影の倉庫に入れておくべきだった……、前世での習慣が仇になりましたか……。

「……クソ野郎おおおおお！」

私とアルメンは怒りの矛先がないので地面を殴り続け、二人で嘆き散らしまくっていた。

地面がクレーターと化したところでこのカオスな二人に話しかける男たちがいた。

「おい、お前吸血鬼か？」

男たちは気づいていなかった、話しかけることがBADENDへ直行する選択肢だと。

「……これはあなたたちがやったんですか？」

アルメンは泣き散らすのをやめて、顔をうつむかせながら男たちに聞いた。

「アア？ そうだよ、それがどうしたんだよ。そんなことよりよオ、こっちが質問してんだよー、答えてくれないかな？ 可愛いコちゃんよオ」

「ていうかよお、こっちの男は吸血鬼じゃねえか？ 情報どおりのアジア系の顔してるしさあ」

アルメンと海斗の顔は俯いていて男たちに見えてない。だから男たちは流暢に会話を続けている。

その背中がかすかに震えていることにも気づかずに……。

「アルメン、一人だけ残しておきなさい。いいですね？」

「……それ以外は？」

「消しなさい、塵も残さずに影すら残さずに……」

「了解しました」

私がそう言つとアルメンはバツと立ち上がる。

そこで初めて男たちは自分たちが作り上げた死亡フラグに気がついたようで、あからさまに動揺しだす。

フフ……、もう遅いですよ？ 手遅れです、私とアルメンの逆鱗に触れてしまつてしまつたんですからね……。

そして、数人ばかりいた男たちは何か抵抗したようだけど、一人を残してアルメンに消し飛ばされた。

そして今、両足を引きちぎり無力化した男が私の目の前に落ちていく。

殺してはいませんか？ 丁重に止血させてありますし、ショック死も出来ないようにしましたしね。

さあてと……、私達に喧嘩を吹っかけてきた勇敢な馬鹿に事情を聞きましようかねー。

「どうして私のことを探していたんですか？」

「ひい！？ それは……」

ん……、まだ口を閉ざす努力が出来ますか。凄いい思いですねー、尊敬しますよ。

「んー、仕方ありませんねー」

「何を……！？」

……ビリビリ。

私は無言で皮膚を徐々に引き剥がしていく。今度は痛覚もありですけどねー。

「がああああああ！ ……やめ……、やめてくれ！ 言うから！ 許してくれ！」

「最初からそうすればいいんですよ」

「……でもよお、俺たち雇われたただだからさあ余り詳しいことは分からないんだよ」

「誰に雇われたんですか？」

「あー、なんか『完全なる世界』とか言ってたか？」

聞いたことありませんね。

「聞いたことありますか、アルメン？」

「いえ、ありません」

「そうですか」

まあ、その組織がなんにせよ……。

やられっぱなしというのは私の性分に合いませんね。  
また襲われたら、嫌ですしね。

「……で？ 他には何か知っていますか？」

私は地面に落ちている虫けらにまだ情報があるかもしれないので聞いてみる。

期待してませんけれど。

「え？ いやさ、俺雇われの身だからよ、余り分からないわけよ」

「そうですか……、残念です。ところで、両足ないんですし、両腕もカットしてみませんか？ ああ、答えはきいていませんけど」

「ええっ！？ おいおい、情報あげたる？ 許してくれよ」

「残念、私取引なんてした覚えはないですし。それに大した情報もないじゃないですか。しかも、人の家燃やして無事でいられるなんて考えているんですか？ 残念なコですなー」

実際、私怒ってるんですよ。

長年住んできて愛着のある家を燃やされたり、秘蔵の本燃えたり、秘蔵の本燃えたりとかして……。

「わたしがやりますよ、海斗」

「ああ、ありがとうございます、アルメン。ついでに皮も全部剥いでおいて下さい。あとオプションで顎も砕いてその耳障りな声も聞こえないようにしてください」

「ラジャー、ボス」

「お、おい！ やめ……、ぎゃアアアアアアアア！」

あー、うるさいですねー。

それにしても、『完全なる世界』コズモエンテレケイアですか、厨二なネームですね、そういう人たちの集団に襲われたなんて嫌ですね、仮にですけど。

もしかしたら、魔法世界とかにも行かないと行けないですかね、ダールですねー、手続きとかいるんですかね、不法入国でもしましよるか。

私はそんなことを考えながら燃え跡を歩いて、考えがまとまったところでアルメンのところへ戻った。

アルメンはスッキリとした顔で私を迎えてくれました、怖いくらいです。

余談ですが、アルメンは私の指示したことにさらにオプションとして眼球と鼓膜を抉ったみたいですね、残ったのはただの肉塊でした。

「それでこれからどうしますか、海斗」

「そうですね、『完全なる世界』について調べたいですし魔法世界にも行ってみようかと思うのですが……、魔法世界について調べてからのほうがいいですね」

事前の準備は大切ですね。

「ということでエヴァが来るのを待ってから、日本に行きたいと思っています」

「日本？」

「んー、まあ、前に住んでいたことがあって久しぶりに行ってみたいんですよね」

「なるほど、わかりました」

久しぶりですね、日本。

あっ、でも今は江戸時代ですかねー、まあ、いいでしょう。さてと、これからどうなることやら……。

スレッドの下は男の夢。(後書き)

感想、指摘お待ちしております。



タダより高いモノは無い。

海斗side

私とアルメンは新しい住まいを求めて日本に訪れた。  
ちなみに今の時代鎖国真っ只中だったから不法入国ですけど、テヘ  
ッ

「結局エヴァは見つかりませんでしたね」

アルメンは暗い顔でそう言う。

「またいつか必ず会えますよ。エヴァも強くなりましたから無事な  
はずです」

あのあと私とアルメンは数日の間焼け跡でエヴァを待っていたけど、  
結局エヴァは帰ってはこなかった。

私とアルメンはユーラシア大陸とアフリカ大陸を探し回ったけど、  
エヴァは見つからず、私はエヴァと行き違いになったと無理やり結  
論付けた。

余り考えたくはないけれど『完全なる世界』の連中がエヴァを攫っ  
ていったかもしれない。

しかし、私はその可能性は余りないと考えている。  
もしもエヴァも帰り道に私たちと同じよう襲われたとしても……若  
干ひびですね……えーっと、もしも襲われたとしても私たちを襲っ  
てきた連中ぐらいだったらエヴァならば余裕で勝てるので、エヴァ  
が攫われたとは私は余り考えられません。

ですから私はエヴァが無事だと信じています。

「アルメンそんな暗い顔しないで下さい。きっと大丈夫ですよ」

「……そうですね」

口ではそう言っているけれど、アルメンは相変わらず暗い表情です。アルメンはエヴァを可愛がってましたから。

「ほらっアルメン！ あれが日本の城ですよ」

「……わぁ」

アルメンは日本の城の形に興味を持ったのか、暗い顔を少し明るくさせてくれました。

「凄いです海斗！ ここについてから思っていましたけど、日本の文化は凄いですねー」

「そうですねアルメン。日本は凄いです」

私の記憶にある日本ではないですけどネ。

だから今、私は昔の日本を見て新鮮な気持ちになっている、見るものが新鮮なものですから若干観光気分です。

「気に入ってくれましたか」

「はい！ とても良い国です日本は」

「そうですね、良かったです。もう少し観光していきましょーうか」

「はいっ」

そのあとにでも住まい探しにでも行きましようかね。  
一応場所に関しては検討がついているのであとは建てるだけですけ  
ど。

「海斗！ リアル巫女さんですよ！ 萌えますー」

「そ……そうですね」

気に入ってもらえて良かった……です？

私たちは適当に観光巡りを楽しんでから、新しい住まいを建てるべ  
くある場所へ向かっている。

別に大した事でもないんですけど、世界樹のあるところの近くにで  
も建てようかと思っています、魔力だまりとか何かに利用できるか  
もしれませんからね。

もしも既に民家等があったら諦めますけどね、私は基本的に人と関  
わりたくありませんから。エヴァやアルメンは別ですけどね、家族  
ですから。

「何処へ行くんですか、もう森の中ですよ？」

「そろそろだと思えますよ。アルメンも感じとれませんか？ この  
魔力を」

「確かに凄い魔力を感じられますけど……」

私は一度も日本に来たことがありませんが、世界樹の魔力を頼りに

歩いています。

こんな私ですが魔法に関してはこの世界で頂点に近い位置ですからね、魔力には敏感です。しかも世界樹の魔力は膨大ですから場所を特定するのは容易です。

それはともかく、これほど木が生い茂っているのなら人は余りいなそうです、人気がなさそうで助かりますねー、これならこの辺に家を建てられそうです。

「ほら、見えてきましたよ。あれが世界樹です」

「……？ つえ？ あれ、木…なんですか？」

「木ですよ……。たぶん」

アルメンは世界樹を見て、呆然とした様子で世界樹を見上げています、右に同じで私も驚愕しています。

一応森羅万象の魔法に関する知識で、知識としては知ってはいましたけど実際に見てみるのとはまったく違います、というか、タケエ！。

私は世界樹に近づいて何気なく触れてみる、近くで見ると更に高く感じます、ここまで高いと既に驚愕を通り越して感動を覚えますね。

《ようこそ、海斗。此処はあなた方を歓迎しますよ》

私は突然頭の中で流れる言葉に驚くけれど、すぐに意味が分かって微笑んでみせる。

「ありがとうございます、世話になります」

「何を言ってるんですか、海斗？」

「いえ、何でもありませんよ。さて家でも作りましょうか」

「分かりました」

私たちは世界樹から数キロ離れたところに家を建てた、勿論ログハウスですよ、私木製じゃないと駄目なんですよ。燃やされる？ だいじょーぶですよ、きつと……絶対。一応人払いの術はかけておきましたし。

「良い家ですね、ログハウスですけど」

私が新しく出来た家を見ながらまた家を燃やされる危険性について考察していると、アルメンもまた家を見ながら話しかけてきた。

「そうですね、ログハウスですが」

「……ところで海斗。今更ですけど家が燃やされたとき海斗は何故あんなに怒ったのですか？」

「……え！？」

「何故そんなに動揺しているか分からないのですけど」

本当に今更ですね、てっきりその事は綺麗に流されたのかと思っていたんですけど。

というかこれは不味いですね、アレの事は口が裂けても言えませぬしね。

落ち着け私…… KOOLになるんだ、ここは嘘も方便です。

「えーっと。それは勿論家が燃やされたら誰でも怒りますよ?」

「嘘だ!」

速攻でバレた! しかも何故アルメンがそのネタを……。

「海斗……。海斗は気づいていないかもしれませんが、海斗は嘘をつくとき必ずこめかみを掻く癖があるんです。それで本当のところはどうなんですか?」

「……実は」

私は観念してアルメンにアレの事を話したら、アルメンはキレたり泣いたりと忙しかった。

勿論私だって反論しましたよ、私も健全な男なのであの手の本は大好きだって、あの手の本というのは(r y

結局私はもうそういう本を収集しないということでも落ち着きました。

新しい家に慣れ始めた頃、エヴァと私が賞金首になったと言っ事を知りました。

賞金首になったという事は、エヴァは生きているということでしょうから安心しました。勿論賞金首になったのですから危険なことに変わりはないですけど。

それにしても私も賞金首ですか、私は自分のことを特に良い人とは思っていませんから余りシヨックは受けませんでした、私は成り行きとはいえ人をたくさん殺してきましたしね。

それから更にしばらくして、私は『完全なる世界』について調べ始めました。

しかし数年を費やしても結局何も分かりませんでした。

「ということでアルメン。私はこのまま此処で調べ続けてもギリ貧だと感じたので、魔法世界に行こうかと考えています」

「……それはまた唐突ですね」

「無理なのは分かっています。しか……」

「いいですよ」

「しかし私は……っへ？ いいんですか？」

「いいですよ。あとわたしは家で待っていますね、連れて行ってはもらえないでしょうっし」

「っっ……」

「クスッ。分かっていますよ、海斗。魔法世界は危険だからわたしを連れてはいけないのでしょうか？」

「アルメン……」

「でも！ なるべく早く帰ってきてくださいねっ。わたしも寂しがりやなんですから」

「分かりました。迅速に帰ってきますっ！」

「気をつけて行ってきて下さいね」

「行ってきます！」

こうして私は魔法世界へ行くことにした、しかし……。

「どうやってゲート通りましょうかね」

よく考えたら私は賞金首ですから、そう安々と通してくれるとは思えません。

これはまた不法侵入ですかね、なんだか楽しくなってきました。

私は悩んだ末に年齢詐称薬と少しばかり見た目が変わる魔法具を使ってゲートを通ることにしました。

こうすれば賞金首としての黒田海斗には見えないでしょうしね、結果的に楽にゲートに通る事が出来ました。

いやー、結構ちよろいもんですね、人を騙すのなんて簡単なもんですよ！

ドガアアアアン。

私は思うとおりになって有頂天になっているとゲートの方から爆発音が聞こえた。

「へ？」



私はゲートの方へ走り出すと見えてきたのは見事に破損したゲートでした。  
不味いですね、これであちらへ帰ることが出来なくなってしまいました。  
しかも、すぐに帰る予定でしたからお金もほとんど持ってきてないので食料も買えそうにないですね。

……アレ？これつんだ？



タダより高いモノは無い。(後書き)

感想、指摘お待ちしております。

「パンがなければお菓子を食べればいいじゃない」「……これ、あげまじょうか

テオドラス side

妾は今とても困っておる。

妾は王宮を抜け出していて親衛隊に追われているのじゃが、それはいつものことじゃ。

それよりも困っているのは目の前に倒れている男がいるのじゃ。

「ぬ……主、大丈夫かの？」

「……め……飯」

飯？ 今飯と言ったのか、行き倒れじゃったか。ならパンがあるからこれを。

「飯じゃないが、パンならあるぞ？」

妾がパンを差し出すと、行き倒れの者は目にもとまらぬ速さでパンをとって貪り食いだした。

そのあと行き倒れの者はパンを食べ終わると、申し訳なさそうな顔をしてこちらに顔を向けてきた。

「ありがとうございます。この借りは絶対返しますから」

「よい、よい。妾の目の前で人が死なれても困るのじゃ。それよりそなた名前をなんといい」

「……私の名前は黒田海斗です」

「くろだ……くろだかいと。珍しい名前じゃのう」

「旧世界の者ですので」

「おお！なるほどのう。かいとと呼ばせてもらうぞ！ 妾の名前は……」

「テオドラ様ー！ 此処にいましたか。さあ、王宮に戻りましょう」  
妾が名前を教えようとすると親衛隊の者がきおった。

「嫌じゃ！ まだ妾は外で遊びたいのじゃ。かいとつ、逃げるぞ！」

「この方たちから逃げるのですか。なら私に任せてください、私はあなたに借りがありますからね」

「ぬ？」

妾は言葉の意味を理解することが出来ぬまま、自分の影に溶け込んでいった。次に瞼を開けたら既に景色は変わっていたのじゃ！、まる

海斗side

ゲートが壊されてるのを見た私はめげずに町を目指して歩き出した。身体強化をした私は通常よりも速い速度で歩き続けた。しかし私は極度の方向音痴、町につくまでに何度か道に迷ってしま

った。

あとあと考えてみれば空を飛んで町を確認すれば良かったのかもしれませんが、このときの私はゲートが壊されたショックと段々と募る空腹感によって頭がまわっていかなかったたのでしよう。

「お腹が減りました。腹に穴があきそうですー」

刻一刻と意識が遠くなってゆく私はついに町を見つけました。

私は歓喜に身を任せてその場で跳ね上がりました。しかしそのたった少しのアクションで空腹感が私を襲います。

不味いです、このままでは私は飢餓で死んでしまいます。

私は最後の力を振り絞って食事をする憩いの場所を探し出しましたが、ついに限界がきて私は路地の真ん中で倒れてしまいました。

「ぐ……………ここまでですか……………」

私はもうここまでかと思い、走馬灯が頭を流れ出したとき。

「ぬ……………主、大丈夫かの？」

褐色肌の少女が私の目の前に現れたとき。

「……………め……………飯」

「飯じゃないが、パンならあるぞ？」

私は考えるよりも早くパンをとって食べだしました。それにしても何処にフランスパンなんてしまつてあつたんでしょうか。

フランスパンを食べ終えて頭の回転が良くなっていくと、見苦しいところを見せてしまった恥ずかしさと申し訳ない気持ちが出てきま

した。  
取りあえず感謝しないといけませんね。

「ありがとうございます。この借りは絶対返しますから」

「よい、よい。妾の目の前で人が死なれても困るのじゃ。それよりそなた名前をなんといい」

名前ですか……、賞金首なんですけど大丈夫ですかね。

助けてくれた人に偽名は論外ですし仕方ありません、バレたときはそのときです。

「……私の名前は黒田海斗です」

「くろだ……くろだかいと。珍しい名前じゃのう」

「旧世界の者ですので」

「おお！なるほどのう。かいとと呼ばせてもらつぞ！ 妾の名前は……」

「テオドラ様ー！ 此処にいましたか。さあ、王宮に戻りましょう」

「嫌じゃ！ まだ妾は外で遊びたいのじゃ。かいとつ、逃げるぞ！」

ムフ…… 借りを返すチャンス到来ですね。状況は全く理解出来ませんが。

「この方たちから逃げるのですか。なら私に任せてください、私はあなたに借りがありますからね」

「ぬ？」

私は影を媒体にした転移魔法を使った。

恩人はまだ状況を掴めていないのかキヨロキヨロと周りを見ています。ちなみに今の場所は町外れの草原です。

それにしても何故追われていたんでしょうか？

「かいと、此処はどこじゃ？」

「ここは町から10キロほど離れた草原ですよ。私の魔法で転移してきたんですよ」

「おお！ かいととは実は凄いやつだったんじゃないな。そういえばさつきは名乗れなかったが、妾の名前はテオドラじゃ、テオで良いぞ！  
あとこう見えても妾は皇女なのじゃッ」

テオドラですか……。ん、というか皇女？ そういえば先ほどの人たちもテオドラ様って言うてましたね。もしかして先ほどの人たち……。私は非常に不味い予感がするんですけど。

「テオドラは先ほどどうして追われていたんですか」

「ん？ それは妾が王宮を抜け出したからじゃ。それと妾のことはテオと呼ぶのじゃー！」

「……………王宮を抜け出した？」

「そっじゃッ」



ということとはつまり私は王宮を抜け出している皇女であるテオドラを連れ出してしまったと……？

不味い、このままでは私は皇女を攫いだした男になってしまいました。ただでさえ賞金首なのに……。

「テオドラ……、王宮に戻りますよ」

私は抵抗しているテオドラを無理やり王宮へと連れて行った。

王宮へと連れて行った私は親衛隊の人たちに捕まりかかりましたが、テオドラが私と出会った経緯を話してくれて捕まらずに済みました。借りが増えてゆくばかりですね。

今は王宮の一室でテオドラと親衛隊の数人の人たちと一緒にいます。あと親衛隊の人たちが慌しく話し出したのを聞くと、私は壊されたゲートは私を通った一つだけかと思っていたのですがどうやら全てのゲートが何者かに壊されたようです。

というか結構これは深刻な事態ではないでしょうか。

まあ私はしばらくの間こちらへ滞在してればいいのでしょうか。

「しかし……何処に住みましょうか。また家でも作りましょうかね」

「かいとは住む場所に困っておるのか。なら此処で住んでみてはどうかの」

「「えっ!?!」」

私と親衛隊の人たちはついついハモって驚いてしまいました。

「テ……テオドラ様！ こんな見ず知らずの男を……」

「大丈夫じゃ。少し話してみ分かったが、かいとは悪いやつじゃないぞ。少なくとも妾に危害を加えることはないじゃろう?」

「まあ、恩を仇で返すことはありませんが……」

「そうじゃろう? 大丈夫じゃ、そなたたちもその内、かいが悪いやつじゃないと分かるはずじゃ」

「良いんですか、テオドラ」

「よいよい、困ってる者も助けられんようじゃ皇女として失格じゃ! それに……」

「それに?」

「ついや! なんでもないぞツ。そんなことよりテオドラじゃなくてテオと呼べと言ったじゃろ!」

「はあ……」

まあ、私としては助かりますが。

それからゲートが直る間、私は王宮に住むことを決めた。



「パンがなければお菓子を食べればいいじゃない」「…これ、あげましょうか  
作者はテオドラが大好きです。ですが作者の文才のなさと劣化して  
しまつのが悲しいです。  
ご感想、ご指摘お待ちしております。

死亡フラグ？何ソレ、おいしいの？（前書き）

リライト中……

死亡フラグ？何ソレ、おいしいの？

海斗side

赤い手。

女性の鳴き声。

落ちる、落ちる、何処までも。

チツチツチツチツ、小鳥のさえずりが聞こえる。

私は目を覚ましていく。

「……ん」

また前世の夢を見ていた……。

私は前世の記憶をほとんど忘れている、だけど偶に前世の夢を見る、内容は覚えていないけれど、前世の夢を見たことは分かる。

だけど、特に私は前世のことは気にしてはいないし、楽しいこともあったとは思えない、覚えてないけど。

だからまあ、前世のことは。

「どうでもいいか……」

話が変わりますけど、私が魔法世界に着てから一ヶ月ほどが経っているが、ゲートは一向に直る様子はないようである。

ゲートを壊した犯人も見つかってはいない。

だから私は気が引けますが、テオドラの親切心に感謝しつつ、まだ王宮に住んでいます。

ちなみに私が魔法世界へ来た本来の理由である『完全なる世界』を調べることですが、まったく分かりませんでした。

ぶっちゃけ、段々と私は調べるのがダルくなってきました。

一応まだ諦めてはいませんが、私をここまで手間取らせる組織にはそれなりにやり返すつもりです。

まあ、組織の全貌が掴めないと何も出来ませんけどね。

それにしても色々なルートから調べているのに全く情報がないところを考えると、とても三流な組織とは思えません、結構奥の深い組織なんでしょうね。

実際、私が『完全なる世界』を調べだしてから最近になって、色々な人が私の命を奪おうとやってきましたしね、皆フルボッコにしましたけど。

それにしても先ほどから王宮の中が騒がしいです、何かあったんでしょうか。

「かいとッ。大変じゃ！」

私がフラグを建てたところを、テオドラと親衛隊の数人が私の部屋に慌てた様子でやってきました。

「どうかしましたか。そんなに慌てて」

「それが連合の国々が此処へ攻めてきておるのじゃッ」

なるほど、最近になって南と北の国々がゴタゴタしてきたのは知っていましたか……。

「慌てないで下さいテオドラ。すぐ近くまで来ているというわけで

はないのでしょうか?」

「それは……、そうじゃが」

「それで? 私のところへ来たという事は何か伝えたいことがあるんでしょう?」

「う……む。実はかいつにも戦線へ行つてほしいのじゃ。かいつは実力もあるのじゃろう」

「フム、まあ分かつてはいましたけどね、別に予想していただけで嫌なわけではありませんよ。」

「むしろ溜まりに溜まったテオドラへの恩を返すときがきた大チャンスですからね。」

「かいつ……。もしもかいつが嫌なら別に戦いに行かなくてもよいぞツ。その場合はかいつにももしかしたら此処から出てもらうことになつてしまうことになつてしまつかもしれないが……」

「おや、それでは脅しに聞こえてしまいますよテオドラ?」

「ツ……。違うのじゃ! 実はかいつの事を知っている他の者たちがかいつに戦線へ行くように伝えろと……」

それを聞くと私はニコリとしてテオドラの頭を撫でる。

実はそのことも予想してましたし、先ほどの発言はテオドラをからかつただけです。

何故予想していたかというと、『完全なる世界』の刺客が私を殺そうと一度この王宮にきたんですよね。そのときに私がそいつをフルボッコにするとところを誰かに見られたというところでしょう。



故にテオドラが私にそんなことを強要するとは思えないから、私が戦闘の役にたつと考えたお偉いさんがテオドラに私が戦闘に参加するように伝えろと言った、と私は予想したわけです。

「それでかいとは戦線へ行くのか？ 正直妾はかいとに行つてほしくない。もしもかいとが死んでしまつたらと思つと……」

悲しそうな顔をするテオドラ……。

私が此処に来てからたつた一ヶ月ですがその間でたくさんのテオドラの表情を見てきました。

テオドラは優しいコ、私とは違つて人を思いやることができる。

……私とは違つて？

何故か私は自分の考えたその言葉が気になつたけど、すぐにどうでもいいことだと思ひ思考を元に戻す。

「……テオドラ」

「む？」

「私は行きます」

「ッ……」

テオドラは私の宣告を聞いて泣きそうな顔になる。

私は自分のことを特にいい人とは思つていない、だから基本的に人を助けたり救つたりすることはない。

ただどそんな私ですが一回親しくなつた人には親身にすると決めています。

「それに……この国の者でもない私を戦線へ出るといつくらいです。今は緊急事態なんでしょう。つまりこの国の危機。故にテオドラの危機です」

もしもこの戦いに負けてしまったら、敗戦国の皇女であるテオドラの命が無事であるということになるとは思えない。

「私はテオドラには死んでほしくないのです。たった一ヶ月の付き合いですが、その間に私の中ではテオドラのことが私にとって大事な者にならなくなっていきました。私は大切な者と一度決めた者には親身になると決めています、これは私のポリシーです」

「かいと……」

「それに私は死ぬつもりはありません。生きて帰ってきます」

これは事実、私は私が死ぬところをイメージ出来ない。

私が此方へ転生する際に貰った二つの能力。

これらを授かった際にはまだ私を超える者がいて、私を殺すことは可能であろうと考えていい。

しかし、この長い年月の間に私はとある魔法を完成させた。

森羅万象の魔法に関する知識で全ての魔法が使えるのではと思うかも知れないが、この力は森羅万象、つまり宇宙にある全ての魔法に関する知識と私の知識を共有させるというもの。

つまりこの世界にある魔法しか使えない。

結局私が言いたいことはこの世界にはない魔法を完成させたということである。

まあ私がやったことはこの世界の魔法に手を加えていっただけで、新しい魔法というよりはこの世界の魔法の改良版といったものかも知れませんがね。

話を要約すると、私はこの世界にない魔法を開発してその魔法によって、私が死ぬことはほばないということである。

実際現在もその魔法は展開されていて、仮に今私に向かって弾丸が飛んでこようと私は死ぬことはない。

「私はテオドラに借りがあります。たくさん借りが」

「……」

「……ですから私が恩を返さずに死ぬことはありませんよ？」

「……約束じゃぞ？」

「約束です」

私とテオドラは小指を交えた。

と、まあ私は死亡フラグを量産して、今は敵が大量にいる敵陣の真上に浮かんでいるわけですが。

死亡フラグを建てたからといって悪いけど、死にませんよ？

何故単騎で敵陣の真ん中にいるかというと、実は言う私以外の味方が誰一人いないからです。

別に見捨てられたわけではありませんよ。

むしろ私が無理を言って私以外だれもこの戦場に味方を出さないようにとお願ひしたぐらいです。

何故そんなことをしたかというと、私がこれからやることは敵、味

方問わずにとある地点以外のものを殲滅させるというものだからです。

とある地点というのは今私が浮かんでいる場所。

……そろそろ下にいる敵さん方が騒いできたので降りますか。

スタツ。

地面に降りてみて改めて思うのは辺り一面が人だらけ、飛空艇もたくさん飛んでいます。まあ戦場だから当たり前ですが、かのガンダールヴの心境も分かりかねますね。

ああ、それにしても……。

これほどの人間を私は消すことが出来るんだから。

私はなんて……幸せなんだろう、此処にいる人たちを皆壊すことが出来る、殺すことができる。

アアアアアアアアアアツ。

素晴らしいツ、最高だツ。

ああ、まあ厳密には殺すわけではありませんが、本来であればグチャグチャのミンチにしてあげるのですが……。

今回はちよつと人数が多すぎますからね、手間がかかります。

私が一人一人の血と肉の感触を味わい、命乞いの声、最後の叫びを聞けないのは残念ですね。

私……狂ってますね。自覚はしていたんですがね。私はあのことをきっかけに狂いはじめたのを。

あのこと？ あのこつてなんでしたっけ？

まあ、いいでしょう。

今はこれからやる一瞬の出来事を楽しめば……。  
これからやることは国土練成、美しい殲滅方法、体を傷つけることなく魂だけを抜き取る美。

私は手を合掌させる、そしてその両手を地面につける。

その刹那、青白い閃光が辺りを照らす。

敵さん方は状況が理解出来ずに騒ぎ出す。

「さあ……、皆さん。賢者の石の材料になって下さい」

たった数分間に数十万といた人間は一人を残して息絶った。



死亡フラグ？何ソレ、おいしいの？（後書き）

国土練成には五つの事件と練成陣の作成が必要ですが今回は省かせていただきました。一応本文中には描写はありませんがそれらのことはやったと思っただければ助かります。

ヒヤッハアアアア！どうしてこうなった！？そう思ったときは因果応報？

海斗side

私は国土練成を成功させてから王宮に戻るためにヘラス帝国の町に戻りました。

途中でまた私の固有能力である方向音痴が発動して、迷子になりましたが、前回とは違いしっかりと空から町の方向を探りましたよ。

フッフ、私だって馬鹿じゃありません、同じ轍は二度と踏みません。

そして町に着いた私は久しぶりの買い物を済ませて王宮の前にいます。

「少し買いすぎちゃいましたね」

大量の服を購入した私の姿は、ランドセル持ちのゲームでじゃんけんに負けた小学生をイメージしてして頂ければ分かりやすいでしょう。

つと、そういえば。

「これを忘れてましたね」

私は影の倉庫の中に服の入った袋を入れる。

私は何処かうつかりしています、自分ではしっかりとっているつもりなんですけどね。

これが世間一般で言う天然属性ってやつですかね。



いやいや、私みたいに中身おっさんの野郎が天然でも萌えは感じませんね。

天然は可愛いコ限定です。

私の場合はボケてきたという表現の方が正しいでしょうね。  
アルメンにもよく言われてましたし。

そういえばアルメン元気でしょうか。

こちらのゲートは全て壊されてますし、旧世界はこっちより時間が経つのは遅いでしょう。

私はいつも通りにどうでもいいことや、私にとって重要なことを交互に考えながら王宮の中に入っていった。

王宮に入る際に、私が此処に住み始めてから見慣れてきた親衛隊の一人に私が帰ってきましたよ、と言ったら幽霊でも見るような目で見られたのが若干ショックでしたが、華麗にスルーをしてもうすぐ私の部屋に着くところです。

テオドラいるでしょうか。

ちなみにテオドラは私が王宮に住み始めてから私の部屋によく現れます。

テオドラは皇女なのでしょうけどまだ子供ですからね、仕事も少なくて暇なのでしょう。

「ただいま帰りました……ブホアアアああッ!？」

なんででしょう、私が部屋の中に入ると急に私の腹へと何者かがタックルしてきました。

まあこの場合タックルする相手なんて決まっていますかね。

「ゴホッ。ゴホッ。……まったく、痛いですよテオドラ」

私はテオドラのタックルで半ば涙目になりながら私の腹に顔を埋めこんでいるテオドラに文句を言う。

しかしテオドラからはいつまでたつても返事は来ず、少し沈黙が流れたところでテオドラは私の背中に手を回してきて更に強く顔を埋めこんでくる。

「テオドラ……？」

「……グスッ」

「……泣いているのですか？」

「……か、かいとが悪いんだぞッ。かいとは一人で連合の者達を相手にして……。妾は海斗が死のうとしてるのかと思った。自分を犠牲にして連合の者達と一緒に死ぬのかと……」

「約束を……。約束を破られたかと思った」

「ですが……。私はこうして生きて帰ってきましたよ。テオドラとの約束通りに」

私がそう言つてやると、テオドラは弱弱しく小さい声でしかしその小さく儂い声に絶大な歓喜の気持ち溢れ出ている、そういった声で良かった良かったと私の腹に顔を埋めこみながら復唱する。テオドラがそうしている間、私はテオドラの頭を撫で続けた。

「……そうじゃ、かいとは生きて帰ってきてくれた。こうやって帰ってきてくれた」

「はい」

「じゃが、どうしてじゃ？ どうしてもっと早く帰ってきてくれなかった、かいはこうして見てみると無傷じゃ。負傷をしていない、そんなかいとだったらもっと早く帰ってこれたじゃろ？」

「っあゝ」

い……、言えない。

自然の景色を堪能しながらまったりと帰り道を歩きたかったから遅くなりましたなんて。

確かにこの場合は転移魔法を使って早急に帰るべきでした。明らかに私の落ち度ですね。

どうしましょう、正直に言った方が良いでしょうか。

「……どうせかいたのことじゃ。またつまらない理由で此処に来るのが遅れたのじゃろ。かいはどこかぬけているからな」

っっっ……。ほとんど読まれていますね。

「……もう妾を不安にさせるんじゃないぞ？」

そう言ってテオドラは私の腹に埋めこめている顔を出してこちらを見上げてくる。

……ずっと泣いていたのでしょ、目が真っ赤になっています。

「……はい、きつと」

第一印象は礼儀正しくてスーツを着ていて何処かの国の議員みたいな男。

そこら辺の議員と違うのは髪がツンツンしていて、シャツをピンク色にすれば、ほすくらぶにいそうな男になりそうな男になるというところ。

ようするにかっこいい男というわけじゃな。

最初は妾と違ってかたい男で、妾とはそりが合わないかと思ったが、一ヶ月の間でそれは間違이었다と気付いたのじゃ。

一見すれば口調と雰囲気は出来る男のそれじゃが、実際はどこかぬけていて物腰も結構柔らかい男じゃ。

ところで妾に話かける者は皆はなし方が堅苦しい。

理由は妾が皇女だから。このことを疑問に思い始めたのはつい最近のことじゃ。

いつだったか王宮の近くで子連れ夫婦を見たことがある。

そのときの雰囲気はもの凄く優しく暖かいそれで和やかなものじゃった。

妾はあれが家族というものかと思った。

妾の父様と母様はその立場からか妾とは余り妾と話さない。

しかしそれは仕方がないこと。

妾はヘラスの議員達にはじゃじゃ馬とか言われておるが、それぐらいは分かることじゃ。

しかしそれでも妾はああいうものに憧れた。

家族、友達が欲しいと思った、気軽に話せる者を願ったのじゃ。

それで話をかいたのことに戻すが、最初かいたとは妾のことを皇女と

は知らなかったみたいじゃ。

それでかいとに妾が皇女であると名前と一緒に何気なく言ってみたら、かいは少し何かを考えてから急に焦りだして妾の手を掴んで王宮に行きましようと言ってきた。

妾は訳が分からないからその場に留まろうとしたらかいは急に……。

お姫様だっこをしてきたのじゃ。

結構恥ずかしかったが悪い気はしなかった。

そのあとは王宮に行くと自分で言ってきたくせに道に迷いだすし大変じゃった。

王宮は大きいから少し見上げれば見えたのに、かいは見つけれなかったみたいじゃ。

既にこのときからかいとのことは天然だと思っておったな。

と、話がずれてしまったな。

かいとと妾のことを皇女と知りながら今まで一ヶ月間、妾を皇女として見なかった。

今までは妾を皇女と知ると全ての者が態度を変えておったからな。かいとと妾の初めての友達。

いやもしかしたらこの感情は……。

そうこの一ヶ月の間でかいとと妾にとって大切な者になってきた。

そのかいとに妾は戦場へ行けと言ってしまった。

正直妾は本当に行くと言うとは思わなかった。

妾はかいとに行かないと言って欲しかった。行かないで欲しかった。行かないと言ってずっと妾の側にいて欲しかった。

かいとの口から危険な所へは行かないと言って欲しかったのじゃ。それを聞いて妾は安心したかったのじゃ。

じゃがかいととは行ってしまった。

それも後から親衛隊の者から聞いたがどうやらかいととは一人で戦場

へ行ってしまったようじゃ。

妾は後悔している。これで初めての……。

妾はかいとに死刑宣告をしてしまったようなものじゃ。

もうきつと妾にとつてかいとほどの大切な者は現れることはないじやろうな。

……妾は何を考えている！ 妾はかいとと約束したじやろ。かいはきつと生きて帰ってくる。

妾をここまで不安にさせたんじゃ。かいにはそれ相応の報いを受けてもらうぞ。

逆ギレ？ いいや、これはかいとが大切だからこそじゃ！

海斗 side

「どつしてこうなった？」

現在私とテオドラを囲んでいる魔法陣。これは……。

「仮契約？」

「そうじゃ」

……どつしてこうなった？

「妾を不安にさせた罰じゃ！」

「いや、意味が分かりませんが」

「ちょっと違ったな！ むしろこれはヘラス帝国を救ってくれたか  
いとへのご褒美といえるじゃろう。ありがたく妾とキスするのじゃ  
ぞ、かいと？」

oh . d e a r . 訳が分からないZ E。

まあ、別に仮契約するぶんにはいいんですけどね。  
何故キスなんでしょうか。

他にも簡単な方法ありますのに。

それに。

「テオドラ……。あなたの大事なファーストキスを私なんか授け  
ていいのですか」

「かいとなら別に構わん」

フー、まあ、なんというか。  
実は私。

「……初めてだったり」

「何がじゃ？」

「……いえ。なんでもありません。やりましょうかテオドラ？」

この言い方は結構ひどいですね。

「う……みゅ」

噛みましたねテオドラ。それに顔が真っ赤です。実は結構恥ずかしいんじゃないでしょうか。

ああ当然ですか。何言ってるんでしょ私。私も結構緊張してるんでしょうね。頭が少のぼせてきました。

「……………クスッ」

私は何を緊張してるんでしょね。

こうして見てみるとテオドラは子供、私がしゃがまなければ顔と顔が接近しないくらいな。

「ツム。何か失礼なことを考えておったな、かいと。あと妾のこととはテオと呼べといつも……………。んっ!? んっ。ん……………。んん」

テオドラが何か言いかけてましたがそのまえに口を塞いでしまいました。

それにしてもこの仮契約の魔方陣、何か変な気分になりますねー。

「ンパア……………。ハア。ハア……………」

口と口とが離れてゆく。

ふう……………、とりあえずこれで終わりましたね。唇の感触？ 内緒です。

「っと。これが仮契約のカードですか」

あれれ……………？ 真っ黒ですね。本来私の写真があるところが黒く塗りつぶされています。どうしてでしょうかね。それに何故だか頭が痛くなってきました。



「かい……」

「っテオド……」

テオドラの名前を言おうとしたところで私の意識は途絶えた。



ヒヤッハアアアアア！どうしてこうなった！？そう思ったときは因果応報？（後

テオドラ視点は作者が気ままに書いたので若干変でしょうね。

まあこの小説は作者の行き当たりばったりなりなどころが多々でていませう。



そして何十回目かの声を出そうとの試みを終えて気がつく。

ああ、これがこの暗い空間でのルールなんだ。

声がでない。

このことに気づくとこの空間から出ようと、この声の暴風雨から逃げようと足を踏み出そうとする。

しかし足は動かない。

何故。

何故、動かない。

もう一回足に力を入れて足を動かそうとする。

しかし足は動かない、それ以前に足に力が入らない。

ああ、これもルールの一つなんだ。

そのことに気がつくと他にも体の異常に気がつく。

足が動かない、声がでない。

それだけじゃない。

手も動かないし首すらも動かない。

此処では身体の自由は利かない、まるではりつけの刑にされてるような気分になる。

ずっと、ずっと、いつまでもこの声の暴風雨の中で身体の自由が利かない状態でこの身を晒され続ける刑。

頭の中に響き続ける声、この空間に響き渡る声。

その声は憎悪のこもった声にもならない声。

どろどろこんなことだ。

どろどろ。どろどろ。どろどろ。どろどろ。どろどろ。どろどろ。

どろどろ？ そんなことは分かっている。

賢者の石。

賢者の石を作り出し、それを取り込んだ故に、数十万人分の人間の声が聞こえるようになった。

むしろこれは当然の結果。

賢者の石程の大きい力、大きすぎる力を手にしたのだから、その代償としてこういう状況になった。

それが分かればこの状況を解く方法も簡単に導き出せる。

賢者の石を身体から排出すればいい。

それだけのこと。

そして賢者の石の材料になった人々を戻してあげればいい。

それで全てが解決する。

だけど。

それはしない。

人々を開放すればこの状況を脱する事は簡単なことだろう。

確かにこのまま賢者の石を身体に取り込んでおいても余りメリットはない。

吸血鬼の真祖の能力は不老不死も含まれている。

これがあれば特殊な条件を満たさなければ吸血鬼は死ぬことはない。そもそも黒田海斗には攻撃は届かない。

これも特殊な条件を満たさなければ黒田海斗に触れることは出来ない。

故に黒田海斗を殺すことが出来るのは難解な問題である。

そこに賢者の石の力を加えればたしかに完全無敵である。

なにせ数十万人分の命のエネルギーがプラスされるのだから。

ようは数十万回黒田海斗を殺さなければ黒田海斗は真の意味で死ぬことはない。

でも前述の通り黒田海斗を一回殺すことすら難解である。

だから別に賢者の石は生という面では必要性は然程ない。

これを然程というかは微妙な問題であるがその話は置いておく。

次に賢者の石のメリットとして錬金術の強化がある。

これは黒田海斗が錬金術を開発した本来の理由は物を作って売ることであり、錬金術を使う際に練成陣の作成を省くという意味では役に立つけど、そもそも物を作る事はそこまで急ぐことではない。ということでも余り賢者の石を保有することにメリットは少ない。

いや、冷静に考えてみれば結構メリットといえるメリットはあるかもしれないが。

まあ、その話もこの際置いておく。

ここで黒田海斗が賢者の石を身体に取り込んでおこうとする理由は単純明確。

泣き叫ぶ声。

それらを聞くのは好ましい。

もっと喚け。

もっとワタシを楽しませろ！

理由は単純明確。

黒田海斗は狂っているから。

他人の苦しみを楽しむから。

この声の意味を知ってしまったら、黒田海斗にとってこの声は、この懇願、泣き叫ぶ声は黒田海斗には最高の声に聞こえてしまう。

故に黒田海斗は賢者の石を身体に取り込んだままにすることにする。

叫べ。

喚け。

泣いてみる。

懇願しろ。

出さないよ。

ワタシの中で生き続けるオ。

永遠にお前らは外の世界を拝むことはない。

黒田海斗は狂っている。

いつからだったか。

ずっと前から。

そして黒田海斗はこのことをきっかけに本当に壊れた。  
人間として。







## ポポポーン！？（後書き）

今日はエイプリルフルですね。皆さんは誰かに嘘をつきましたか？

今回の話は中半からg d g dですね。書きたいことが書けませんでした。

ですがまあ、海斗を凄い悪にしたのは作者がこの小説を書き始める前からやりたいことではありません。

他の作者様の小説を見てもしも自分が小説を書いたら主人公は生粋の悪にしよう。作者は（一流な）悪は結構好きですし。

ちなみに海斗のいつもの雰囲気や口調は仮面です。本当はどす黒いです。

学校の硬い椅子で校長先生の長い話を聞いているとお尻が痛くなりますよね。

テオドラス side

かいとが倒れてから3日ほどの間、かいとからは汗が滝のように流れ落ちて、終止顔を歪めて呻き声を発しておった。

そのときの妾はどうしてかいとがこのような状態になったのか意味が分からず慌てふためいていた。

妾は医者を呼んでかいとを診てもらったが、医者もどうということなのかさっぱり分からないそうじゃ。

やはり仮契約なんかしたからなのじゃろうか、等と妾は落ち込んでいたのじゃが、かいとが倒れてから4日目の朝にかいとの様子が変わって、滝のように流れていた汗はとまって、顔も普段通りの爽やかな顔になったのじゃ。

どうしてかいととは倒れて、どうしてかいとの様子が今までよりも良くなったかはこの際どうでもいい、今はかいとの様子が良くなったことをただ喜ぼうと泣いて喜んだものじゃ。

ところでこの前に帝国に攻め込んできた連合をかいとが一人で全員を殲滅したことは妾が父様に頼んで、国民には公表しないようにしてもらった。

国民にはヘラス帝国の兵達が冷静に応戦してその場を凌いだ……と公表したそうじゃ。

このこと自体は結構簡単に上の者達を納得させることが出来た。

異国の者に自国を助けてもらったという事実よりも、ヘラス帝国の兵士が国を守ったという話のほうが上の者達も都合が良いのじゃろうな。

まあそんなことは今はどうでもいいし、何よりもかいとのやったこ

とを世間に公にならなかつたことについて、今回は上の者達の体質に感謝すべきことじゃろう。

それにしても……。

どうやってかいはあれほどの軍勢をたつた一人で殲滅することを出来たのじゃろうか。

聞いた話によるとこの国の近くまできた兵士達は約百万人もいたそうじゃ、かいとが帰ってきてから後にヘラス帝国の兵の数人がそこに行ってきたのじゃが、連合の兵士達は全員死んでいたそうじゃ。

それも身体に何の傷もなく、身体は心臓が止まっていた以外はなんの異常もなく健康そのものだったそうじゃ。

まるでただ魂を抜かれただけのような状態。

帰ってきたヘラス帝国の兵達はみんな顔を蒼白にしてもうあんな所へ行きたくないと言っておった。

それほど異常な光景であつたということじゃろう。

そして他にもこんなことを言っておった。

あれだけのことをした奴は。

『化け物』だ。

と。

……まあ、確かにそれほどのことをしたかいは世間一般でいう『化け物』に値するんじゃないが。

妾としてはどうでもいいことじゃ。

たとかいとがどれほど異常でも、どれ程の怪物でも妾はかいたのことが好きじゃ。

最近気づいたがこの感情はきつと恋愛というやつじゃろつな。

まあ、妾の思い人である当の本人は気づいてはおらんようじゃが…。かいは鈍感でいかな。

きつと今までもそうやって乙女の純情を弄んできたのじゃろつ。

しかも無自覚に、じゃ……。

無自覚というのも罪な物じゃな。

あとかいとが倒れている間に起こった出来事といえば。

そうじゃな、ヘラス帝国の上の者達がこの世界を統一、侵攻を始めることを決めたということじゃろつかな。

これで帝国と連合のいざごきは戦争へと発展したというわけじゃ。

戦争か……。

皇女である妾が言うのもなんだが、国の上の者達の野心や傲慢さで民を巻き込むのは妾としては気に食わんな。

この侵攻は上の者達が勝手に決めたこと、要は民の意思はどうなるといったところじゃ。

民が領地の拡大を期待しているんだつたらそれでいいのじゃが。

希望していなかったらただ民は巻き込まれる対象になるというわけじゃ。

戦争では国の民はなんらかの形で関わることになるのは必須じゃ。

それは食糧難だったり、実際に戦線に加わることになる者もでるじやろつ。

最悪死ぬことになるじやろつ。

国のトップが勝手にやり始めた戦争で、民が望んでもいない戦争に巻き込まれて死んだら、それはとても残酷な話じゃ。

今妾がどう考えようと侵攻は決まっちゃったこと。

もうこのことについて考えるのはやめることにするか。

さて。

かいと調子が良くなってから更に一週間が過ぎた頃、合計で11日じゃな。

その日の夕方いつものように奴の眠るベッドの横で妾は椅子に座ってかいとを看ておった。

奴は何の前触れもなく、目を覚ました。

かいとが帰ってきたのじゃ。

海斗side

あれ。

叫び声が聞こえなくなりましたね。

光？

ああ、なるほど。

私は戻ってきたのですか。

私は夢から覚めたことを自覚するとスッと瞼を開ける。

すると目の前には眠そうに首をコクンっ、コクンっしているテオドラがいました。

「……テオ、ドラ？」

私が眠そうにしているテオドラに話しかけると、テオドラはパツと顔上げてこちらを見つめてきます。

そして次に手で目を擦ると、またこちらをジーッと見つめてきます。しばらくそんな理解不能な雰囲気に含まれていると、テオドラの目に涙が溜まっていき。

目尻に溜まった涙はツーツと頬を伝って流れていきます。

私は状況が読めませんが、取りあえず上体を起こそうと試みてみますが、これがなかなか出来ません。

先ほどまでの夢の中のまったく動くことの出来ない状態とは違うのですが、これは……。

これはたぶんただ体が鈍っているだけでしょう。

ああ、体の自由が利くっていいですね。

体が鈍っている故に体を動かすことは出来ませんがね。

っと、そんな呑気なことを考えている場合ではありませんね。

「テオドラ……。あなたはいつも泣いてばかりいますね。今回はどうして泣いているのですか？」

「かいとはよくそんなことが言えるな……。かいとは覚えていないのか？ 覚えていてそんなことを言っているのだとしたら妾は怒るぞ。むしろこれは怒っても許される事態じ

ゃ

「確か私は国土練成を成功させてから、帝国に帰ってきて帝国で買い



物を済ませて、私の部屋に戻ってきて、そのあとにテオドラと仮契約を行って、そのあとに……。なるほど、確かにこれは……。

「テオドラ。心配を掛けてすみませんでした」

「分かればいい。……と、普段であれば言つところじゃが。今回は許さないぞ」

「っっ……」

「……だが、仮契約はやってしまったし。そうじゃな。妾の頭を妾がいいと言つまでずっと撫で続ける。今回はそれで許してやるぞっ」

それくらいはお安い御用です。

私は鈍って動きづらくなってしまった腕を頑張って動かしてテオドラの頭を持ってゆく。

……相変わらず撫で心地の良い頭ですね。

テオドラの頭は。

そして私はテオドラがいいというまで撫で続けた。  
途中で……。

「……まだ駄目ですか？」

「駄目じゃー！」

「……そろそろ腕が死ねるんですが」

「それでも駄目じゃ！」

というお約束)? があつたのはご愛嬌です。

「それで私は何日の間寝込んでいましたか？」

「11日じゃ。じゃが妾の頭を撫でてるうちに12日になってしまつたな」

……撫ですぎですよ、私。

それにしても11日も私は寝込んでいたのですか、私の感覚では全然そんなに経っていたとは思えないのですが、精々1日ぐらいだろうと思つていましたが。

連合との関係は大丈夫でしょうかね。

あー、そういえば私のやらかした事も公になったんでしょうか。

さすがにそこまで私の名前と顔が有名になってしまつては賞金首ということもばれてしちゃいますし……。

まあ、もしものときは国のお偉いさんとOHANASHIでもして賞金でも取り消させますけどね(誤字にあらず)。

「……それでかいとは何故倒れたのじゃ。もう倒れることはないのか？」

「ああ、倒れた理由は私も厳密には分かりませんが、もうこんなに長い間寝込み続けることはないと思いますよ」

「そうか……」

ですが。

きっとこれからは寝る度にあの声を聞き続けることになるでしょうね。

私が賢者の石を身体に取り込み続けている限り。

あの叫び声は私にとっては最高の声。

しかし例え私にとって気持ちの良い声だとしても、あの声は私に対しての憎悪の籠った魂の叫び、もっというならば呪いの声。

その声を聞き続けるということは、きっと……。

ワタシは壊れるでしょうね。

いや……。

もう既に……。

「良かった……。かいとに。もしも、かいとに死なれでもしたら。妾はきっと……」

……例え私が壊れているとしても、アルメン、エヴァ、この子のためにも。

「大丈夫ですよ。テオドラ、私が死ぬことはありません」

生き続けてみます。





学校の硬い椅子で校長先生の長い話を聞いているとお尻が痛くなりますよね。

遂に春休みが終わり新学期が始まってしまいました。

なので更新が今まで以上に遅くなってしまいましたが、なんとか時間を  
見つけて更新を少しでも早く出来るように頑張ろうと思います。  
どうぞ、ゆるりと待っていて下されば助かります。

やはり、リンゴジュース。(前書き)

リンゴジュースが最近の作者のマイブームだったりします。  
どうでもいいか。

やはり、リンゴジュース。

海斗side

私が目覚めてから更に一週間が経った。

一週間の間ずっと身体を無理のないように少しずつ動かし続けたおかげか、既に身体の鈍りはほとんど消えてしまった。

これで黒田海斗ことこの私の完全復活という訳ですね。

そして今は私の魔法世界での拠点かつ住みかである王宮の客間兼私の自室でテオドラとまったりと人生を謳歌している。

というのは戯言で実際は二人でゴロゴロとグダグダと寝っ転がっている。

テオドラは一応この国、ヘラス帝国のトップの娘の筈なのですが、現在ヘラス帝国と連合の国々は戦争中の筈ですよ、いいんでしょ、うか、こんなところでゴロゴロとじていて。

「問題ない。妾はこの戦争において然程発言権はない。所詮はまだ小娘というところじゃな」

テオドラはそれにと続ける。

「妾はこうしてかいとゴロゴロしているのが好きなのじゃ」

そんなものですかね。

「そんなものじゃ」

まあ、私としては楽でいいんですが、面倒事は基本的に嫌いですし。



そういえば面倒事といえば、どうやら私のこの前の国土練成のことは、テオドラが気を利かせてこの国には公式には公にはならなかったようです。

しかしあれほどのことを全て隠蔽、兼捏造するのは無理というものでしょう、噂で一人の人間がこの国を救ったと流れ始めているようです。

私はただテオドラを救っただけで国民を救ったつもりはないのですが。

結果的にそうなっただけの事だから別にいいですかね、別に私にとって不都合が起きるわけじゃありませんし。

不都合でまた思いましたでしたが、私賞金ついているんですよ、少量の賞金ですから余り有名ではないのが幸いですが。

「かいとーっ。リンゴジュース飲みながらお菓子食べようぞッ」

「はい、いいですよ」

「やはりリンゴジュースに限るな。バナナジュースもいいが、やはりリンゴジュースに限る」

テオドラはそう言いながらクッキーをボリボリと頬張る。

「コラっ。テオドラ。物を食べながら喋っちゃ駄目といつも言っているでしょうが」

「っつ。そんなに怒らなくてもいいじゃないか」

「別にそんなに怒ってはいませんがね」

そんなことを呟きながら思考を元に戻す。  
やはり少量の賞金で目立たないとはいえ、消したほうがいいですよ  
ね。

この少量の賞金が死亡フラグと成りかねませんし。  
そうですね、その内にも上の人たちの誰かに何かこちらからも代  
価を払って賞金消してもらうことにしましょうか。

つと、賞金のことは考えが纏まって思考を別の事に移す。

「このナイフ欲しいですね。とても切れ味が良さそうです」

「……何を物騒なことを言っているんじゃない。かいは

別にまほネットでナイフを見ているだけです。

まほネットは旧世界でいうインターネット。

あちらの世界にあるamazonみたいなショッピングサイトを楽し  
んでいます。

「……なんじゃ。かいはこのナイフが欲しいのか？」

「はい。ですけどこのナイフが中々高くて。今持っている現金では  
足りないんですよ」

「そういうことなら妾が払ってやってもいいぞ？」

「ええつ。いいんですか！？こんなに高いのに……」

「？ 高い？ これぐらい安いじゃろ」

…さすがは王族ですね、お金の感覚が狂っているのでしょうか。

これ結構高いんですが、旧世界でいう一億円程の高さなんです。まア、旧世界に帰れるようになったら返すことにしましょうかね。

話は変わりますが、現在帝国は【グレートブリッジ】を占拠しようとしているようで、もう二回も攻め込んだようです。

二回とも失敗に終わったようですが。

不甲斐ないものですね、私だったら一回で占領する自身がありますけどね。

「いいんですか、テオドラ。【グレートブリッジ】を拠点にするためには現在のままではギリ貧では？ あそこはこの戦争の天王山です。私を次の戦場に出していただければたった一回で確実に占領することを約束しますよ」

そういうとテオドラはこちらを睨んできて。

「駄目じゃ！ かいとはただでさえ目立ったら危険な立場なのに。

【グレートブリッジ】をまた一人で占領なんかしてしまったらもうこの国に公になってしまっぞッ」

そういえば。

目覚めてから二日ほど経った頃に私が賞金首であることを話したんです。でしたっけ。

そろそろテオドラには話さないといけないと思ひましてね。

話してみたらテオドラはそこまで驚きはしませんでしたね、むしろ話してくれて嬉しいだそうです。

「それにかいとは心配しなくても大丈夫じゃ。次の戦闘で必ず占領することが出来る。そういった作戦があるのじゃ」

「ふーん？ そういうことなら別にいいですが。もしもこの国の危機がまた迫ってくるようでしたら私も戦場に出ることにしますからね」

「むづ。どうも、かいはこのヘラス帝国を余り信用しておらんな」

「いえいえ。別にこのヘラス帝国の軍事力を疑っているわけではないんですよ。ただ……」

「ただ？」

「いえ、なんでもありませんよ」

ただ…。

この戦争、何か胡散臭い。

そういえば、最近になって急に『完全なる世界』の噂をよく聞くようになったね。

この戦争は…。

裏で操られている？

なんてね、そんなわけはないですよね。

多分っ。



やはり、リンゴジュース。(後書き)

やはりりんごジュース。

失敗、失敗、その次は成功。

海斗side

「大丈夫じゃ！ 絶対失敗することのない凄い、ヤバい、パネエ、へびいな作戦じゃ！ だからかいとは心配することはないぞッ」

「ふーん？」

という会話が先日に行われて、実際にヘラス帝国は現代の戦術では有り得ないとされている大規模転移魔法を実戦に取り込むことによって、グレートブリッジを占領することに成功した。

天王山を抑えたことにより、この戦争におけるヘラス帝国の勢いは雪崩の如く勢いに達した。そしてこの戦争を終わらせる一歩手前までに至った。

これでヘラス帝国が勝ちテオドラの命の危険は微塵となくなることではなくとも、少なくともとうとう私は安心していい。

しかし連合の勢力の中にその状況をひっくり返すバグキャラの集団が現れた。  
その名を。

『紅き翼』。

……迷惑なものです。このまま敗北してこの戦争を終わりにすればいいものを、そうすれば国民の死傷者はきつと少なくなるでしょうに。

確かに敗戦国のトップの人たちは全員処刑されるでしょうが、ヘラス帝国だって鬼ではありません。連合の国民達の命の保障ぐらいはするでしょう、余りに反抗的な国民は殺されるでしょうけど。要は多くの人間が死ぬよりも、国のトップを犠牲にして多くの人間の命を助けた方がいいでしょう、といった問題です。

別に国のトップなんて蛆虫の集まりみたいなものでしょう。まア、私としてはこの戦争が長引いていくら人が死のうと関係がありませんし、どうでもいいことですけどね。そんなことよりも私としては早くこの戦争にヘラス帝国が勝ってテオドラをより安全な立場にしてあげたいわけですよ。

つと、話が若干それてしまいましたね。

とにかく『紅き翼』とかいう傍迷惑なクソみたいな集団が現れてですね、そのバグキャラ達がグレートブリッジを奪還しやがったわけですよ。

天王山を失ったヘラス帝国の勢いは駄々下がり、むしろ『紅き翼』の登場によって現状はヘラス帝国の方が劣勢という状況なわけですよ。

このままではきつとヘラス帝国は負けることになるでしょう。

だから。

今度の戦線には私が出ることを決めました。

テオドラには許可を貰いましたよ。生きて帰ってくることを条件に。今度の作戦で失敗すれば私が出てもいいという約束でしたからね。

確かにテオドラの言うとおりにグレートブリッジの占領は成功しま



したが、結果的に奪還されれば似たようなモノです。渋々テオドラも納得してくれました。

そしてこれを良い機会に私の賞金を消してもらおうとテオドラの父君に会いに行きました。本来であれば会うことの出来ない立場の人ですがテオドラに免じて少しの間会うことを許されました。テオドラの父君には私が次のグレートブリッジ奪還作戦に成功したら賞金を消してもらうことを約束してもらいました。これで私の立場も危うくはなくなるでしょう。

さて次の戦場での私の役目はグレートブリッジの占領する間の『紅き翼』の足止め。

今回はまた連合にグレートブリッジを奪還されないように、帝国がグレートブリッジを占領した後もしばらくは私がグレートブリッジに滞在して、帝国がグレートブリッジの警備をより強固なものにするまで私がグレートブリッジを警備することになります。

そのあとに私は帝国に帰れるようになるというわけですね。

「生きて帰ってくるのじゃぞ？」

「大丈夫ですよ、傷一つつくことはないです。……それに、テオドラの買ってくれたこのナイフもありますしね」

今回のエモノはこのナイフですね。

「では行ってきます」

さあ……。

サツリクの時間。

ダ。

**失敗、失敗、その次は成功。（後書き）**

今回は短いですが、今日中にもう一度更新する予定です。  
書き終わんなかったら申し訳ありません。

## 残酷の登場。(前書き)

投稿が遅くなってしまって申し訳ありません。

新しい学園生活に慣れるまでしばらく投稿が遅れてしまつと思ひます。

## 残酷の登場。

人は何故人を殺すことがあるのだろうか。

それには色々と考察があるのだろう、多分、きっと。

その考察の一つにはこんなものがある。

感情が理性を上回ったときに人は人を殺すのだと。

だから、彼はきっと悦楽という感情が理性を上回っているから人を殺すのだろう。

もともと、人間が人生で人を殺せるのは一回だけらしいから、彼は人を殺してはいないのかもしれない。

この世界では。

ナギside

俺達はグレートブリッジに向かっている。

俺達が奪還したグレートブリッジをまた帝国の連中が奪いにやってきたからだ。

畜生！ あとちょっとで戦争を終わらせることが出来ると思ったのに。

「あーあ、帝国の連中もしつこいねえ。俺達に勝てないことぐらい分からないのかね？」

ラカンが気怠そうに言う。

「仕方ありませんよ、戦争ですからね。あちらだって負けたくはないのでしょ？」

アルがラカンを見ながら、やれやれとジェスチャーを加えながら一般論を言う。

そのジェスチャーはヘラス帝国に対しての「やれやれ」なのか、ラカンのやる気のなさに対する「やれやれ」なのかは分からない。いや、後者に間違いないだろう。

「分かってるよ。なによりも、俺は戦えればそれでいい」

「お前等、お喋りはそこまでだ。」

泳春が二人の会話の間に入り込み、二人に会話をやめるように言うて立ち止まる。

その言葉の意味を理解して、全員が張り詰めた顔と雰囲気になる。普段の俺達はいつものようにおちやらけているが、戦場に着くと常に周りを警戒して口数も少なくなる。

それは自分が生き残るためという意味と、人を殺めるといふ行為に對しての心構え的な意味がある。

殺める相手がたとえ敵だとしても、人の命は平等に重たいのだから。

俺達はこれでも戦闘に関してかなりの場数を踏んでいる、それこそいつの間にか英雄と言われるようになるまでに。

だから戦闘、戦場においての勘が優れているのだ。

そして、それ故にこの戦場はいつもとは雰囲気が違うことがすぐに分かってしまった。

「何だよ……、これは」

「戦争ではよくある光景。と、言いたいところですが。これは……」

あのアルですら隣で少し青ざめている。  
それ程の光景が目の前には広がっていた。

「ひでえ……」

ラカンも顔こそ青ざめていないものの、言葉として自分の感情であるものを呟く。

目の前には人の亡骸が沢山あった。

それは先ほどアルが言った通り戦争では当たり前前の光景。

だが。

全員、部位が足りていない。

全員だ。

中には細切れになっているものもあるし、ミンチ状になっているものもある。

その中からは他の死体と比べて非常に状態が良いものもある「他の死体と比べただけであって、通常では普通の死体とは言えないものである」。

その死体を少しの間見ていると分かることがある。

多分、ついさつきまで生きていたであろう、その身体には首という体のパーツがない、具体的に言えば首の付け根から上だ、その切断面を見ていると分かったのだが、つまり俺はこの部位のない死体たちの身体は魔法が剣か、銃や爆弾などの兵器で身体をバラバラにされていたのかと思っただが、この死体の切断面は剣や魔法で切られたような綺麗な切断面ではなく、銃や爆弾で焼ききれたともいえない、これはむしろ腕力によって引きちぎられたような切断面、また

は噛み千切られたような切断面に見える。  
それは乱暴で、暴力で、野性的な切断方法。

「……帝国の連中は魔獣でも放ったのか？」

「いえ、そういうわけではないと思いますよ。これを見てください、ナギ」

アルがそう言うので、俺はアルの言う通りにアルの近くに行く。

その歩いて行く道は死体と剣や杖などの武器で埋め尽くされていて、歩く度に死体と血だまりを踏む音が響く。

そして、そんな不快な音を聞きながらアルの近くまで来てみると、段々と見えてくる、アルの足元にあるものが。

それはムゴいとしか言えないものだった。  
連合の女性の兵士の死体。

そういう類の死体はそこら辺にも沢山落ちている。

だが、この死体は他のものとは違った無残な姿になっていた。  
腕がない、そして。

その腕が女性の大切な所に突き刺さっている。

「……」

「これは魔獣には出来ないことです。人間がやったとしたか……」

それは余りにもムゴい姿だった。

俺は戦争に出て戦争のことを分かっていたつもりだった。

人が殺し、殺される、そんなことが繰り返されることだと、だけど俺はまだ戦争の綺麗なところしか見ていなかったのかもしれない。

これを、これらのことを人間がやったのだとしたら。



そいつは。

イカレてる。

それから、俺達は流石にいつまでも此処に留まり続けているわけにもいかないと思って、グレートブリッジにいる善の連合の軍隊と合流するために、この死体の山の中を走り続けた。

少しばかり走ったところで、一番前を走っている詠春が立ち止まり刀を構えた。

「……ナギ」

「ああ。分かってる」

誰かいる。

それも、姿も見えていないのに、冷や汗が止まらない。こんなことは初めてだ……。

グレートブリッジがある方向では、まだ攻防が続いているのである。

爆撃の音や銃の音、魔法の音が終止聞こえ続けている。

だが、ここだけは何故か音が聞こえないように感じる。

それほどの雰囲気がこの場所を支配していた。

俺達は警戒心を高めて、ゆっくり、ゆっくりと歩みを進めた。

そして段々と聞こえてくる、生々しい音。

その音を表現するなら、解体し終わったばかりの豚や牛の肉を地面に叩きつけるような、その叩きつけられた瞬間に跳ねる血のような音。

また、少しばかり近づいたところで今度は人の声らしき音も聞こえ

てくる。

「ハア、ハア、ハア。アガツ、ア、ア、グア」

その声がするたびに血が吹き出るような音が聞こえてくる。

不快な音が聞こえながらも歩みを進める俺達。

一步、一步と近づく度にその音は大きくなってゆく。

人間の声と、生々しい音。

そして、遂にその音の元凶のところへ俺達は辿りついた。

そこは今までいた場所と同じ、人間の死体があつて、そこから中に剣が突き刺さっている場所。

そこは今までいた場所と同じ、温度が数段と下がっている場所。

俺達が立ち止まったときに、剣で見えなかった場所から、ゆらりと何か起き上がった。

人間だ。

後ろ姿で見えないけれど、黒いスーツに黒い髪に見えるその風貌、正確には黒い髪と黒いスーツは赤く滲んでしまっていて、ダークレツドになっている。

血か？ 俺は確信しきつた気分でそう思った。

後ろ姿から判断するに男と考えられる。

その謎の男はしばらくすると、ゆっくりとこちらに振り向いてきた。

「……待ってましたよオ。『紅き翼』のみなさん」

そう言つて満面の笑顔を見せる謎の男。

その笑みは純粹に楽しそうで、心の底から喜んでいるような、素晴らしい笑みだった。

だが、俺はその笑顔からは正の感情ではなくて、むしろ負の感情を感じた。

俺には最凶最悪の笑みに見えた。

振り向いていた謎の男を正面から見てみると、その姿は長身で、綺麗な顔立ちで、綺麗な黒髪をした、スーツ姿の男だった。

しかし、元々は全身が黒一色であったであろう、その姿は血で紅く滲んでしまっている。

顔は血で汚れきっていた。

俺達はその男を見ながら臨戦態勢をとっていると、男は手に持っているものを自分の口の側まで持ち上げた。

その手にあるものは人の肉だった。

もう片方の腕にはナイフが一本。

それを見た俺は確信した、こいつがみんなを殺したのだらうと。

奴がその肉をもって何をするのかと思って見ていたら、奴はそれを

喰らい始めた。

生々しく、嫌悪感を抱く、グロテスクな音をたてながら。

そのさつきまでは人間と思えた目は、既に獣の目と化していた。

もう奴の意識は俺達には向いていない、ただ目の前にある肉を捕食することだけに集中しているように、喰らい続ける。

喰らう、喰らう、凄い勢いで。

奴が肉を喰らっている間、俺達はただ呆然とその姿を眺めていた。

その獣のような姿に恐怖して、放心しきっていた。

そして、奴が肉を喰らい終わると、やっと俺は自我を取り戻し、震えて息すらしにくい口を、なんとか動かして一言呟いた。

「……お前。何してんだよ」

そう言うと奴はピクリと反応してこちらを見てくる、そして俺のことを純粹に観察するように見つめてくる。

その視線には敵対意思とかそういった類の気持ちは感じられず、ただ純粹に不思議そうに、珍しいものを見るかのようにこちらを見続けていた。

「何って食事ですよ？ あなた達を待っている間にお腹がすいてしまいましたね。生肉でしたが我慢して食べていたんですよ」

そう言うってから奴は口から肉片を吐き出す。

それは地面に嫌な音をたてて落ちた。

その肉片は人間の骨が混じっていて、血管が混じっている、その肉片はあの男によって噛み砕かれて、グチャグチャになっている。

「随分、退屈だったんですよ。退屈で、退屈で、退屈でエ。あなた達が来るまで、我慢する予定だったんですけど、余りに遅いので肉と血の感触が恋しくなってきたやいましてねエ。」

それは要するに退屈凌ぎということか。

それともこいつは帝国の兵の一人で、俺達を待っている間に連合の戦力を削っておこうということなのか。

どちらにしても、ここまでやる必要性が分からない。

多分、前者で合っているだろう。

身体を解体して、身体を弄んだりする理由に納得が出来た。

「お前は……。何を想ってこの人達を殺した」

「それは勿論、快樂を得られるから」

「……少しでも人を殺すことに抵抗はなかったのか」

「別に、全然」

奴のその言葉は、奴に良心の呵責というものが、全くといっていいほどないことを意味していた。

「だって考えてもみてよオ。自分以外の人間なんて、どうでもいいじゃないですか？ それこそ、自分にとって大切なもの意外はどうでも。まあ、この考え方は狂っていて、私の方が普通の人間よりも可笑しいというのは分かりますがね。でも、それを改めるつもりはありません。」

それは……。

「私が特別で、狂っているからア」

その言葉を俺が認識し終える前に、奴はいつの間にか俺の目の前にいた。

ナイフを俺の胸に刺さる一歩手前のところに突き立てて。

今の一瞬で俺の目の前に移動したのだ。

それは、難しいことではない。

一般的な世間の常識でいうならば、それはきっと難しいことに該当するだろう、しかし、俺達の観点から言わせて見るとそれは、然程難しいことではない。

だが、そこで難しくないのは一瞬で移動することであって、相手に気づかされずに相手の目の前に移動するという事は難しいことである。

それを奴は簡単に成し遂げた。

俺は勘と反射神経と動体視力が普通よりも遙かに上という自信がある。

それは思い上がりではなく、絶対的な自身からくる事実だ。

だが、その自信があっても、俺はこいつが移動したことに気づかなかつた。

つまり、奴は俺の自信と身体能力を更に上回る動きをしたことになる。

それはきつと。

野生の動作。

所謂、捕食動物。

ライオンや虎の狩りの風景を思い浮かべてもらえれば分かりやすいと思う。

ライオンや虎のような捕食動物は気配を消すことに優れている。

俺は人間であるはずのこいつにそういうものを直感的に感じた。

いや、むしろ。

俺は奴のことを会ったばかりで何も知らないが、こいつのことを表現するならば。

こいつは動物、捕食動物とかいったもの、と言ったほうがこいつらしい気がする。

詠春 side

俺は神鳴流の剣士。

神鳴流の剣士はその職業柄から妖魔、化け物を相手にすることは多い。

故に言わせてもらおう。

あいつの第一印象は。

化け物。

俺は神鳴流の剣士、故に異質なものと触れ合ってきた経験もある、だからあいつの異常さは分かってしまった、そもそもあいつは一人じゃない、これは確信を持っていえないが、あいつからは複数の人の気配を感じたのだ。

あいつに初めて会ったとき、あいつは人の肉を喰らいだした。

正直、俺は安心した。

何故なら、あいつが人の肉に興味を抱いて、それを食っている間、

あいつは俺達のことを意識しないのだから。

あいつが人の肉を喰らっている間、俺は生きることが出来る。

俺はあいつに勝てる気がしなかったのだ。

あいつに見られている間は、いや、あいつが俺の視界の中に入っているだけで、俺はまるで両手両足を縛りつけられてライオンや虎がいる檻の中に入れられる錯覚に陥った気分だった。

少しでも生きたい、まだ喰らい終わらないでくれ、もっと喰らっていてくれ。

俺は自分のことしか考えずに、あいつが人の肉を食べるという、おぞましい行為にして残酷で反人道的な行為については何も考えられなかった。

それは人の生存本能として当然の事なのかもしれない、けど俺は後々に自分のその感情に対して自己嫌悪に陥ることになる。

だけど、今にして考えてみると、俺はあのとき生きたいと思ったが、内心ではむしろ殺されたかったのかもしれない。早く意識を失ってあいつの目の前から消えたい。あいつを見ていたくない。

俺は死よりもあいつの方が恐かったのだ。

ラカン side

「何よりも戦えればそれでいい」

誰だっけ、そんなことを言った大馬鹿野郎は。  
ああ、俺か。

あいつの第一印象。

一生、勝てない。

気合なんてものは、あいつの前では微塵も意味を成さない。  
あいつは理不尽で不条理で最強の化け物だからだ。

以上！

三人称視点



「ナギ！」

『紅き翼』のメンバーの一人、アルが今にも殺されそうな状況に陥っているナギに向かって、叫びかける。

ナギの右斜め後ろにいるから、はっきりとは敵の姿は見えないが、その手には凶器を握っていてナギに向かって突き刺しているようにも見える。

「ぐっ！」

アルの叫びに反応してか、自分自身で反応したのかは分からないが、ナギは後ろに跳ぶ。

『紅き翼』のメンバーは、まだ正体が掴めていない謎の男の敵対意思によって警戒を強める。

だが、きつと『紅き翼』のメンバーの全員はこう思ったことだろう、できれば戦いたくなかった、と。

『紅き翼』のメンバーの全員は、それぞれ差異こそあるものの、謎の男に恐怖していたのだ。

どれほどの強さを持っているのか分からない、しかし、この場にいる男達は全員それなりの戦闘経験を積んできた、故に直感的に、そして直観的に、目の前の謎の男がどれほどの腕をほこっていて、どれほど危険な存在かは分かりきっていた、もしかしたら勝てないかもしれないということも。

それでも、戦おうと思った。

全員、生きたいのだから。

その姿を見て海斗は笑う。

それは、見下しているわけでも、愚行に対する可笑しさからではない。



先ほど、海斗は快楽に浸るために人を殺戮したと言っていたが、それだけが理由ではない、兵士達の持っている剣を落とす目的も含まれていたのだ。

太陽は流石に偶然だろうと思うかもしれないが、これも海斗の計算の故の結果である、計算というよりも、海斗は魔法を使って晴天にただけだが。

海斗は数多くの魔法を有している。

それこそ、百万を超える程の魔法の数だ。

その中に気象を操る魔法があっても何ら不思議ではない。

「アハア！ 気持ちいいエ。人を切る感触は最高だア！」

海斗は駆け抜ける、剣の造林の中を。

楽しそうに笑いながら。

その姿は玩具を与えられた子供のようにも見えるが、『紅き翼』のメンバーからすればその笑い声は悪魔の声に聞こえることだろう。

そして海斗は笑いながら、『紅き翼』のメンバーを少しずつ切り刻んでいく。

それこそ、何十と、何百とも。

実際はそんなに切り刻まなくとも、頸動脈を切れば人間は簡単に死ぬ。

ただ海斗はそうしない。

生きた人間をより多く、切り付けたいから。

だが『紅き翼』だって切りつけられるだけでは終わらせない。

彼らはそれこそ、この世界最強といっても過言ではないのかもしれないのだから。

否、それは過言であろう。

何故なら、最強という言葉はその熟語が意味する通り、何に対しても強い、という意味なのだから。

ならば、この言葉は今は適切ではない、何故なら目の前に明らかに自分達よりも強い相手がいるのだ。

ナギは地上は危険だと判断して、急遽、上空に舞い上がる。そして呪文を詠唱する。

「あの馬鹿！」

仲間達がナギの唱えている呪文の正体に即座に気付き、守りの姿勢に入る。

「百重千重と重なりて、走れよ稲妻、千の雷！」

相手は剣の造林の中を縦横無尽に駆け回り、姿が一向に見えない。

ならば、剣の造林ごと相手を消し飛ばしてしまえばいい。

その魔法は残り魔力のことなど、まるで気にしないで、現状を打開するだけの意味を込めて、ナギの出来る限りの魔力が込められていた、その魔法はナギの魔力の高さに比例して、正しく理不尽と呼べるほどの威力を伴って辺り一面をイカヅチの嵐に巻き込んだ。

「やったか……!?!？」

辺り一面は土煙で謎の男の姿は見えない。

謎の男の姿は一向に見えはしないが、ナギは恐らく倒せたに違いない、と考えて安心の表情を見せる。

仲間のことは信頼しているし、魔法を放つ際に守りの魔法を師匠が使っていたのが見えたので、大丈夫だろうと考えていた。

だが、よく考えてほしい、先ほどナギを含めた『紅き翼』は謎の男のことを自分達よりも強いだろうと考えた筈だ、ならばゼクトに防げて海斗に防げないなどというご都合主義はあるのだろうか。

答えは否だ。

安心しつつも警戒を怠らずに土煙を見ながら、上空に浮いているナギ。

次の瞬間、その安心していた顔は驚愕の顔に変わることになる。土煙の中から、煙をまいて謎の男がこちらへ向かってきたのだ、しかし、そのスピードからは向かってきたというよりは気付いたら、目の前にいた、という表現の方が正しいだろう。

グシャ。

バキツ。

生々しい音と、無機物が壊れる音が同時に聞こえる。

その音は、身体にナイフが食い込む音と、杖が折れる音だった。

「どうしたのかなアアア!? あの程度の魔法で勝った気になっちゃたのかな? なら、それは。」

自惚れ。

落ちていく、落ちていく、そう感じるのに数秒かった。

ナギにとってそれほど一瞬のことだったのだ。

そして、落ちていくときに自分におかれている事態を認識した。杖が折れている、これで魔法を使うことは出来なくなった、そして足が切断されている。

視界には切断面から血を噴出しながら自分と一緒に速度で落ちていく両足があった。

「グアアアアアア!?!」

足が……！？

その痛みは神経を通じて脳に伝わる。

それは痛い等とは表現できない程の激痛だった。

だが、ナギはその痛みに耐えながらも思考を別のことに移す。

このままでは転落して死ぬ。

痛みで逆に冴えた頭でそのことを認識した、そして、土煙がようやく晴れてきたことにも気付いた。

だが、土煙の中は絶望が広がっていた。

詠春以外の全員が、身体を一部、一部、欠損させて地面に倒れているのだ。

それはナギの魔法のせいか、謎の男のせいなのか、そんなことは考えずともすぐに分かった。

千の雷はその名の通り、千の雷を放つ魔法である、その魔法で身体を分断することは可能だろうが、ああいう切断面にはならない。

あの切断面はさっき見たような握力の限り引きちぎったような感じであった。

「ナギ！」

詠春が落ちてきたナギのを受け止める。

「すまねえ、俺のせいで……」

「いいんだ」と詠春が言うと同時に謎の男が地面に降りてきた。

「……あーあ、グレートブリッジの方の戦い、終わっちゃったみた

いですねエ。あなた達も戦闘不能ですし、つまらないなア」

心底がっかりという感じで謎の男は肩をすくめる。

「ああ、でも」と海斗は話を続ける。

「あなた、一緒に来なさい？」

そう言つて詠春を指でさす。

「……何？」

「人質ですよ、またグレートブリッジを取り返されたりしたら困りますからね。あなたを人質にしている間にまた『紅き翼』のメンバーが攻撃してきたら、あなたを殺すということですよ」

「そんなことをしなくても、今、殺せばいいだろ？ 何を考えている？」

「いえいえ、あなた達ほどの逸材を殺すのは勿体無いですが、唯一あなた達は私のサンドバッグになることが出来る」

他の人達は脆過ぎて少し殴るだけで、すぐに壊れちゃうしね。

この条件に乗れば、少なくとも今はみんなの命を守ることが出来る。プライドと引き換えに。

なら、プライドなんか捨ててやる。

「……分かった。連れて行け」

「え……えい……しゅん！ 行くな……。いくん、じゃ……。ない」

ほぼ意識がなくなりかけているナギが精一杯、詠春をとめようとする。  
だが、その思いは虚しく、詠春はもう謎の男の傍まで行ってしまっていた。

そして、詠春は連れ去られてしまった。  
残ったのは惨敗に期した『紅き翼』と数多くのムゴイ死体だけだった。

海斗side

「それにしても……。素晴らしい役者っぷりでしたよ」「  
えいしゅん。





残酷の登場。(後書き)

今回の話の海斗の戦闘は、作者の好きなアニメのキャラクターをイメージして描きました。  
分かる人は分かるかな？

あい、まい、みー、まいん。あー、ゆう、えころじー？（前書き）

最近、スルメイカとかおつまみを食べながら酒を飲む光景に憧れています。

早く大人になりたい。  
どうでもいいか。

あい、まい、みー、まいん。あー、ゆう、えころじー？

テオドラス side

かいとがとある事情という理由によって、グレートブリッジに向かつてから約三日が経った。

約というアバウトな言葉を使ったのは、妾が時間を忘れる程に熱中していることがある、というわけではなく。

特にやることがなく、今までの自分を見直すために、天井をずっと眺めていたわけじゃ。

と、少し話を盛ってみたものの、実際はそんなわけではなく、ただグダグダと自宅警備をしているというわけじゃ。

やることなく、ずっとゴロゴロしていて、毎日をただ無気力的に過ごしている内に、今は一体かいとがにかけてから何日目なのか分からない、といったところじゃ。

「暇じゃ……、暇すぎる。暇すぎて、暇すぎて、鼓膜が破れるかもしれん」

……。

「……………あー」

駄目じゃ。

かいとがいればつつこみを入れてくれるんじやが。

つつこみ不在でボケをしたところで只の痛いコじやな。

まあ、かいとは偶に狙ってボケを殺すことがあるが……………。

暇だし、あたりめでも食べるか。

「ゼルエルー。アレ、持ってきて」

そう言うと、十秒も経たない内に「はい」と、あたりめを皿に添えて持って来てくれるゼルエル。

「ありがとうー」

うん、あたりめおいしいけど。

やはり、酒も欲しいな。

飲んだことはないけど、多分おいしいじゃろ、ちゅーはいとか飲みたいの。

……ゼルエルは妾の警備とか執事とかやってる、えすぴー？ 的存在じゃ。

独身、四十歳過ぎと少し婚期を逃した気がするガタイの良いおつちやんじゃ。

でも亜人だから問題ないじゃろ、見た目もまだ若いし。

……それにしても、ゼルエルって名前はアレじゃな。  
まあいいか。

妾はあたりめを食べながら人造人間について考察してみる、が、そんなわけの分からないことを考えたところでいつまでも持つわけがなく、十分ほど暇を潰せたぐらいで、考察をやめる。

「宇宙人でも落ちてこないかの。未来人でも、超能力者でもいいが」  
落ちてきたら、落ちてきたらで困るが。

それほど、退屈というわけじゃ。

「うがああああああああああああああああああ！ 退屈じゃあああああああああああああああああああ！」

「近所迷惑ですよ、テオドラ様。静かにしやがって下さい」

「すまぬ」

……。

冷静に考えてみたら周りに家はないんじやが。

そう考えたところでゼルエルにそんなことを言えるわけがなく、黙ってゴロゴロする妾。

ふう、かいとは今頃どうしているじやろうか。

人殺しは仕方がないとはいえ、余りして欲しくないんじやが。

「……妾が言えることでもないか」

あい、まい、みー、まいん。あー、ゆう、えごろじー？（後書き）

前の話の内容が結構激しかったので、今回はゆるりとしたかんじにゆるり、ゆるり。

でも少し短かったですね、申し訳ないです。

「これ、つまらない物ですが。」「つまらねえ物なら、いらねえよ。」「前書き

ノートパソコンにコーラぶっかけて壊した（笑  
笑えねえ。



「これ、つまらない物ですが。」「つまらねえ物なら、いらねえよ。」

海斗side

地球温暖化。

それが危惧されている現代の世の中。

その原因は一体なんなのか、CO<sub>2</sub>? 果たして、そうなのだろうか。

現代の見解には、そうではない、という意見も存在するようだ。

それが、事実なのか、そうではないのか。

もしかしたら、何処かのツンデレフレームヘイズが温度を上げているのかも知れない。

もしかしたら、摂氏三千度の巨人を生み出す、年齢と身長がそぐわないヘビースモーカーが温度を上げているのかも知れない。

もしかしたら……。

結局のところ。

私には何も分かりませんね。

「……ふう、人生、分からないことばかり」

「何を悟りきったような顔をしているんじゃない?」

「……いつか分かるときがきますよ。テオドラにもね」

「? どうでもいいが、そろそろ、着く頃だからな、分かっているのか?」

「ええ、まあ、それ程には、大体は、きつと」

「なんで、そう回りくどいんじゃない……」

……しかし、まあ、展開が早いものですね。

私が《死闘（笑）》を繰り広げてきて、ヘラス帝国へ帰ってきた、その日。

面倒なことを終えて、ようやくテオドラの頭に触れられる、そんな意気揚々とした気分で、恐らく私の部屋のベッドでゴロゴロしているであろうテオドラと再開しようと、自室へ入って、テオドラに抱きつこうとしたときに、テオドラがこう言った。

「おお、帰ってきたか！ 早速準備をするんじゃない、今から出かけるぞっ」

私は折角、久しぶりにテオドラへと会えた、その喜びを、テオドラと一緒に分かち合おうと思っていたのに、テオドラはそんなことには気配りもせずに、意味の分からないことを言うものだから、私は拗ねながら「どういうことですか？」と聞いた。

「今から連合の姫と会談をすることになっているんじゃない、内密にな」

「え」

どうして、敵の姫様と会談？ しかも内密ってことは余り知られてはいない？ うん？ あれ？ あー。

なるほど、分かん。

分かるのはそれは会談じゃなくて密談だろうが、ってことだけです

ね。

「フフフ。何がなんだか分からない、そういった顔じゃな？ ハハハハハハ！ まあ、分からないのも無理はない、何せ妾にもよく分からないんじゃないからな」

分からねえのかよ！

「まあ、どうして、こういったことになったかと言えば、連合の姫ことアリカ姫から、この戦争について内密に話したいことがあるから、会ってくれと言われたからじゃ」

ああ、成るほど。

あちらさんが、この戦争の異常性に気づいたということ、ね。もしかしたら『完全なる世界』についても、なにかしら分かることがあるかもしれないね。

「……………いいですよ、行きましよう。準備をしますので、少し出てって下さい、此処は私の部屋です」

私はタグ理解……………、もとい、状況を理解したことで、テオドラと一緒に出かけることを決めたのだが。

それにしたって、再開を喜び会おうということを忘れたテオドラに対してちよつと怒りを感じて、そっけない口調でテオドラに出て行くように促す。

そうすると、テオドラが何やら慌てだすけれど、私は無理やり部屋の外にテオドラを出した。

拗ねていながらも、怪我をさせないようにテオドラを部屋の外にだす私は流石と、いえるでしょうね。

「……………さて支度でも始めますか」

テオドラス side

何やら……………。

何やら、さっきからかいとが、酷く妾に冷たいのじゃ。

話しかけても、回りくどく、何か感情が籠っていないような、そんなそっけない、口調。

怒らすようなことでもしたかの？ だとしたら、早く謝らなければ。でも、怒らすようなことをした覚えはないんじゃが……………。

「……………か、かいと？ もしかして、怒っていたり……………？ するんじやないか？」

「……………は？ 怒ってなんかいませんよ。ええ、私はいつもどおりですとも」

……………。

……………。

……………。

怒ってる！

絶対に怒ってるぞ！

これはもう100パーセントじゃ！

確実に、絶対に、他の可能性なんか微塵も感じさせないくらい、圧

倒的に、清清しいくらいに、怒っているぞ！

だって、妾、こんな怖いかいと見たことないもん。

さっきまで、感情が籠っていない等と思っていたが、そんなもんじや全然ない、何故、今まで気づかなかったのが分からないくらいに分かりやすく怒気が含まれている声だったぞ。

……確かに普段から、どこかそっけないかんじ、じゃったが。いつもとは、数千倍違うのが分かってしまう。

「うそじゃ！ かいと絶対怒っておる。何故！ なんで、怒っておるんじゃ！」

「……さあ、何故でしょうね。自分の胸にでも聞いてみたらどうです？ ああ、でもその胸では……」

うう。

何故さり気なく酷いことを言うんじゃ、胸なんてその内大きくなるんじゃ！

もういい、大きくなってもかいとにはもませてやらん！

って、そうじゃない！

妾が逆ギレして、どうするんじゃ！

とにかく、なんで、怒っているのか聞き出さなければ、話が進まないぞ。

うう……、なんだか、涙がでてきそうじゃ。

「……かいとお、妾が何かしたのか？ 何かしたなら謝るからああ、許してくれええええ」

……。  
やっちまった。

テオドラを泣かしてしまった。

目の前ではテオドラが、この世の終わりを聞いたような顔をして泣いて、私の服にしがみついている。

ヤバい、可愛い。

「……………」

って、そうじゃない。

何を考えているんだ、私は。

今、私は人として最低なことを考えた気がするぞ！

つく！ とにかく！ 早くテオドラに謝らなければ。

「かいとおおおおおお、……………、ううう、ううう」

「……………、テ、テオ！ すみませんでした、私が悪かったです！ 少し調子に乗りすぎてしまいました。もう、テオドラのことも許しますから、どうか、泣き止んで下さい」

許すことと、謝ることを、同時にやるといつのも珍しいものですね。

「……。グスツツ。本当か？ もう、許してくれるのか？」

「ええ」

そうすると、しばらく泣いてから、段々と普段の調子に戻ってくる。というか、私、テオドラを泣かせてばかりいますね、情けない話です。

……。

……。

……。

「それで、なんで、かいと怒っていたんじゃ？」

正直、今、そのことを言うのはなんだか恥ずかしいですね。

「……。テオドラが、私と久しぶりに再会したのに、何も喜んでくれなかったから……。」

うー、なんて子供なんだ、私は！

「……。あー、それは。そうか、妾が悪かった。でも、別に喜ばなかったわけじゃないぞ、実際、かいとが帰ってくるまで妾はかいと部屋でかいとのことを、ずっと、想っていたし、帰ってくるのを、心待ちにしてたし。それに、かいとが帰ってきてから、今、この瞬間もとても嬉しい気持ちなんじゃ、妾は」

やはり、子供だったのは私だったようです。

テオドラはこんなにも私のことを考えてくれているというのに。

「言い訳をするとしたら、あのとき、妾は浮かれすぎていたのかもしれん。戦争が終わるのではないか？ とな」

「そうですね……」

確かに、敵方の姫様が戦争について話をしたい、などと持ちかけてきたら、戦争を終わらせないか、とか、戦争を終息させることを話し合つのではないか、とか思うかも知れませんか。

それに、テオドラは前々から、この戦争を早く終わらせたいと願っていましたからね、もしかしたら、この戦争を終息させることが出来るのかも知れない、と希望が見えてみたら、浮かれてしまうのも仕方がないかも知れません。それにしても。

やはり、テオドラは優しい子ですね、それはもう、天変地異が起きるとか、そういった具合な程までに優しいですね。

それに比べて、私は！ 本当に子供染みたことをしたものです。構ってもらえないから拗ねるなんて、本当に子供ですね、今回のこととは私の中での黒歴史に追加されることでしょう。

「心が葛藤に満ち溢れてる、ってね。」

「？ どうしたのじゃ？」

「いえ……。それにしても、すみませんね、テオドラ」

「だから！ 妾の方こそ悪かったと言っておるじゃろ？」



「では、今回のことはお互い様ということだ」

「うむ、そう言っていてオドラは私に抱きついてくる。

この小さな女の子は、とても可憐で、とても愛しく、とても慈悲深い。

その女の子はこうして、こんな私と現在を共にしている。

時折、思う。

こんなことは全て夢ではないか。

こんなことは全て造りモノではないか。

それは昔と比較したから、そう思うこと。

幸福とは不幸と比較することによって、初めて認識することが出来るもの。

昔があつて今がある。

「……………くだらねH」



「これ、つまらない物ですが。」「つまらねえ物なら、いらねえよ。」「後書き  
甘い！甘すぎるー！トロピカルジュースのように甘いぞ！飲んだこと  
ないけど！

感想とか下さってありがとうございます。

「HQ! 応答しろ!」「お前、スマートフォンに変えたんだ?」「あ…ああ、新しい学校へ入学して早2ヶ月(約)、定期テスト全部赤点だったよ(笑)

あれ、この前書きとサブタイトル前回の話とかぶってるな。

「H Q! 応答しろ!」「お前、スマートフォンに変えたんだ?」「あ…あ、い  
ねえ、君は本当に最悪だね。

いやいや、君の方が最悪だよ。だって人殺しにすらなれない、殺人  
鬼だもんね。

へえ。仲間を裏切る奴がよくそんなことを言えるねえ。

あれは仕方がないことなんだよ。だって仲間を助けるためだよ。

あれ? あれ、あれ、あれ。可笑しいな。最初に君が言った条件は  
私を助けて下さい、だったよね。

……。

その後に私が他の仲間を助けようか、って提案したんだけどな。

……。

要はさ。結局、自分のことしか考えてないんだよ、君はさ。でも、  
いいと思うよ、そういうの。だってボク達人間だもの。

君は人の皮を被った悪魔だろ、もしくは怪物。似たようなものだけ  
ど。

ハハ! そいつは良い例えだ。君の言ったその例えは随分と的をつ  
いているよ。だけどね、私はそれにすらなれないよ。だって。

だつて？

だつて、私は本来この世界にいちやいけない存在だもの。

海斗 side

うほっ！ 良い女！

「……」

あ、すみません。

許して下さい、もう変なこと言いませんから、蹴らないで下さい、向こう脛を蹴られると地味に痛いですから。

テオドラは私に冷たい視線と熱々の蹴りを下す。

「ゴホン、ゴホン」

テオドラとの至福のときを迎えているとき、私とテオドラとテープル越しで向かい合っているアリカ姫殿がわざとらしく咳をする。

現在、アリカ姫殿との会談、もとい、密談のために、人々が安泰に平和ににぎやかに暮らしている都市から結構離れた場所にある、古く、ボロボロで、汚らしい、目の前の王族で清潔で神々しさまで感じる美女と隣にいる美少女には、似合いもしない1階建ての建物に私とテオドラとアリカ姫殿と3人が対面している。

と、言つても、建物の外には何人か人の気配がするのですが。

大方、帝国か連合の者でしょう、護衛の役割か、テオドラとアリカ

姫殿の話の盗み聞きか、それまた別の訳か、そんなことは私には分かりませんが。

まあ、こちらに危害を加えるつもりなら殺せばいいし、護衛とかだつたら放置しとけばいいので、テオドラ達には言いませんが。

それにしても何について話すんでしょうか？　おら、わくわくしてきましたぞ！

願わくば、『完全なる世界』について何かしら情報があればいいんですがね。

では、私は授業参観で少し真面目になった小学6年生の如く静かに話を聞いていきましょうか。

……。

……。

……。

「ヤッタアアアアアアアアアアああああアアアア！　サイクロンが出来たアアアアアアアアアア！」

「……………」

ツハ！？

私は暇潰しで始めたペン回しの奥義を成功させて、椅子から立ち上がって生涯で1番かもしれないと言っほどの歓喜の咆哮をして少しの時間をおいてから、テオドラとアリカ姫殿の無言の圧力に気がついた。

私は流石に申し訳なく感じて、「すみません」と会釈をしながら椅

子に静かに座った。

あつ、痛い。

テオドラ、お願い、わき腹を抓らないで、あとアリカ姫殿も「ツチ」とか舌打ちをしながら私にガンをつけないで。

私のライフポイントは精神的にも肉体的にも、もう0よ！

だつて！　だつて！　堅苦しい話を2人で長々しく話してるものだから、退屈で脳漿が溶けそうになっちゃったんだもの、仕方ないでしょう！

肝心の『完全なる世界』のことも私が知ってる程度の話しかしないし。

もう授業参観じゃなくて三者面談をしてる気分になっちゃったわ！

これは私のせいじゃないわ、あなた達の計画的犯行の結果なんだわ！　そうよ、私は何も悪くない、私は無罪よ、そして、これは冤罪よ！

「ア？」

すみません。

私が悪かったです、生まれてきてすみません。

私はガタガタしながら今度こそ静かになった。

それは、私が真面目で、優等生で、授業中に手を上げて質問するよくな絵に描いたような中学生ではなく、命の危険を察知したからである。

少し回りくどく言ってみたものの、分かりやすく言えばただのチキンである。

それから更に数分が経ってやっと話が終わり

私が暴走をしたと



きは既に話が終わりかけていたところだったらしい、もう少し暴走が遅れていれば、きっと私のライフポイントは温存されていただろう。私達は席を立ち、お互いに会釈をして、お互いのホームに帰るために建物を出た。

と、建物を出たところで、私自身すっかり忘れていた複数の気配の正体が私達の目の前に現れた。

数は約10人と言ったところ。

服装はローブを纏っていて、見た目だけで考えたら魔法使い、実際に魔法使いだったら、分かりやすいな！ 馬鹿か？ と言ったかんじの見た目である。

ちなみに顔はローブのせいで見えない。

この正体不明の怪しい、魔法使いっぽい奴らが現れてから、少し間を置いてからアリカ姫殿が「何者だ！ お前たち！」と言った。アレ、てっきり私はアリカ姫殿の知り合いかと思ったのですが、違うのですか。

私は帝国の者かも知れないかと思ってテオドラの方に顔を向ける、すると、テオドラは困惑した顔で首を左右にゆっくりと振る。

ふーん、少なくともテオドラとアリカ姫殿は知らないらしいですね、帝国の上層部の差し金か、それまた連合の上層部の差し金か、第3の選択肢か。

はて？ どちらにせよ、殺してやってもいいんでしょうか、ああ、でも、テオドラの前では殺害は御免被りたいですから、無力化することにしでしょうか。

私が物騒な事を考えていると、ローブを着た魔法使いっぽい正体不明の変態達　私が命名　は私のことを見ながらコソコソと話をしている。

うふふ、今日の私は少しお化粧をしていますからね、しかも素肌がよく見える大胆な服装ですから、あの人達、私のことやらしい目で見てるのかしら？

冗談です、私にそんな性癖はないですわ、私の服装はいつも通り黒一色のスーツに、黒の革靴に、白いワイシャツと、特に際立った手入れもしていない短い黒髪ですの。

と、そんな戯れた発想の私に向かって急に光の矢が飛んできた。おろろ、どうやら私を殺すような雰囲気です。

「テオドラ、アリカ姫殿。危険ですから私の後ろに居てくださいませ」

「かいと……」

テオドラは心底、不安と言った声で私の名前を呟く。

「大丈夫ですわ、わたくし、少々腕に自身がありますの」

「そうじゃなくて、口調がキモいぞ」

「……………」

ガーン！ 私は多大のショックを負った。

そんなことをしていると、光の矢は私の目の前に来て。

跳ね返った。

「!？」

ローブを着た男達は私に向かって行った光の矢が、最初と同じ速度で術者の方向へ飛んでいくことに驚いているようだ。術者はまさか自分の放った魔法が自分に向かって行くとは思っていなかったのだろう、避け損ない足に当たり倒れた。

……ふー、少々すかしてみましたが、実際は結構怖いものですね、内心びっくり！ っていう感じ。

でも、大丈夫なのは理論上、分かっていました。計画通り！ と、言ったところです。

ローブを着た魔法使いっぽい正体不明の変態達 E s i d e

何が起こった!？

誰だか知らないが、目標を攫う上で見られるわけにはいかないから、殺そうと思っただが、仲間の1人が放った人を殺傷する目的の、一般人を殺す程度の威力の伴った光の矢は、あの男に触れる皮一枚のところまで方向を変えて戻ってきた。

勿論、光の矢を放った仲間は俺達以上にわけが分からなかったんだろう、避けきれずに足に当たって倒れた。

「……何者だ、あいつ」

仲間の1人が、驚愕が入り混じった、心の困惑が顕わになっている言葉を呟く。

きつと、俺達全員がそう思ったことだろう、仲間の1人が誰に向け

たか分からない問いに答える者は誰もいない。

奴のあのすかした表情を見る限りでは、奴自身が何かしたんだろう。だが、何をしたかは見当もつかない、術者の放った魔法を術者以外が操るなんて、魔法か気を使った技かは知らないが、どちらにせよ聞いたことがない。

正直訳が分からない。

こんな訳の分からない、敵の詳細も分からない状態で何かをしたところで、返り討ちにあうのは目に見えているから、俺達は誰も奴に攻撃を仕掛けられずにうろたえている。

そんな、膠着状態とも言えない、膠着状態を打破したのは、この膠着状態にした張本人である男であった。

「実験は成功。結果は上々といったところですね。さて、あなた達が誰かは知りませんが、無力化させて頂きます」

そう言うと、あの男は懐から何の装飾もされていない、シンプルな小ぶりのナイフをだして、右手で握る。

俺達は奴が只者では無いと本能的に悟り臨戦態勢をとる。

とりあえず、様子を見て奴の弱点が何かを見つけるか。

俺達は情報を得るために、戸惑いに満ちた頭をなんとか冷静に保つ。そんな、まだ、冷静である俺達はその冷静さをすぐに失うことになる、恐怖という感情に取り込まれることにより。

「しかし、貴方達は運が良い。私に出会うのが今で良かった。今日の私は少しまともなんで、ね」

そう言って、ニヤリと笑い、何気なく舌なめずりをするあいつから、

急激に色々な気配が漂ってきた。

「ッひ！」

仲間の1人が小さな悲鳴を上げる。

それは本当に仲間が放った悲鳴なのか、それともあちらにいる標的の女2人が放ったのか、それまた、実は俺自身が放った悲鳴だったかも知れない。

しかし、誰が悲鳴を上げたところで可笑しくはない。

奴からは、膨大な魔力、膨大な殺気、そして、異常なまでの狂気が溢れたのだから。

「まず1人」

アレ？ 可笑しいな、あいつはまだ、あそこにいる筈だ。

なのに、なんで仲間の1人の手首が飛んで、仲間は叫びを上げているのかな。

「3人」

俺達は今日9人で来ている、あいつが言うに今の段階で4人がヤラレタらしい。

あつ、最初1人やラレタから、残り4人か。

俺は脳の処理速度が間に合っていない、そんな思考でそんなことを考えていた。

「残り1人……」

最後の1人は俺だった。

腕が折れてはいけない方向へ曲がり、足も膝から下が消えて、アバラ骨の全てが脱臼していることに気づいたのは、今から2秒後。

足が消えて、倒れた俺が最後に見たものは、鮮血で汚れた顔と、ダークレッドになっているスーツと髪、そして、口の中から人肉をはみだしながら、憎たらしいぐらいに綺麗で尖った八重歯を剥き出しにした、恐怖の笑みだった。

「お前……。《紅い捕食動物》」

俺は地面に堕ちて行きながら、噂に聞いた最凶最悪な二つ名を思い出して呟いた。

海斗side

えっ、キモっ！ 何、その厨二病！







” 犯罪的 ” だ、つますぎる！ ” キンキン ” に冷えてやがる！ - t h e 1 3 5

トリック見ながら執筆。

短いです、それに締めは無理やり。

海斗 s i d e

返事がない、ただの屍のようだ。

知り合いである彼が屍になってしまったことを知り、私は悲しむ。彼はいい人だった。

私が困ったときはいつも相談にのってくれて、私が人生に絶望したときも、彼は一生懸命に私を説得してくれた。

だからこそ。

私は彼を殺したあいつが許せない。そして、私は復讐を決意したのだった。

それにしても、彼は死ぬ前に「か……ゆ」とか言っただけで皮膚を掻きまわっていた、余りにも酷い皮膚炎だったから、私は彼に止めるように促したのだが、彼は「う……るさい」とか言っただけで、冷蔵庫の前に行っただけで豚肉を生で食いだした。

なんだが、皮膚の色も変だったし、言葉もしどろもどろだった。あれは何かの病気だったのだろうか。

どうでもいいことだが、最近の事件で数十人のグループが民家を襲って住民を食い殺すとかいうものがあった。

はて？ 目の前にいる死体こと彼も、最近は食欲が凄くなってきたとか言っていたな。

私はそのとき、身体に電流が走ったかと思うくらいに何かを感じ

た！

……もしや、あの事件と彼には何かしら接点が？

私が思考にふけている、そのとき。

目の前にいる屍こと彼が急に起き上がった！ 彼はゾンビだったのだ！

私は目の前が真っ暗になった。

. . . n i c e   b o a t .

「いやいや、1とか2をやったことがある人にしか分からないネタを使うな！ それに前半と後半の文脈が滅茶苦茶だぞ」

「ですよね」

私が自分自身でもよく分からないことを考えていると、テオドラに突っ込まれる。

……ふう、そろそろ真面目にやりますか。

私とテオドラの目の前には1人の男がいる、私に襲ってきた魔法使いっぱい奴等、改め、魔法使いな奴等の1人である。

他の9人は縄で縛って放置してある、一応は縄で縛っているのだが、別に何か抵抗出来る程の体力は残っていないだろう、理由は簡単で骨折や出血をしたせいで衰弱しているから、出血に関してはしっか

りと止めておきましたよ？ 出血死なんて困りますからね。

アリカ姫殿は現在はこの場にはいません。

かと言って、別に国に帰ったというわけではないです、私達の目の届くぎりぎりのところで座っています。

どうやら、私を恐がっているようですね、私の顔を見るとすぐに顔を背けます、分かり易過ぎて困っちゃいます。

それに血をいっぱい見たようで気分が悪くなつたようです、情けないものですねー、自分の国も戦争に加担しているんだから、死とか血とかには慣れてほしいものです、つと、死は慣れてはいけなかったつけ？ 私はなんとも感じませんが。

まあ、そんな事はともかく。

この魔法使いから聞いたことによると、自分達は『完全なる世界』の人間で、アリカ姫殿とテオドラを攫いにきたとかどうのこうの。攫う際に私がいて、邪魔になると殺そうとしたそうだ。

つお？ 『完全なる世界』について聞き出す良い機会じゃね？ とか、思ったのですが、組織の下の方に位置する人間達らしく、何も情報はありませんでした。

「さて……と、情報の整理は終わり。では、行きましようか」

「うむ、『紅き翼』のところじゃな？」

「ええ……」、「そう呟いて私は明日の方向を見つめる。

……。

どうして、『紅き翼』のところへ行くことになったかと言うと、そ

れはアリカ姫殿の申し出たよって。

「……嫌だなー」

” 犯罪的 ” だ、つますぎる！ ” キンキン ” に冷えてやがる！ - t h e 1 3 5

冒頭は相変わらず意味不明です。

作者は冒頭を書いていくうちにテンションが上がっていきま、冒頭は甘えとも思っておいて下さい。

久しぶりに同級生の人と会うと何だか不思議な気持ちですよね。

海斗side

現在進行形で人が困っているとき、人はどうするか、私は現実逃避しかし。まあ、今はそこまで困っているわけではないですが。

「…………い…………、…………い…………おい！」

困っているわけではないですが、少々耳障りな怒声を浴びせられています。

目の前には『紅き翼』のリーダー、ナギ殿が私の胸倉を掴んで怒声を（ry

ちなみにナギ殿以外にも、『紅き翼』のメンバーが私を囲んでいます、記憶してる限りでは、ラカン殿に、アルビレオIIイマ殿に、ゼクト殿。この前戦ったメンバーですね、詠春が居ませんけど。

「詠春いませんけど、皆さん久しぶりですね」

「…………！」

ナギ殿が一瞬だけ叫ぶのをやめる。少しの間ナギ殿が私の胸倉を掴んでいる状態で沈黙する。そうしているとナギ殿は徐々に顔を赤くしていつて、胸倉を掴んでいる手にも力が入ってゆきプルプルと震えていきます。

私は殴られる予感がしたので 予感というか、必然 後方に跳ぶ。そうすると、ナギ殿以外のメンバーがナギ殿を取り押さえる、ラカン殿だけは鼻をほじってますけど。

ナギ殿は取り押さえられても尚、両手両足をバタバタと使って暴れている。取り押さえられているメンバーも必死の形相ですね、あの小さな体のどこにそんな力があるんでしょうか。

「離せ！ あいつは一回殴らないと気がすまねエ！」

「やめて下さい、ナギ！ 今彼を殴って機嫌でも損なわせてしまったら、詠春が帰ってくることはなくなります！」

流石はアルビレオ・イマ殿といったところでしょうか、随分と冷静な判断です。しかし、私の目の前でご機嫌とりをこれから行います的な発言をするのは、いささかアホに感じられます。

「うるさい！ あんな野郎ボコボコにしてから拷問でもなんでもして、詠春のことを聞き出せば大丈夫だ！」

「ナギ！ また、あなたは自分の勝手な行いで味方を失うようなことをするつもりですか！」

「……………」

アルビレオ・イマ殿がそこまで言うと、漸くナギ殿が大人しくなる。ナギ殿も少しは前回での戦闘でのミスを反省しているようですね。私は人間の成長というものを直に見たことで少し感動を覚える、その時間わずか1秒。

あと、黙って見てましたけど、ナギ殿はまだ私に勝てるつもりでいるのですかね。馬鹿も度が過ぎると唯の力スつてこと知らないのでしょうか、私は人間の退化というものを（ry

「ご安心下さい、偉大な英雄ナギ殿、あなたの仲間はずっと生き



てますよ。ちょっとした軟禁状態にありますが、食料も与えていますし、お風呂にだって入れる、もしかしたら普通に生活しているよりも有意義なものかもしれないですね。それにあれぐらいの部屋だったら偉大な英雄の仲間の詠春だったら、もう抜け出しているかもしれないですね」

まあ、幽閉されているという事実がある限り普通に生活するよりも有意義なんて感じられないでしょうけどね。

ちなみに最後のは嘘、必要のない嘘ですけど、なんとなく言っていました。私が作り出した空間に詠春を幽閉しているので、抜け出すことは不可能でしょう。

「……」

まだ不満があるのか、ナギ殿が私を睨みつけ続ける。それにしても面倒臭い野郎だな！

私がナギ殿のダルさに頂垂れながら、どうしてナギ殿が私を睨みつけているのかを考えていると、アル殿が「詠春はいつ返してくれるのですか？」と聞いてくる。

おお！ アル殿は気が利きますね。

「そうですね、別に今すぐでもいいですよ。あなた達は今犯罪者ですし、表立って戦争に参加したり出来ないでしょうし」

そういえばこの人達今は英雄じゃなくて犯罪者でしたっけ。たしか連合のお偉いさんを暗殺しかけたとか何とか。その結果『紅き翼』とアリカ姫殿は犯罪者に。

そのことを思い出したら急に可笑しくなり、腹を抑えて笑ってしま

った。

「……プツ！ 連合の英雄がまさかの裏切りつて。あなた達もやりますねエ」

「俺達は陥れられたんだ！ あの白髪野郎に！」

ナギ殿が何やらいい訳をしているようですが、白髪野郎つて誰でしょう？ とても気になります。何でしたっけ、ナギ殿が殺しかけたとかいう……、ああ！

「マクギル議員に？」

「違う！ 『完全なる世界』の幹部だ！」

団体名を急に出さないで欲しいですね。普通の団体ならともかく、その組織は裏の組織みたいなものでしょう？ 私は知っていたから良いですけど、知らない人に言ったら戸惑いそうです。まあ、そんなことはどうでもいいか。そんなことよりも『完全なる世界』ですか。このタイミングでその名前を聞くななんて都合主義ですね。話の展開的には楽なんでしょうけど。

「へえ。『完全なる世界』にねエ。その話を色々と聞かせてくれませんか？」

私がそう言うとナギ殿は少しの間だけ黙ってから口を開く。

「……まず詠春に会わせる。そしたら俺達の知ってることを教えてやる」

「いいですよ」

ナギ殿がこちらに要求してくると、私はすぐに了承する。余りの即決ぶりに『紅き翼』の方々は鳩が豆鉄砲をくらったような顔をしています、ラカン殿だけは鼻くそをほじって……。

うわ！ 食べた！

……きたねえ。いいや、忘れよう。

私は記憶から今の光景を消して、詠春を幽閉している空間をこの世に顕現する。

すると、私の隣に丸く黒いものが現れる。私は黙ってその空間に顔をつっ込み詠春を呼ぶ。周りから見るととても変な光景でしょうね。

「えいしゅーん。こっちにおいでー」

……。

来ねエ。アイツはご主人様の言うことが聞けねえのか？ ご主人様じゃないけど。

……ハア。仕方ない、呼びに行つてきますか。

私はナギ殿達に「少々待っていて下さい」と言ってから、中へ入つてゆく。

こここの構造はとてもシンプルで、一つの道にドアが等間隔で並んでいるといったもの。刑務所の牢獄みたいな感じですが。牢獄を例えにだしましたが、ここはとても綺麗になっていますよ？ これも魔法の力です。

さてと、詠春の部屋に着きましたし入っていきますか。ちなみにドアには鍵はついていません、鍵でもかけられたらダルいですからね。

私が入ると、詠春は椅子に座ってこちらを睨みつけてきました。

「なんで？　なんで、呼んだのに来ないんですか？」

「……」

私が詠春に問いかけるも、返事は一向に返ってこない。

私は何か言えよという意志を込めて詠春の顔を睨みつける。

……

……。

……。

「あ。」

詠春を睨みつけていると、詠春が口にタオルを銜えていることに気が付いた。というか、あれは自主的に銜えているわけじゃなくて、私が無理やり銜えさせたんですけどね、自殺防止用に。

それに気が付くと、足と手も椅子に固定してあることに気が付いた。これは特に意味はなくて、唯の暇つぶしです。

すっかり忘れていました、テヘ

私は口に銜えさせているタオルと、足と手を固定している縄も解いた。

「……手と足を縛られているのに、どうやって動けっというんだ」

「いやー、ゴメンね？ うっかりしてましたよー」

「……フンっ。で？ 何の用だ？」

「うん。実はさ、話は突然なんだけど。あなたを解放しようって話なんだ、外には大切な大切な《仲間》のみんなもいますよ。アハハ、良かったねエ？」

私が自分でも嫌な奴だなー、と思いながらそんなことを言うと、詠春は顔を俯かせて沈黙する。

まあ、色々と考えることがあるのでしよう。詠春は確かに仲間を助けましたが、あのとき何よりも優先していたのは自分でしたしね。

『紅き翼』の皆様は知らないでしょうが、詠春自身には負い目もあって会いづらいとね。

しばらくの間私は空気をよんで黙って詠春を待っている。しばらくそうしていると、詠春は何かを言おうと口を開きかける。

だけど。

「会いたくない、なんて言うなよ？」

私はもしかしたら詠春が言うかもしれないことを、先に言う。釘を刺しておいたつてところかな。

「……」

凶星だったのか、詠春は口を閉じて黙る。

例えば生存本能とはいえ仲間を裏切ったようなものですからね、後ろめたいものがあるのでしょうか。だから、今は仲間に会いたくない。

まあ、詠春の心の葛藤も分かる気がしないでもないですが、そんなことは私にはどうでもいい。

「あなたは私が捕らえている『紅き翼』のための抑止力です。あなたの都合なんて私には関係ない。」

「……」

詠春は自分の立場を理解したのか、しばらくすると「分かった」と言って立ち上がる。

と、色々あって詠春と『紅き翼』の対面。詠春は外面では笑顔でいました。

その様子は平和で和やかでプラトニックでドラマティック！ 特に面白いこともなく、感動の再会は終わったので、ここでは野暮なので話しません。



久しぶりに同級生の人と会うと何だか不思議な気持ちですよ。(後書き)

作者はシーンとシーンの？ぎが苦手なことに気が付きました。  
精進したいと思います。



**第一印象は大切よ、最初のうちは。（前書き）**

お久しぶりです（汗

更新が遅れてゴメンナサイ…。夏休みが始まったので更新を週1ぐらいで出来るように頑張ります。

出来ない自分ですがこれからもよろしくお願いします。

## 第一印象は大切よ、最初のうちは。

アリカside

戦争が始まり数多の人が亡くなった。

妾もこの戦争で酷いことをしてしまった。妹を戦争の道具として使ったこと……、妾は最低な人間じゃ。それでも、オステアの民を守らなければならぬ。

自己嫌悪とオステアの民を守る事の責任感が心の中で渦巻き葛藤をする毎日。

そんなときに妾の騎士達からとある報告があつた。曰くこの戦争は全て操られていると。『完全なる世界』という組織によって。

……許せない。

何が目的か知らんが個人の勝手に周りを巻き込むなんて。人がいっぱい死んでいるのに！ 家族が死んで残された者が悲しんでいるのに……。

わたしだって

……いや、妾は被害者なんかじゃない。むしろ加害者といつても過言ではない。

同情なんていらぬ、自分の行いを正当化なんてしたくない、妾は憎まれればいいんじゃない、人の上に立つ者として。

妾は生まれたときから王として生きていくことを義務づけられた身。自分のことなんてどうでもいいんじゃない、ただ民のことを考え続けていけば。それが妾の存在理由であり生きがいじゃ。

所詮それが偽善であつたとしても。

『完全なる世界』という名は何度が聞いたことはある。裏の世界の組織とか、ゴロツキどもだという印象じゃったが。実際はもっと大きい組織じゃったというわけか、国を操作すらしているんじゃない。きつと各国の内部に何人も『完全なる世界』の人間がいるのじやろう。実際にナギの馬鹿達が嵌められたわけじゃしな……。

そういつた裏づけもあつて、妾達の目的である戦争を止めるということをするには『完全なる世界』を根絶やしにしなければならぬ。そのために下位組織でもなんでも見つけ次第すぐに消していくということを、妾達は今後の方針として決めた。そして徐々に仲間を増やしていく。単純な方法だが同時に最も現在の状況に適しているとも思える。

『完全なる世界』と妾と馬鹿達『紅き翼』の闘いか。今は奴等の方が優っているが、最後には絶対妾達が勝つ。妾の騎士達は人数こそ少ないが、最強の騎士達じゃ。

きつと妾達が勝つてみせる。

そのためにも妾もしっかりしなければな。最近の妾はどうも気が滅入っていたようだ。ナギ達にも心配されてしまっている。

そもそも何故妾の気がこんなに滅入ってしまったかと言つと、黒田海斗の存在が原因だと思う。あの男は一体何者なのだ？

最初に出会つたのは1つの小屋の中、テオドラ皇女との密談のときだ。短めの黒髪をツンツンとさせて、端正な顔立ちに、黒い瞳、そして小麦色の肌。妾と頭1つぶんぐらい大きいから身長は180前後か。見た目は素直に良いものだと思つた、全身黒ずくめで何だか奇妙な感じはしたがな。

それよりも妾が気になったのは亜人ではなく人間であるという点じや。ヘラス帝国は基本的に亜人の国だ。だが黒田海斗は亜人ではないことが一目で分かった。何故人間がヘラス帝国側についているのか疑問に思った。ヘラス帝国にも亜人ではなく、少なからず人間もついているのは知っていたが、皇女の傍においておく程だとは思わなかった。

しかし妾はよつぼど信用のおける男なんだと決め付けひとまず思考を止めた。

そして始まったテオドラ皇女との話。そのときにも黒田海斗は妾の興味をひく行動をいくつかつた。そのときの印象は落ち着かない男、本当にこの男は信用出来るのか？ などだった。

黒田海斗に気をとられながらも話は進み、終わりを迎えていった。そして国へ帰ろうということまで妾達が外へでたときに妾の気の滅入る原因となつた事件が起きた。

唐突に現れる複数人の魔法使い達。後から分かったが魔法使い達は『完全なる世界』の者達の端くれで、妾とテオドラ皇女を攫おうとしていたのだとか。そして奴らは黒田海斗を邪魔者と判断したのか、黒田海斗を殺そうと攻撃した。

……。

それがあいつらの判断のミスであり死活問題だったのだろうか。

妾が魔法使い達に警戒していると、あいつらの1人が光の矢を放ってきた。その光の矢は黒田海斗に当たる直前に跳ね返り、来た道そのまま同じ速度で帰っていった。妾はふと妹の存在が脳裏に浮かんだ、魔法が跳ね返る？ 魔法を打ち消す体質なら分かるが、跳ね返す体質なんて聞いたことがない。このことについてはそのうち調べる必要があるかもしれない。

その後は惨劇と呼べるものだった。

黒田海斗が何かを呟いてナイフを握ったかと思うと、急激に殺気と狂気、膨大な魔力が辺りを埋め尽くした。妾はそれを感じ取ったら心の中が恐怖で満ちていったのが分かった。妾は最初黒田海斗はそこまでの実力をほこっているとは思ってはいなかった。だがそのとき理解した、黒田海斗は力を隠していたのだ。妾はナギの馬鹿とその仲間が訓練しているところを見たことがある、そしてその魔力の大きさも。妾はナギの馬鹿の力の大きさを凄まじいものだと思っていたが、黒田海斗の魔力の大きさはナギの馬鹿に匹敵するかもしれないと思った。

そして1分もしないうちに魔法使い達は全滅した。妾は黒田海斗が狂気や殺気を抑えた後も恐怖に震えていた。妾は黒田海斗に恐怖を刷り込まされたのだ、あいつが妾に危害を加えるつもりもないのに、勝手に。

海斗side

私とテオドラはアリカ姫殿が率いる『紅き翼』と合流。そしてそのまま行動を共にすることを決めました、テオドラが勝手にね。ですがまあ私としても『紅き翼』と共に行動するのは願ってもない……、と言える程でもないですが構わないことではあります。ゲートが直るまでの暇つぶしと、『完全なる世界』への仕返しをかねてね。『完全なる世界』の仕返しをするためには『完全なる世界』の情報を得ることが必要。『紅き翼』はその点便利です、情報収集が得意な優秀な人員がいますからね。私は力ばかりで情報を集めるのは苦手なようですし……。

ちなみに『完全なる世界』への怒りは最近になって沈静化してきま

した。時間も結構たってますしね。そもそも私がキレた原因はあれですし、一時の気の迷いというか怒りというか。

結局のところ少し『完全なる世界』の敵陣の中で暴れられたら、それで私としてはもう十分なんです。ああ、でも戦争を終わらせないとテオドラの命が危機に陥るといことなのでねー、『完全なる世界』は消した方が利口かな。うん、『完全なる世界』には悪いですけど徹底的に消させてもらいましょう。

『紅き翼』の皆さんは私のことを凄く嫌っているようなので、それが行動を共にする上で唯一面倒な事なんですよね。それにナギ殿が私に「もう1度勝負しろ！」とか言ってきましたし。私が負けることなんて有り得ないのに。私を殺すことが出来るのはこの世界ではアリカ姫殿ぐらいですかね、それ以外では例外なく殺すことは不可能でしょう。

そんな嫌われ者の私が『紅き翼』と共に行動出来る理由はテオドラの存在があるからなわけです。テオドラは『紅き翼』の皆さんにも好かれていますからね。まあ私は別に『紅き翼』の人達と馴れ合いをするつもりはないですから別にいいんですけどね。

そんなこんなで私達含む『紅き翼』の今後の方針としましては『敵陣を穿つ！』っていう単純なもので、その過程で仲間を増やしていくとか。

私は働いていませんよ？ テオドラと戯れています。雑魚を倒すのは同じ雑魚の役目なのです、私は敵の大御所と殺り合うそのときまで何もするつもりはありません。私達は元々帝国の人間ということなので皆さんも大目に見てくれるので大丈夫ですよっと。

ということとで今日もテオドラとゴロゴロしています。詠春を閉じ込めていた空間の1部屋で。

「かいと」。ナギ達の手伝いしなくていいのか？」

テオドラがポツ　ーを片手に私に聞いてくる。

ちなみに配置としては私が椅子に座って、テオドラがベッドの上でゴロゴロしているといったかんじ。凄くマダオな雰囲気がありますが気にしません。

「大丈夫ですよ。あの人達ああ見えて結構チートですから」

「そうなのか？　かいと以上にか？」

テオドラは私に視線を向けながら、そう聞いてくる。結構失礼な質問ですね、気にはしませんが。

私は1度テオドラの方を向いてからまた手に持っている雑誌に目を戻す。

「さあ、どうでしょうか。この前は勝ちましたけど、あれは偶然の産物だったかも知れませんが、幸運の女神が舞い降りたのかもしれない」

そして適当に返しておく。

こんなかんじで『紅き翼』が頑張っているなか私とテオドラはダラダラと毎日を過ごしていったのである。





真の黒幕は最後まで姿を現さないものです。

### 三人称視点

全ては鈍足のようにみえて迅速に進んでいった。

『紅き翼』は敵の拠点を次々とおとしていったのだ、着実に仲間を増やしながら。そこには犯罪者としての『紅き翼』の姿はなく英雄としての姿があった。リーダーであるナギのカリスマ性に惹かれる人間は絶えることなく増え続けた。

そして、『紅き翼』の勢いは加速的に増して、遂に敵の本拠地

【墓守り人の宮殿】、オステイア王宮の最深部にある　を見つげ出した。

敵の本拠地を知った『紅き翼』は直に【墓守り人の宮殿】へ向かった。

今までテオドラと遊んでいるだけだった海斗も今回は流石に行かないとマズいので『紅き翼』と共に行動した。

【墓守り人の宮殿】へ進入した海斗含むナギ達は次々と湧いて出て来る敵を薙ぎ払い、奥へ奥へと進んで行った。ほぼ最深部と言える所まで来たナギ達の前に『完全なる世界』の重鎮であるう者達が現れた。勿論バグ集団であるナギ達にはそんな重鎮などちっぽけな弊害ぐらいのものであって、すぐに重鎮達は全滅した。

「見事……理不尽なまでの強さだ……」

白髪の青年は涙を流しながらそう言った。

「黄昏の姫御子は……どこだ？ 消える前に吐け」

ナギがそう言うと白髪青年は涙を流しながら笑みを浮かべ返事をする。

「フ……フフフ……。まさか君はいまだに僕がすべての黒幕だと思っ  
っているのかい？」

「なん……だと？」

白髪青年の言葉に驚愕するナギ。

そのとき。

黒い光線がナギ殿を貫いた、白髪青年諸共。

『紅き翼』のメンバーはナギが貫かれたことにより、ナギの命の安否を確かめようと駆け寄り寄ろうとするが、突如現れた敵に気づいて足を止める。

「誰だ!？」

その叫びに返答することなく新しい敵は容赦なくラカン達に攻撃をした。ゼクトとラカンが防御を試みるが、新しい敵の攻撃は簡単に防御を貫いた。

『紅き翼』の全員が瀕死の状態。その場で唯一無傷で立っていたのは新しい敵と黒田海斗の2人だけであった。

少しの間……、ほんの少しの間海斗と新しい敵は視線を合わせると、徐に口を開いてそつと呟く。

「造物主……か」

そして苦笑いしながら転移をしてこの場から消えた。

海斗が消えたことは『紅き翼』にとってシヨックなことであった。

『紅き翼』は表面上にはだしてはいなかったが、内心では海斗に期待を持っていたのだ。新たな敵……、造物主の登場により自分達は勝てないと思つた中、海斗への期待は希望にすらなつた。そんな『紅き翼』の心情を見事に裏切つて転移をしたのだからシヨックは多大なのである。

そんなこともあつたが結局ナギが造物主を倒し『完全なる世界』は実質崩壊した。

それからアリカが『災厄の女王』として死刑されることになつたところをナギ達が救出したりしたのだが、黒田海斗が『紅き翼』の前に姿を現すことはなかつた。

時は過ぎ場所も変わる。地球ではナギの息子ネギ・スプリングフィールドが生まれていた。

物語は『魔法先生ネギま』本編に変わる。



真の黒幕は最後まで姿を現さないものです。(後書き)

はしよりすぎた(汗

というのも、そろそろネギをだしたいなーなんて思ったからなんです。後からはしよった魔法世界編の話を追加するかもしれません。

**妄想と現実は一重。(前書き)**

これからはネギま本編になります。

アンチ作品になることは間違いないと思いますが、作者はネギのことは嫌いではありませんが良い子であると思っています。ですが、それではつまらないのでネギの性格は若干変えると思っていますのでご了承ください。

## 妄想と現実は一重。

人間は変わろうと思っても中々変われないと思う。しかしいつまでも変わらないかと言えばそういうわけでもなく、むしろ変わるものだと思う。

変わらざるにはられない、と。

変わりたいなくても変わっていくのではないか、本人の意思とは関係なく。劇的に変わる人間もいれば、少しずつ変わる人もいる。

本人の意思は関係ないと言ったが、その人が良い方向へ変わろうと思えば少しずつ良い方向へ変わっていくのではないか、と思う。

だが本人が良い方向へ変わっていつているつもりでも、周囲の人間から見たら悪い方向へ変わっていつているように見えるかもしれない。

人間は勘違いし易い生き物なのだ。

明日菜 side

わたしは生まれて初めてヤンキーにからまれた。

早朝に宅配の仕事をしているときに「あの」と後方から声をかけられたので自転車を一旦停止して振り返った。ちなみに中学生であるわたしが仕事をしているのには理由があるのだが今はどうでもいい。そしてわたしが振り返って視界に入ったものは見た目がとてもいい。ついヤンキーだった。

わたしが（あちゃー。こりゃからまれちゃったか？）とか考えているとヤンキーはわたしのところへスタスタと歩いてくる。

わたしは殴り合いになることを覚悟して自転車から降りて身構える。このとき自転車で逃げなかったのはわたしが勝気のせいだ。敵前逃亡は敗北を意味する！ 逃げるくらいなら玉砕覚悟で突撃だ！ っと、つまり負けず嫌いなのだ。だけど別に殴り合いになったとしても負けるつもりはない。わたしは頭は悪いけど体力にだけは自身がある。勿論勉強だつてやれば出来る……はず。

そんな事を呑気に考えていると目の前には既にヤンキーが立っていた。

わたしは今にも来るであろう暴言やパンチに備えて体に入力を入れる。そんなことは知ってか知らずか目の前のヤンキーはゆっくりと口を開いた。

く……来る！？

「おはよう」

……。  
……。  
……？

わたしは想定していた事態とは全く異なる状況に混乱しながらもゆっくりと思考力を取り戻していく。

「……おはようございます」

とりあえず挨拶をされたからには返事をしておく。若干堅苦しい挨拶になったのは目の前のヤンキーはわたしよりも年上だと思ったからだ。



「ちょっと尋ねたいことがあるのですがいいでしょうか。君はこの生徒さんですよね？」

目の前のヤンキーさん　　どうやらヤンキーなのは見た目だけのよ  
うだが、他に特徴という特徴はないのでこれからもヤンキーと呼ば  
せてもらう。だけど年上なのは確かだろうから一応さん付けはする  
はニコっと笑ってわたしに聞いてくる。

「は……はい」

「それでは女子中等部の場所を教えてくださいませんか。方向だ  
けでいいので」

ヤンキーさんは自転車のカゴの中に入っている新聞をチラっとみて  
からそう言う。

割と紳士！？　見た目と内面は違うって言うけど、分かりやすい例  
がわたしの目の前にはいた。

さっきまで緊張していたのが馬鹿みたいに思えて溜息をつきなが  
ら体の力を抜く。ヤンキーさんはそんなわたしの姿を見て「どうしま  
した？」と聞いてくるのでわたしは慌てて「な……なんでもないで  
す！　あはは……」と返事をしておいた。

でも勘違いするのも仕方ないよね。だってヤンキーさんの見た目す  
つごいんだもん。

顔を見てみれば眉毛がなくて金髪に染められた髪は肩まで届いてる。  
その長髪から少しはみ出ている耳たぶにはピアスがつけられている。  
服装はラメの入った黒いスーツ、ワイシャツはピンク色だ。

身長は高く顔は小さい、そして端正な顔立ち……ってイケメンじゃ  
ない！　よく見てみたらヤンキーといよりはホストのような見た目  
だった。眉毛がないせいでヤンキーに見えてしまったのだろう。

そんな風にわたしがヤンキーさんのことを上から下までジーっと見ていると、わたしはヤンキーさんが困った顔をしていることにやっ  
と気づくことが出来た。

そんな失態を隠すように「あっちです」と慌てて女子中等部がある  
方向を指差した。

「どうもありがとうございます」

「いえ。それよりも送って行きましょうか？　ここ凄く複雑なんで  
すよ」

「大丈夫ですよ」それだけ言って踵を返してわたしが指を指した方  
向へ歩き出す。なんだか見た目は若いのにその後姿には私の好みの  
オジサマオーラが漂っていた。

それにしても誰なんだろう？　わたしは今更になってそんな疑問が  
ふと頭に過ぎった。

聞いておけばよかったなー、と軽い後悔をしているとヤンキーさん  
は何かを思い出したように歩みを止めてこちらに戻ってくる。

「そうそう言い忘れてました」

ヤンキーさんはわたしの事を見て微笑みながら言葉を繰り返す。

「あなた……。記憶を改変されたんですね」

「……え？」

ヤンキーさんの言葉を理解出来ないまま、ほとんど無意識に返事を  
した。

「アスナ・ウエスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア。こ

の名前をご存知で？ 神楽坂明日菜？」

「どっし……」

「黒田さん！」

どうしてわたしの名前を

その疑問をそのまま口に出そうとしたとき、わたしの後ろの方から叫び声が聞こえた。

わたしは反射的に声をした方向を見た。そこにいたのは高畑先生だった。高畑先生はわたし達にいつも見せるような優しい笑顔ではなく、厳しい面持ちでヤンキーさんを見ていた。

わたしはこの状況に着いていけずにポーと高畑先生のことを見てみると、高畑先生はこちらに向かつてゆっくりと歩いてきた。そしてわたし達の前まで来て立ち止まると同時にいつもの高畑先生が見せるような笑顔をわたしに向けて頭を撫でる。そのあとに私に目を合わせながら口を開いた。

「この人は僕の知人なんだ。案内は僕がするから明日菜くんは仕事頑張って」

少し落ち着いてきたわたしは「はい」と言ってからその場を後にした。

わたしは仕事をしながらもヤンキーさんの言葉とさっきの高畑先生の雰囲気について考え続けた。

三人称視点

「久しぶりですね、タカミチ。若干老けましたか」

明日菜が立ち去るのを見送った海斗はタカミチに話しかける。だがタカミチはそれに答えず黙って海斗に睨み付け続ける。海斗もそれに合わせるように微笑みながらタカミチを見続ける。しばらくしてやっとタカミチが厳しい面持ちのまま口を開ける。

「何のつもりですか？」

「おや。久しぶりの感動の再開なのに、開口一番がそれですか。そもそも私は公式には死んでいることになってる筈なんですけど……。驚かないんですか」

タカミチは溜息をついてから話を続けようとする。

「あなたが死ぬところなんて想像出来ませんよ。間違いなくあなたの實力は……、最強と呼べるでしょうからね」

「随分と買いかぶりますね。嬉しいですよ、『悠久の風』のエアースに褒められて」

相変わらず海斗は微笑みながら会話をする。それは久しぶりに知人と出会えたことを素直に喜ぶような笑みだ。

「だからこそ分かりません。どうして造物主の前から逃げ出したんですか」

タカミチは心底分らないといった顔で海斗に問いかける。自分が知っている人間の中で間違いなく最強な存在、それこそ憧れのナギよりも。圧倒的で無敵で崇拜すら出来るような力。

その黒田海斗がどうして『完全なる世界』の黒幕である造物主から逃げ出したのか。

「あなた達は私が逃げ出したと判断したのですか。まあ間違いでもないんですけどね」

「違うんですか？」

「いや、私は造物主から逃げ出したという認識で結構ですよ。まあナギ殿が造物主に勝てるであろうことは分かっていましたけどね」

これ以上聞いても無駄だろうと思いタカミチは「そうですか」と話を打ち切る。

少しの間海斗と同じように穏やかな顔をした後にまた厳しい顔に戻るタカミチ。そしてまた口を開く。

「さっきはどうしてあんなことを言ったんです？」

タカミチはさっきの明日菜と海斗のやりとりを思い出しながら話した。

それに対して海斗は相変わらずの笑顔でクスクス笑ってから口を開く。

「だってタカミチを含めた数人が隠れて話を聞いているものですから、少し悪戯をしたくなっちゃいましたね。直に出てきて案内してくれればよかったのに」

タカミチはそれを聞いてまた溜息をついた。

ちなみに実際に近くには数人の魔法先生兼警備員が何人が隠れている。海斗のその発言を聞いて驚いた様子である。

魔法先生達はまさかバれているとは驚いているのに対して、タカミチはいたって冷静に海斗の話を受け入れた。それはタカミチが海斗の実力を知っているからである。

「黒田さんが結界を破って此処に入ってきたので不審者と勘違いし

たんですよ。それにしたって今度からはこんなことしないで下さいね」

タカミチの忠告を聞いた海斗は満足した顔で「ええ」と了承をする。

「それで今日はどういった理由で此処へ来たんですか？」

「ああ、私としてはそれが本題なんですよ。実はしばらくの間此処に滞在しようと思いましたがね」

「此処に……ですか」

「はい。知り合いが数人いるので久しぶりに会いに来たんですよ」

タカミチは一瞬困ったような嬉しいような微妙な顔をしてからまた口を開ける。

「そうですか。ではとりあえず学園長の所へ案内しますよ」

それからタカミチと海斗は学園長がいる所へ歩き出した。

海斗 side

常人を超越した人間。

超人

私はその姿を今日の当たりになっている。

「宇宙人？ 現代の人間にはありえない骨格をしていますね、この後頭部。すみませんが切って中身を確認してもいいですか？」

「ほほほ……。出来れば勘弁してもらいたいんじゃないか……」  
「冗談ですよ」

後頭部を切りたいと思っているのは本当ですけどね。それ程目の前の老人は興味深い頭をしているということだ。確か近衛近右衛門でしたっけ、凄いややこしい名前なのでこれからは学園長と呼ぶことにしましょう。

そんなことを考えていると学園長は徐に私に話しかけてきた。

「名前は……。黒田海斗さんでしたか？」

「そうですが。私のことを名前を知っているなんて珍しいですね。大戦のときの所以で『紅い捕食動物』とかの方が有名だと思っていましたが。まあその二つ名はアレなので言われたくないんですけどね」

私の名前を知っている者は本当に少ないのは確かだ。何しろ私はこの世界の誰かから生まれたのではなく急に現れた存在。だから戸籍等は存在しないということだ。作ろうと思えば簡単に作れるだろうけど。

「義息子から話は聞いてますよ。あと高畑先生からも」

成る程、詠春からですか。詠春が私のことを何て言ってるかは気になります。今はいいでしょう。

それよりも今は早く本題に移りましょう。

「本題なんですが。しばらくの間此処へ滞在する予定なんですが宜しいでしょうか」

私がそう言つと学園長は何かを考えるように黙つた。

「……それはいいんじゃないが。こちらからも少しお願いをしていいかの？」

「何でしょうか」

「1つ目は此処の警備。2つ目は……。近々この学園に来る魔法先生の面倒を見ること」

あー。ナギ殿の子供か。

メガロメセンブリア元老院の知り合いからそんな情報を聞いたような気がしなくもない。

「警備つて、不審者や危険因子は殺していいんですか？」

「なるべくなら殺しはしてもらいたくないの」

「殺さなければいいんですね？ 分かりました」

ダルマにして廃人1歩手前程の状態にしますか。勿論生きるために必要な臓器は残しておきますよ。

「2つ目の魔法先生の面倒は私の気が向いたらでいいですか？」

「うむ、まあよからう」

あの目は絶対にやらせてやるって目だな。まあダルいから絶対にやりませんけど。

「ふむ……。これで契約成立じゃの」

学園長がそう言つて手を差し出してくる。



私はその手の方へ手を移動させて……、学園長の顔を指差した。学園町は驚いた顔をしているが、私は構わずニコっと笑ってから口を開く。

「調子に乗るなよ。これは命令なんだ、契約じゃないんだよ」

私がそう言っていると学園長は何かを言おうと口を開きかけるが、その前に更に畳み掛ける。

「私を利用しようとか不毛な事を考えるんじゃないと言っているんだ……。そうそう、あんたには孫娘がいたな。可愛いかったな、知ってるよ有名だからな。あんな可愛い子がもしも誰かに攫われて不良集団とかに引き渡されたらどうなるかな？ ああ、でも護衛も何人かいるよな。でも攫う奴がその護衛以上に強い場合もあるよなア？ アハハ、そんなことになったら大惨事だ。帰ってきたら廃人同然ってかア？ 面白えエ」

そこまで言って最後に学園町の頭を指で1回突付いてから言葉を続ける。

「私の気持ちを裏切らないで下さいよ。学園長」

それだけ言っていると顔を真っ青にしている学園長を置いて学園長室を出て行く。

さあて、アルメンは元気かな。



## 亡命、帰国、かむとうーん。

海斗side

「ゴメンナサイ……」

土下座。

頭を地面に擦り付け、地面とキスをして、土を食べて、結論的に地面と愛し合う事。

「許しません」

頭の上には綺麗で、色白で、シミ一つなく、純潔で、清潔で、健康そうな足が……、私の頭を踏み付けている。

勿論現代の人間が裸足という原始的な状態ではなく、靴を履いているものだ。しかしそんなことは重要ではない、当たり前のことだから。重要なのは私を踏み付けている人の履いている靴がハイヒールということだ。

心なしか頭蓋骨にひびがはいつている気がする。だけどそんなのは気がするだけであって、実際はそうではない。私の体には賢者の石が入っていて、その効力で傷等はすぐ治るといふ。非常にハイクオリティーな体だ。

だけどそんなハイクオリティーで高スペックな体が裏目に出ることだってあるだろう。

何が言いたいかと言うと、さっきから私の頭蓋骨は陥没と修復を繰り返しているのだ。まるで音楽プレイヤーだ。

「何か下らないことを考えていますね」

「ええ」

「そうですか。死んでください」

そう言うと私の頭の痛みが消える。私の頭を踏み付けている足をどかしたようだ。そうすると必然的に地面とチューをやめたくなくなるのが人間の性なので、私は顔を上げて目の前の人を見る。

メイド服を着た八頭身美人。

アルメンだ。

うーん、相変わらず猫耳が良いですね。

そんなことを考えていると、アルメンは唐突に歩き出して私の正面から側面へ移動する。

「知ってますか、みぞおちを殴ることをソーラー・プレキサス・ブローっていうんですよ。では蹴る場合もそういうんでしょうか？」

「ア……アルメン。何を」

私の問いかけは空しくアルメンは足を振りかぶる。そしてその綺麗な足は美しい弧を描いて私の腹へ直撃した。

と、思ったら来るべき衝撃は一向に来なかった。

「フフ。冗談ですよ、もう許してあげます」

私は恐る恐るアルメンの方を向くと、天使のような笑顔をしたアル

メンがそこにいた。その笑顔が逆に怖いですが、どうやら本当に許してくれたようです。

そもそもどうしてアルメンが怒って、こんな状況になったかという  
と。私がいつまでも帰ってこなかったから、だそうです。デジャブ  
を感じずにはいられないので詳しい事は省きますけどね。

まあ実際数十年単位で帰ってこなかったから仕方がないといえば仕  
方がないと、私は納得してみる。私がしばらくの間隠居まがいのこ  
とをしていたのには理由があるのですが、まあどちらにせよ因果応  
報ってね。

私は立ち上がりアルメンと向き合う。

「随分と変わりましたね」

アルメンは私の事を見ながらそう言う。

「色々あったんですよ。そう言うアルメンは全く変わっていませ  
んね。安心しました」

安心します。居心地が良い。心のオアシスの様に。

「本当に 変わりましたね」

私がアルメンの変わらない雰囲気と和んでいると、アルメンは小声  
で何度か「変わった」と繰り返した。

その表情はとても楽しそうだった  
悲しそうな表情には、見えなかった。

それにしても。

「ログハウスも無事で良かったです。最悪の場合破壊されてるとも考えてましたが」

私はアルメンの後方にあるログハウスを見上げながらそう言う。

「建物の状態はそのまま位置だけ移動させて、あとは人払いの術をかけたというところですか」

「はい……」

「……」

「……」

私とアルメンはログハウスを静かに見つめる。

静かに、ゆっくりと、のんびりと時間は過ぎていく。

「アルメ」

「海斗」

「は、はい？」

私がアルメンに話しかけようとする、私がアルメンの名前を言い切る前に、アルメンが唐突に私に話しかけてきた。そしてゆっくりと私の方に振り返り、

「おかえりなさい」

と言った。

私は一瞬呆けたが、すぐに微笑んで見せて「ただいま」と返事した。





諸君、私は戦争が好きだ！（前書き）

…うーん。正直書くのがつらくなってきました。

でも、完結は必ずさせるつもりです。展開はなるべく早めるつもりですが、投稿は遅くなってしまいそうですので、長い目で見れる方でないとこれからキツイかもです。

諸君、私は戦争が好きだ！

三人称視点

黒田海斗

大戦時代に活躍されたと思われる人物。

それまでは人殺しとして賞金首になっていたそうだ。姿と性別以外はほとんど情報がなく、賞金も多いという程でもないため、好き好んで彼を狙う人間はいなかった。だから彼は表の住人はおるか、裏の住民達にすら認知されていなかった。

その黒田海斗が有名になったきっかけは大戦の時のことだ。

帝国に攻めてきた、連合の100万前後の兵をたつた1人で退けた……、いや、消し去ったのである。彼が去った後に残った死体ののは全ては心臓が止まっていた、しかしそれ以外に身体には何の異常もなく、健康そのものだったという。それは魂だけを消したかのよう

に。  
このことはヘラス帝国の一部の人間に知れ渡り、やがて連合の耳にも入った。

連合の人間達は今まで、ヘラス帝国に送った兵達が死んだ理由を突き止められておらず　ヘラス帝国に向かった兵が1人残らず殺されたため　そのことを聞いたときの驚きは凄まじいものだったという。

そして彼は裏の住民、一部の表の人間にも認知されていたのだ。

しかしそのことを聞いた人間の多くは驚愕と共に疑念という感情も抱いた。

自分と同じ1人の人間が果たしてそんなことが出来るのか？

だがその疑念もまた、彼が起こした次の惨劇で薄れ、彼の異常なまでの強さを皆確信していく。

グレートブリッジをヘラス帝国に占領せられ、戦局が悪くなる一方だった筈の連合に『紅き翼』という英雄が現れ、グレートブリッジはまたも連合のものに。

『紅き翼』が加わった連合の勢いは土壌……、鰻登りに。

その勢いを止める要因になった事件もまたグレートブリッジで起きた。

連合に奪還されたグレートブリッジを再び占領しようと、ヘラス帝国はグレートブリッジへと進攻を始めた。今度は黒田海斗も加わりグレートブリッジを攻められたことを知った連合は『紅き翼』含む別働隊をグレートブリッジへ送った。

そのとき連合の誰しもが『紅き翼』の力を過信し、連合の優勢を信じてやまなかった。

しかし連合の予想とは裏腹に、戦局は予期せぬ方向へ変わっていった。

まずグレートブリッジに元々いた連合の兵とは別に、加勢にやって来た別働隊の連合の兵達がほぼ皆殺しにあったのだ。常識を逸した残酷な殺し方で

その光景は後に、遠目にその惨殺を見ていた人間から噂されていくことになる。人を食い殺すその光景から『紅い捕食動物』という奇

妙な二つ名がついたのは、このことがきっかけである。

その場に着いた『紅き翼』は彼に戦いを挑み、そして敗北した。結果は、『紅き翼』の全員の重症と、近衛詠春の損失と最悪なものになってしまった。

そして、別働隊のほとんどが負傷したこともあり、グレートブリッジはまたしても帝国の手に落ちてしまった。

今回は目撃者もいるということもあって、黒田海斗は一部の人間達の間では有名になっていった。狂気と悪意に満ちた恐ろしい名として

その後、彼は犯罪者になった『紅き翼』と行動を共にしたそうだ。実質的な活躍がほばないため、実際は分からないが。

そして彼は《墓守り人の宮殿》の中にいる『完全なる世界』を殲滅する際に姿を見せたきり、行方不明となった

「……………ふむ。厄介じゃの」

学園長は神妙な顔で報告書を机に置いた。

その学園長と机を挟んで向かい側にいるタカミチもまた神妙な顔で頷いた。

（出来れば、上手いように使えるようになるかとも思ったのじゃが……………、それは無理かの。ワシの手に余る……………、化け物じゃな。それに既に警戒されてるようじゃしな。警戒心が高いものじゃな……………。いや、あれは人間を信じていなさすぎ、疑心暗鬼の類かの？ なんにせよ、厄介には違いないがの）

学園長が思考にふけていると、タカミチは徐に口を開いた。

「あの人は　黒田さんは人を嫌っている筋がありますが、こちらから何もしなければ問題は起こさないと思いますよ。……ただ、暴走すると被害は甚大なことになると思いますよが」

「それが厄介じゃの。これを見る限り、暴走の頻度が多すぎやしないかの？　これじゃ近いうちに、この学園は木っ端微塵じゃ」

まあ、しかし。と学園長は続ける。

「啖呵はきられてしまったが、仕事はある程度引き受けてくれるようじゃ。……ネギくんの指導については微妙じゃが」

「とりあえず、当面のうちは大丈夫そうですね。ですが、一応対策も考えた方がいいかもしれません」

学園長とタカミチはこれからのことを話し始めた。

エヴァ side

「先ほど、1人の男がこの学園に侵入してきました。学園側に知り合いがいるらしく、現在は放置されているようですが。……マスタ  
ー？」

「……ああ、知っている」

海斗……！

諸君、私は戦争が好きだ！（後書き）

書いていて気付きましたが、論点が少しずつずれていくんですよね。  
…。  
これからは気をつけます。

**非常識も繰り返せば常識になる。勿論そんなことは常識的に考えて余りないが。**

理由がありパソコンのサーバーが切断していたのですが、先日によつと復旧いたしました。ということで、久しぶりに投稿します。

あと関係ありませんが、灼眼のシャナの3期が遂に始まりました！

くぢゅじゅじゅじゅじゅじゅじゅ！



非常識も繰り返し返せば常識になる。勿論そんなことは常識的に考えて余りないが。

海斗side

私というイレギュラーな存在は、せんじ詰めて言ってしまうえば、本来この世界では不要な存在なわけだが

それはいうなれば、質量保存の法則を無視したかのように。

要はこの『ネギま』の世界という容器の中に、私という雑多な不純物が混じった状態である。

だけどそんな異常が許されるのは、あの偉大なる幼児こと神様がいるからであって、本来は可笑しいことだ。何故ってそれは勿論、質量保存の法則が今になって間違っていました、なんてことになつたら世界中の科学者が困惑の渦に巻き込まれるからですよ。

しかしまあ、世界中の科学者がいくら困惑したって私は困ることはないのです。

「どうでもいいことなんですよね」

もつとも、この思考自体がどうでもいいといえはばどうでもいいんですけどね。

うん、存在理由についての思考終了。

そんなことを考えるよりも、今この瞬間を楽しむことが人生というものです。どれだけ人生を楽しむか、それを考えることが重要であつたりします。

そして、そんな楽しく、《ココロがオドル》ような人生を送るた

めには、副産物として（いや、こちらがメインか）辛いことや悲しいことも待っていたりするのです。

と、蛇足的な思考を繰り広げたわけですが

「エヴァはどうしたのですか？」

テーブル越しに向かい合っているアルメンに話しかける。

ちなみにアルメンは八橋を食べている。ちなみに、ちなみに抹茶味。

どうやら最近のマイブームのようだ。

ところで、抹茶味というのは昔からあるのでしょうか。それとも最近になって現れた八橋の派生の1つなのでしょうか。

結局の所、どうでもいいんですけどね。私がバナナ味一筋なのは変わることのない事実なのでから。

「今朝にエヴァに会いに行っただんですけどね、出会った途端に攻撃されましたね」

「……そうですか」

アルメンの持っている八橋は1刹那だけ口と皿の間で彷徨って、結局口の中に入ることにはなかった。八橋はアルメンの手の内から皿の上に戻る。

「最初は冗談だと思ったのですが……。思った以上に本気らしくて、普通の人だったら軽く200回は死ぬ程の氷の槍が飛んできましたよ」

私を睨み付けるエヴァの表情は憎悪というものが感じ取れたのですが、それは言わない。

「話せる状態ではなかったもので、とりあえず逃げてきたのですけど。どうして攻撃されたのか、いまいち理解出来なくて」

「……私も攻撃されたんですよ。20年くらい前にエヴァが此処に来てから何度か会いに行ってるんですが、いつも話も出来ないまま」

「ふうん。私だけではないんですね」

ほんの少しだけ安堵してみる

それは自分だけ嫌われているのではないという安心感、1人ではないという事実からくる、醜い感情。

そんな感情を無かったかのようにして、私は思考を戻す。

「では」

一体絶対、何なのでしょう？

エヴァがふざけるといえるのは考えられませんが、何よりそういう雰囲気ではなかった。

アルメンはエヴァのことはとても可愛がっていましたし、そしてエヴァもアルメンには非常に懐いていた。だというのに、アルメンにもエヴァは攻撃的とな。

それはつまり、私とアルメンに対しての敵対心が強いということを意味している。

「どうしますか？ 海斗」

「どうしましょうか。私にはエヴァの思考が全く掴めません、理解

不能です。エヴァに聞くごにも、話を聞いてくれるか微妙ですし…。ということ、しばらくの間は様子を見てみることにしましょう。幸いか不幸かは知りませんが、エヴァはこの地から離れられないようですし」

「………そうですか」

エヴァはこの地を離れられない。呪いのようなものをかけられているからだ。どういった理由で呪いがかかっているのかは知りませんが、この地にいる限りエヴァの位置が分からなくなることがないのは幸いですね。

時間はまだあるし、このことは先送りにしましょうか。急がば回れっていいますしね。

「嫌な事は保留にする、か」

駄目な奴だな。

穴があつたら入りたい。そうかい、なら入っていいよ、ちゃんと埋めてあげな

海斗side

9月から10月に変わり、段々と肌寒さを感じるようになってきた。偶に見る魔帆良学園の生徒や教師も衣替えの時期はとうに過ぎたのか、厚手の服を着ている。

季節も秋と変わりだしたのだとしみじみに思いながら歩みを進めていると、目的の場所に辿り着いた。目の前には大きな扉がある。私がノックをすると中から肯定の返事が返ってくる。

私が魔帆良学園に来てから5日目の正午。ようやく此処での生活も慣れてきたので、学園長と一応の約束について話そうと学園長室にこうして訪れたのである。

部屋の中には学園長1人がいる。

「お久しぶりですね。先日は失礼しました、少しだけ横暴過ぎました」

あー、恥ずかしい。

思い出すだけで、赤面してしまいそうになります。

もう少し言い方つてもものがあるでしょうに、ガキみたいなことしちゃいました。

「うむ、反省してるならいいんじゃない。それより今日はどうしたんじや？」

「ええ、この前した約束について細かい事を聞こうと思いましたが」といふか、私が気になるのは1つだけなのですが」

「ふむ？」

どうでもいいですけど、この人って私の知ってる誰かとキャラがぶってるんですね。「〜じゃ」って語尾とか。

「仕事をする上での私の立場とかが気になりましたね。ほら、他の魔法先生とかも警備員をやっているのは、先生という職業のついてじゃないですか。私にも魔帆良学園内の公式の役割が欲しくてです、今回はこうして頼みに来ました」

つまり此処にいる理由が欲しいというわけです。

警備をする私自身が不審者と勘違いされては困りますから。「お前は誰だ？」とか言われる度に説明するのはダルいですしね。

「成る程な。要するにその辺を歩いていても何ら不思議ではない職業が欲しいというわけじゃな」

「そういう訳です。出来ないなら出来ないでも構いませんけど、ちよつとした興味と不安ですし」

「それは構わないんじゃないか……。ふむ、なら用務員なんかどうじゃろうか？」

用務員ですか、それは中々良いですね。

掃除とか、物の修繕とか……、私の知っている範囲ではそのような仕事でしょうか。他にも色々あるんでしょうけど、まあ、仕事は暇なときに少しするぐらいでいいですよ。あくまで私が欲しいのは 此処にいる理由 であって 仕事 ではありません。仕事なんて余りしたくありませんしね！ ニート？ 違いますよ、自宅警

備員が子供の頃からの夢だけです。

「ではそれをお願いします。あと証明書的なものも下されば助かります」

「ふむ、構わんよ」

私は挨拶をし、部屋を出て行こうとドアの方に歩き出したとき、学園長が「そういえば、この前話した新しい魔法先生が明日に来るから宜しく頼むぞ。名前はネギ君というんじやが、あの《紅き翼》のナギ・スプリングフィールドの息子じゃ。ナギ君とは面識があるんじやろ？ ネギ君のことは気にはならないのかな？」と言ってきた。

長いよ！ あと「」かな？」じゃねえよ！ じじいが使う口調じやねえだろ！

……それにしてもナギ殿の息子ですか。ネギ・スプリングフィールド、ネギ君、ネギ、ネギ坊主

「……………」

思い出しました。確かこの世界の主人公でしたか、すっかり忘れてました。流石に500年近く生きてるとそんなことは忘れてしまいますね。なるべく忘れないようにしていたつもりでしたが……、成る程此処が漫画の世界だということすら忘れていましたね。

しかしネギ坊主ですか。悪く考えれば面倒臭いモノが来た、良く考えれば面白いモノが来たといったところでしょうか。

原作の内容はもう殆ど覚えていませんが、漫画の世界しかもバトルものだというのだから色々なイベントがあるのは間違いないでし

よう。また《大分裂戦争》のときのように人が傷つけ合い、戦い合うことがあるかもしれません。

流血、憎しみ、仲間割れ、そして死

戦いは色々な負の要素を招いてくれる。それは私にとっては最高の

御馳走

決めました。ネギ坊主の血と涙と感動が溢れる、最高の物語に私は関与していきましょう。

主人公であるネギ坊主によって招かれる戦い。いつだって物語の主人公は戦いの渦の中心にあるものなのです。楽しい、楽しい戦いを期待していますよ。たとえ《大分裂戦争》のときのような戦いがなくとも、そのときは私が戦争を起こせばいいだけ、死が付き纏う戦争を――

私の中の100万の戦士達も戦いを求めている。私の中で、私と戦争と世界、他のありとあらゆるモノに対しての憎悪を増幅させて。今か今か、とその負の感情を爆発させたがっている。

夢の中での彼ら、彼女らの声を私は毎夜、毎夜と聞いているから分かっている。

破壊させてあげたい、殺させてやりたい、そしてそんなこととは関係なく私が、この私が――

「黒田君？」



「……はい、ネギ君のことは気に掛かりますね。ネギ君の面倒について、気が向いたらしてみようかと思えます」

「そうかね」

ああ、よく考えてみたら《大分裂戦争》から、もう2、30年も経っているじゃないか。

私はそれほど我慢してきたのか。

そのとき私は無意識の内に溜まっていた破壊衝動の存在を自覚した。

「楽しみですね」

「ネギ君が来るのか？」

「はい、徹頭徹尾楽しませてもらいます」

## 第巻話 ネギ、襲来

海斗 side

今日の日本ではアニメだとか、漫画とかが流行している。少しずつ私の前世での記憶に当てはまる日本へと変わってきている。

そしてアニメだとか、漫画とかが流行していると《ヲタク》という言葉も流行するようになってきた。

作者、あなたのことですよ。

……………。

っあ！ 私としたことが……………、また電波を受信してしまったようです。

……………いや、今はそんなことはどうでもいい。

「何してはるんですか、アルメンさん」

「……………」

アルメンは私の呼びかけを全く聞いてないようで、何の反応も示さない。

「……………え？ どうかしましたか、海斗？」

遅！ 反応遅！！ リアクション芸人だったら、あなたもっお終いですよ！ ギガうまならぬ、ギガ遅です。

「……いえ、アルメンは一体何をしているのかなと」

「見て分からないんですか？ 海斗は知能指数が少ないですね、馬鹿ですね、屑ですね」

「どうしてそんなクソミソ言われなきゃいけないのか分からないんですけど。」

「まあ、いいです。許してあげます。海斗の頭が可笑しいのは昔からですからね」

「……今のが一番ショックを受けました。しかも《可笑しい》って、活字でしか分からない苛めをしないでくださいよ。」

「というかアルメンってこんな酷い子でしたっけ？ 昔はもっと優しかったのに……。」

「私はアルメンをそんな子に育てた覚えはありませんよ！」

「わたしは今フィギュアを観賞しているんですよ。分かったら邪魔だからどっか行ってくださいね、海斗」

「……………」

ネギside

日本で先生をやること。

先生か……。大変だろうな。今までは教えられる側だったけど、

教えるっていうのはとても難しいもののような気がする。それに、勉強だけを教えればいいわけでもないだろうし……。

「それでも頑張らなきゃ……！」

《立派な魔法使い（マギステル・マギ）》になるためにも、お父さんに少しでも近づくためにも！

そのためにも魔法をもっと勉強して、《善いこと》をもっとしなきゃいけないんだ。

僕は真帆羅学園都市の敷地内にいる。

《立派な魔法使い》になるための修行の一環として、日本で先生をやる必要があるからだ。《先生をやること》、なんてとても珍しいことだとは思っけど、やらなきゃいけないっていうのなら僕は頑張るしかない。

僕はそう張り切りながら魔帆羅の中を歩き回り、途中で迷いかけたりしたけど、何とか目的の場所まで着くことが出来た。

「わわわ、何コレ！？ スゴイ人！」

人がいっぱいだ、日本の学校って凄いな……。

あれ？ あの人。

僕は1人の女子生徒が気になり、近づいていく。

「あの……。あなた、失恋の相が出てますよ」

ああ、親切なことした。

ドヤ顔でそんなことを思っていると、その女子生徒に怒鳴られた。

……え、なんで？

アスナ side

わたしこと神楽坂明日菜は今学園長室にいる。

「学園長先生！ 一体どーゆーことなんですか？」

なんでこんな子供が先生なんかに？

それ以上にこのガキのせいで、わたしは高畑先生に……ッ！

わたしが激昂していると、学園長とネギとかいうガキは《修行》とかよく分からない話をし終えていた。

と、思ったら、学園長がまたわたしの神経を逆撫でするようなことを言い出した。

「このか、アスナちゃん。しばらくはネギ君をお前達の部屋に泊めてもらえんかの？ まだ住むとこ決まったらんのじゃよ」

何よ、それ！ そもそも住むとこ決まっていっておかしいですよ！？

「もっつ、そんな何から何まで！ 学園長！」

フオフオフオ、じゃないわよ！ 木乃香も「かわえーから、いいよ」「じゃないわよー！」

それに、なんかこいつ胡散臭いし……。

もう何だっというのよ……！！

海斗 side

「あ！ このフィギュアのキャラ知ってます、確かセイバーっていうんですよね！」

私は棚に綺麗に並べられているフィギュアの1つをとり、アルメんに話しかける。

するとアルメンはギロリと私を睨み付けてきた。

「……海斗、それはセイバーオルタです。あなたの目は節穴なんですか？ あと汚い手で触らないでください」

「何が違うのか、さっぱり分からないんですが……」

アルメンはため息を付きながら、体ごと私と向かい合わせた。

「あのですね、あなたみたいな《にわか》がですね

アルメンは《にわか》について語りだす、それは永遠と思えるぐらい長々と。

それを聞いて思ったことは（作者、あなたのことですよ）とメタなことだけだった。

薄れ行く意識の中、ふと脳裏に過ぎったのは

(そういえば、ネギ坊主って今日でしたっけ)

今更だった。





しているということですね。

でも、外は思ったよりも寒かった。秋だから当然なのでしょうが、今日は一段と寒く空気も乾燥していたのです。だから私は鼻を赤くしながら、外に出てきたのを後悔している最中だったりします。

「……しかし、悪くはありませんね」

私の手で道を綺麗にしていくというのは存外、楽しいところもあった。だから今の私の心境は後悔半分、歓喜半分といったところでしょう。

また、暇なときやりたくなったらやってみましょうかね。

「お前、何者だ？」

「……………」

私のことではないでしょうね。

「いやいやいやいや、あんただよ、あんた」

私が知らん振りを決め込んでいると、肩に手を置かれた。

え、私？

振り返るとそこには三白眼、褐色肌が特徴的な、綺麗な女子生徒がいた。

美人さんですね。

「……あの、何か？」

「お前、何なんだ？」

何なんだ？

「ただの用務員ですよ」

それにしても、この美人さん失礼なのはいいとして、魔族の血が混じってますね。左目は魔眼のようですし。

ということは魔法関連の人間でしょうか。

まあ、面倒なので 用務員 ということに納得させるつもりですが。

「嘘を付けっ、お前は明らかに普通じゃない。他の人間の血の匂い  
が多すぎて、お前の匂いが全く分からない。……お前、何人殺した  
？」

誤魔化すのは無理のようです。中々の使い手なのでしょう、全て  
がお見通しのようですな。

「さあ、分かりません。潰した蠅の数など誰も数えてはいないでし  
よう？」

「……まあ、いい。名前はなんていうんだ？」

「あなたにそんなことを言う筋合いはないと思うのですが。それに  
人に名前を聞くときは自分から名乗りましょうね、常識ですよ」

少しだけ反撃してみる。

「生憎とわたしは此処の警備を任されているんでね、危険なものは  
排除しなきゃいけないんだ。そして、あんたは明らかに危険だって  
判断したんでね」

反撃は無残に終わった。

「でもあなたの言うとおりだ、名前は名乗らせてもらうよ。わたしは龍宮真名」

「……しょうがないにゃあ、正直に言うのでしょうか。このままじゃ埒があきませんからね。」

「私は黒田海斗といいます。一応私も此処の警備を任されているんですがね、ちなみに用務員というのも本当です」

「なっ……!？」

「龍宮さんは鳩が豆鉄砲をくらったような顔をして、固まってしまいました。面白い顔ですね。」

「あ、あんたが黒田海斗？　　紅い捕食動物　の二つ名の？」

「恥ずかしいから、やめてもらえませんかね。明らかにおかしいでしょう、その名前。」

「まあ、そうですね。恥ずかしながら、一部の人間にはそう呼ばれていますね」

「全然分からなかったよ。膨大な魔力を持っているって聞いていたからね、なんでそんな魔力が小さ……、隠してるのか」

「流石は一流の使い手、気付いたみたいですね。物分りがいいというのは素晴らしいものです。」

逆に物分りが悪いというのは、殺したくなってきました。いや、どうでもいいんですけど。

「……殺さないのかい？」

龍宮さんは褐色肌の顔を少しだけ青くさせて、震えそうな声を我慢したような声で尋ねてくる。

……殺す？　ころす？　コロス？

「どうしてですか」

「　紅い捕食動物　は気性が荒いつて聞いている。それに殺されるような態度をとったのは、分かっているつもりだしね」

成る程、悲しいものです。

「別に殺しませんよ」

「……何？　それは、どういうことだ？」

「何ですか、殺して欲しいんですか」

「そんな筈ないだろう。ただ、わたしの知っている情報とは全く違うからさ」

「どんな情報ですか……」

「【出会ったら死は覚悟しろ。逃げようなんて考えるな、苦しみが増えるだけだ】とか。これはわたしの昔の知り合いから聞いた事だ」

「……………」

殺人鬼か獣みたいな言われ方をされていますね、私も。少し憂鬱になります。いえ、否定出来ないのも事実なんですけどね。

確かに、あのときは狂いに狂ってましたからね、自分でも驚くくらい 殺人鬼 でしたね。

しかし、今は比較的落ち着いているので、スイッチが入らない限りそんな状態にはなりません。スイッチが入ったらどうなるか、私にも分かりませんが。それに

「確かにそういうときもあるでしょうね。ですが、今の私は比較的落ち着いているので安心していいですよ」

確かに言われてみれば、今すぐでも龍宮さんを食べたい気もするんですけどね、滅茶苦茶に。

でも今の私は我慢出来るくらいには精神は落ち着いているから大丈夫です。

「そうかい……………」

言って龍宮さんは拳銃をしまう。

……………え、いつの間につけていたんでしょうか、少し驚きました。というか、ただで死ぬ気はなかったんですね。関心、関心。

「でも、一応私の方が年上なので あんた は遠慮してもらいたいものですね」

「ああ、すまない。黒田さんと呼ばせてもらおうよ」

素性が分かり、龍宮さんも警戒心を和らげたようです。いや、

実際は分かりませんが。私は読心術なんて生憎と持ち合わせていないものでね。

「それにしても、黒田さんが警備をね。確かに学園長から警備が1人増えたとはいわれていたが……。成るほど、確かに黒田海斗って名前を出しちゃ 立派な魔法使い を目指している魔法先生達は黙ってはいないものな」

まあ、元々は犯罪者ですからね。大戦のときに賞金は解消されたからといっても、私に対して良い印象なんて持つてる人間はいないでしょう。唯一の救いは大戦後半に 赤き翼 と行動を共にしてたことからついた、英雄の仲間という私にとつて都合のいい称号があるということでしょう。ほんの少しとはいえ 立派な魔法使い 志望の善人共の印象を良くなったのは、嬉しいものです。

しかし、学園長も気が利くのか利かないのか……。魔法先生に私のことを話せば、魔法先生の反感を買うのは分かりますが

学園長から事前に話すのと、私が警備をしているところを魔法先生と実際に鉢合わせるのでは、どちらの方が面倒になるかなんて考えれば分かると思うのですが。

まあ、魔法先生とは会わないように注意すればいいだけの話なんですけどね。

或いは学園長は元々そうさせるつもりだったのでしょうか。そうだとしたら随分となめてくれたものですね。

「これは刹那のやつにも言っておかなければな」

「刹那？」

「わたしの同僚ですよ」

同僚……、警備の1人ですか。この子も、その同僚もまだ若いだろうに、既に戦いの味を知っているというのか。魔法使いは早熟なところがあるし仕方ないのでしょうが、改めてこの世界は過酷だと思いが知らされますね

「もう行きますね、また会いましょう」

龍宮真名は手を振りながら、私と離れていく。

それにしても、銃ですか。良いものですね、血を浴びれないのは少々残念ですが、遠くから一方的に相手を蹂躪するというのは中々魅力的なものです。水銀　液体を込めた弾丸　や、鉄、鉛、銀と色々な金属が人間の身体にめり込み、人間としての形と尊厳を消し去ってゆく。

素晴らしいものです。

……そうだ。どうせ暇ですし、私も銃を開発してみましようかね。ナイフばかりでは飽きてしまいますし。新しい玩具達も遊び終えたら、壊さなきゃいけませんね。

「  
」







うるちゃい！うるちゃい！うるちゃい！！

暗い

何処までも続くような暗闇が其処には在る。この眼球が捉えているのは光である筈だが、今捉えているものは果たして、いや確実に暗闇だ。なら、それは疑いようのない暗闇なのだろう、決して光ではない。

しかし、だけど、いや、或いは、もしくは、結論的にはこれは夢なのだろう。どこまでも続く、闇を見せる夢。だから終わりが来るかも知れないし、来ないかも知れない。始まってもしないのかも知れないし、始まっているのかも知れない。

更に言えばこれは現実だろう。今は夢として視ているが、昔の現実なのだろう。それはどれだけの昔かは分からないが、可能性はなきにしもあらず。

これは 私 の現実、昔の現実。壊れる頃の 私 の現実。私の感情であり、私 の真骨頂でもある。しかし、そんなことは関係など何にもしない。

それではそろそろ蛇足は終わらせて、今はただただ無為に創めるとしましようか。

皆様、少々見苦しいかもしれませんが、少しの間お付き合い下さいませ。

堕ちる、堕ちる、どこまでも

海斗side

重たい瞼を開けようと試みる。だけど睡魔には敵わず、半目が精一杯であった。

圧倒的に睡眠不足だ。

「海斗、起きて下さい。朝食は用意出来ていますよ」  
「……………」

アルメンの声が薄っすらと聞こえてくる。

起きなければ、と脳では理解出来ているけど残念なことに身体は脳の意思には従ってはくれない。これは疑いようなない重症だ。

こうなったのにも理由がある。というのも、この前に衝動的に銃を造ろうと決めてから、1日中銃を造ることに没頭するようになった。そのせいで昨日も徹夜をってしまったのだ。

だから、本音を言えば今でも眠っていたいのだけど、アルメンは時間にするさく私の都合なんて関係ないとばかりに今も私を起こそうとしている。いやアルメンが私が睡眠不足なことを知っていて、それでも私を起こそうとしているのには他にも理由があるのだけど

「起きないと、キスとかしちやいますよ。それでも起きないなら、その続きもしちやい」  
「…………ツ！ 起きますす！！」

私は脱兎の如く高速で起き上がる。

「……………」

ん？ どうしてアルメンは私のことを睨んでいるのでしょうか。もしかして 今日も 機嫌悪いのでしょうか。

そう、その理由というのが、このアルメンの機嫌の悪さだ。

理由は分からないけど、アルメンは1週間前の大晦日からずっと機嫌が悪い。機嫌が悪いといっても、料理は作ってくれますし、会話

もしてくれるのですけど……。やはり、長年の付き合いからなのでしょうか、機嫌が悪いというのは見て分かります。と、少しだけ得意気になっている場合ではないですね、アルメンの機嫌をとらなければ。

「アルメン、許してくださいよ」

「何ですか、またですか？ 別に私は怒ってなんかいませんよ。そんなことより、早く朝食にしましょう」  
「む、分かりました」

これは長期戦になる予感ですね。

私は今日1日をじっくりと使って、アルメンと仲直りすることを決める。

とりあえず、朝食は済ませましょうか。

「わ、今日も美味しそうですね！ いやー、アルメンは料理が上手だなー」

「そうですね、それは凄いですね」

「……………」

さて、と……。昼食まではアルメンと話でもしましょうかね。最近は銃造りのせいで、話も出来なかったですし。

「アルメン！ お話でもしましょうか。いやー、実はこの前から造ってるですね」

「邪魔だから、消えて下さい」

「……………」

い、いやー、楽しかった。でも、昼食まで少しの間暇が出来ちゃいましたし、散歩でもしましょうかね。3時間くらい。

それから3時間が経つと、昼食を摂るために私はログハウスに戻ってきた。

よし、昼食だ。今度は失敗しませんよ！

「あれ、料理は？」

「カップラーメンです」

「……いやー、カップラーメンはいいですよ。人類の英知の結晶と言っても過言ではありませんね」

「あ、そうですね」

「……………」

……ふう。昼食も楽しかったですね。これはアルメンの好感度が臨界点を越しちゃうんじゃないでしょうか？ ハハハハハ、私もやりますね！

この調子で午後は何処かに遊びに行くように誘っちゃいますか。

「アルメン！ 遊園地でも行きませんか？」

「いや、いいです」

「えっ……。あ、ああ、アルメンは遊園地よりも映画って気分なんですよね！ いやー、すみません。気付かなくて！」

「行きませんよ」

「……え」

も、もう！ アルメンも照れちゃって！ 別に私も気になんかしないのに……、

……いや、分かってるんです。分かてるんですよ、全て空回りだってことは。無視よりも辛い現実がこんな所にあるなんて、私は知りもしませんでした。

それにしても、アルメンは相当ご立腹のようです。これは、駄目かもしれないですね。いや！ 諦めちゃいけません。エヴァに続きア

ルメンまで失ってしまったら、私にはもう。……兎に角！今はもつと頑張りましょう。

それから、私は夜になるまでアルメンと仲直りする方法を考え続けた。

そして行き着いた結論が

「すみませんでした！」

ワンパターンだった。

「……どうして謝るんですか？」

「理由は分かりません！でもアルメンが怒っているのは分かりません。私は鈍感だから気づきませんが、また私は酷いことをしてしまっただけでしょう？理由は考えても分かりませんでした、すみません！」

本当、怒っている原因も分からないのに、謝るといっことは勝手だと思ふ。でも、いくら考えても答えが出ないのであれば、もう当たって砕けるしかない（いや、砕けちゃ駄目だけど）

言葉でしか伝わらないこともある。だから、話す。

「……海斗が鈍感なのは、前から知っていました。だから海斗に期待をしたわたしが馬鹿なんですよね」

「っつう……」

「でも、海斗が反省しているのは分かりました。だから今回は許してあげます、これからは気を付けて下さい、ね」

「ゆ、許してくれるんですか？」

「はい」

腕組みをしながら、少しだけ微笑むアルメン。

その笑顔は、最高に可愛かった。

その後、仲直りの余韻を楽しみながら、アルメンから怒っている理由を教えてもらった。要約すると、大晦日や元旦と大きなイベントがあつたのにも関わらず、私が銃造りなんてものに現を抜かしているものだから、アルメンは頭にきたそうだ。確かに1年と終わりと初めに、訳の分からないことを一心不乱にやっていたら怒ります。だから私はそういうことも考えて生きていかなければならないのでしよう。

それにしても、今回の経験で学んだことは大きかったですね。問題を解決するには行動しなければならぬ。

頑張りますか。

「仲直りをするのには、待っているだけでは何も解決しませんよね」

「海斗？」

「エヴァと仲直りしましょう」

エヴァがどうして怒っているのかは知りません。それは私から見たら小さな理由かもしれないし、大きな理由かもしれない。アルメンから見たら大きな理由かもしれないし、小さな理由かもしれない。でもエヴァが怒っていることは、それは重大なことなんですよ。それは私達全員の大きな問題。

いつまでも問題を先延ばしにし続けていたら、エヴァとの溝は深まるばかりでしょう。そしたら、もう、お終いです。

「海斗……。はい、頑張りますよー！」

エヴァと早く仲直りしたい。早く一緒に話したりしたい。早く一緒に生活をしたい。

アルメンとエヴァと私で。

それが 家族 としての当然の姿だから。





でやえ〜い！この紋章が目にはいらぬか〜！このおかたをどなたと〜ぞんじる〜

海斗side

私は魔帆良学園の敷地内を散歩している。散歩をしている理由は単純に天気が良いからというのと、エヴァと仲直りをするためにはどうすればいいのか、というのを考えるためです。何かを考えるには散歩が一番良いと私は思います。

エヴァと関係を良くするにはタイミングが重要でしょうね。無闇に謝りに行っても攻撃魔法を撃たれてお終いです。ですから、好機を狙うのです。

仲直りをするにはきっかけが重要。

「さて、どうしたものか」

考えが纏まらない。仲直りというのはこつも難しいものなのか。自分のコミュニケーション能力の低さ、いや要領が悪さが憎い。

そもそも、エヴァはどうして怒っているのだろうか。いやいや、あれは怒っているなんて生易しいものじゃない。憎悪や憤怒、又はそれに準ずるものだろう。それほどにエヴァは感情が激しく揺らいでいる。あのとき見たエヴァの瞳はそういうものだった。

エヴァがそこまで怒る理由はなんだろうか。それを考える必要がある。

私達は何をしたのだろうか。エヴァと別行動をするきっかけになったのは、エヴァが復讐に行ったとき。出かけるときのエヴァは別に怒ってなんかいなかった。なら、行き違いになった後だろうか。私達の知らない、私達と別行動をしている間にエヴァに何か起きたのだろうか。エヴァが私達のことを憎むようになった理由が。

「考えても分かりませんよ」、ね。

今は努力するだけです。頑張つて、努力して、血眼になってエヴァと仲直りをするんです。そしてアルメンと私とエヴァで食卓を囲んだりするんです。……それが、私の望みです。

といつても、チャンスを待つだけというのは、どうにも怠惰な気がしますが。ま、いいでしょう。要は気持ちの問題です。

或いはエヴァとは絶縁したまま、もう全てをお終いにするって選択肢もあるのでしょうか。アルメンと私だけで、仲良くしてればいいのではないだろうか。そうすれば、努力をする必要もない。嫌な気持ちになる必要もない。エヴァはいなかったことにしてしまえばいいのではないか。

「それはただの怠惰か」

……心の奥ではそういった考えもある。人間の醜い感情。楽をしようとする、自分が綺麗なままでいたいという切望。

人っていうのは、醜いものですな。

でも、人は美しくもある。

つて、そんなこと私が決めることではありませんよね。何様だつて話です、あの幼児の神様じゃあるまいし。

茶々丸 side

マスター帰って来ません。

わたしはやることもないので、テレビを見ることにする。テレビの内容はバラエティ番組で とんねるズの皆さんのおかげでした

というものだったが、わたしはロボットなので面白いかどうかは分からなかった。だからわたしはテレビを消し、夕食を作ることにした。

夕食を作り終えても、マスターは帰って来ません。

マスターは出かけるときに、学園長と話があると行ってましたが、随分と長い話です。

……もしかして、襲われてしまったのでしょうか？ 学園長、それは犯罪ですよ。

「……わたしのキャラじゃありません」

しばらくすると、やっとマスターは帰ってきた。時刻は既に8時になるうとしている。

「ただいま」と言い、マスターは靴を脱いで家の中に入る。

……とりあえずマスターの身体に異常はないみたいです。安心しました。

でも少しだけ元気がないみたいです。最近のマスターはずっと元気がありません。といっても、表面上ではいつもどおり傲慢な口りいなのですけど。いつ頃から元気がないかというと、確か10月ぐらいいです。

マスターは夕食を摂りながら、愚痴をします。

どうやらネギ先生の教育を頼まれたとか。4月になったら行動を起こしてくれたとか。色々とサポートを頼むだとか。

わたしはマスターの話をずっと聞き続けていました。

マスターは話し終わると、ベッドに入りすぐに寝てしまいました。……それにしても、学園長は随分と過保護のようです。ネギ先生が千の呪文サウゼントマスターの男の子供というのは分かりますが、少し特別扱いし過ぎじゃありませんか。これも立派な魔法使いの人達のせいなのでしょうか。

正義の魔法使いっていうのは、悪の魔法使い 自称 であるマスターと対極の存在。ちなみにマスターは心優しい御方だと思うのですが、それを言う顔と顔を赤くして怒ってきます。

その正義の魔法使いっていうのが、最近では魔法使いの人達の目標になっていくわけです。これも千の呪文の男が影響しているのでしょうか。

彼らは個人的に見た正義 というのを毛嫌いします。悪といっても、社会的に見た悪 や、個人的に見た悪 があると思うのですが。彼らは 個人的に見た悪 という概念を知らず、社会的に見た悪 しか分かってはいません。

何が正義か、何が悪かなんていったものは人それぞれ変わるので。 個人的に見た悪 というのはマイナーで、社会的に見た悪 というのはポピュラーなんです。つまりは多数決。多くの人々が求めている方が 社会的にみた正義 になる。だから、今まで 個人的に見た正義、悪 というのは迫害されてきました。それが、社会のプログラムというものなんでしょう。しかし、何が正義か、何が悪かなんてものは時間が過ぎれば変わります。人が変わっていくのと同じように。だから、結局正義や悪なんてものは存在しないのでしょう。人間が作り出した幻想。仮初の社会や平和を作るためのシステム。必要悪や必要善なんてものは確かに存在するわけです、人間達の間には。

つまり宇宙的に見たら何の意味もないものですが、人間には意味のあるものということでしょう。

と、話が逸れてしまいました。

つまり、彼らは馬鹿だということ。善なんてものは存在しないのに、無邪気にそれを求める。しかし彼らの悪いところは、彼らが勝手にやって、自分達だけで楽しんでいればまだいいんですが、それで他人に迷惑を及ぼすことです。マスターが良い例です。

マスターは昔、自分の意思に反して 真祖の吸血鬼 になってしまいました。強靱な力を手にしたのです。でもマスターは力に溺れず、誰も傷つけずに生きていきました。マスターは心優しい御方です。

それでも、彼らはマスターの存在を全否定していきました。マスターは 真祖の吸血鬼 であるというだけで、正義の魔法使いにターゲットにされたのです。おかしい話です。マスターは何か酷いことをしたのですか？ マスターは人に迷惑をかけたのですか？

……彼らの方が迷惑です。社会的に見た正義 というのを盾にして、社会的に見た悪 を根絶やしにする。その人たちが本当に悪いのか確かめもせず。自分の頭では考えず。周りの言う事を鵜呑みして。彼らは 社会的に見た正義 の奴隷です。自分の頭で考えらず、周りに流されて行動する。ゴミのような人間です。人形と同じです。

……いけませんね、マスターのことになると頭に血がのぼってしまいます。

「マスター、一生ついていきますよ」

「……むにゃ。……かい、とー、はやく」

「……………」

怪盗？



久々にシャバの肉が掴める。

「エヴァを利用するのは許しませんよ」

龍宮真名が『最近、桜並木の道に吸血鬼が現れるって噂が流れるようになったんだ。どう思う？』と私に言ってきたとき、私は頭がおかしくなるんじゃないだろうか、という程腸が煮えくり返った。目の前にいる美女を犯し、学園長のいる部屋に魔弾を撃ち尽くすことをしなかったのは奇跡ともいえるだろう。それ程に頭にキテいたのだ。

私は龍宮真名の言った事で全てが分かった。学園長の人間としての醜さは、私と同属なので理解していた。学園長の正義の魔法使いに対する執着や、周りの魔法先生の執着も知っていた。そして、何よりも千の呪文の男に対する羨望と宗教的なまでの信仰も分かる。

だからネギ・スプリングフィールドに対する期待という感情を奴等が抱いていることなど単純すぎる程に分かるのだ。千の呪文の男が消えたことにより、ナギに対する信仰はあいつの息子であるネギに移り変わる。ネギを千の呪文の男のような立派な魔法使いに仕立て上げる。それが奴等の希望であり自己満足だ。

そう、自己満足。自己満足である。奴等は自分達が少しでもネギの教育に関わっていたという事実があれば、涎を垂れ流す程に喜び散らすだろう。

俺が千の呪文の男の息子の教育に関わった。俺が慰めてあげ

た。俺が魔法を教えた。俺が正してあげた。

他人に言いふらすか自分の中で何回もリピートして、どういう自己満足に浸るかは知らないが、奴等はそれを自分のステータスにすることは間違いないだろう。人間なんてそんなものだ。いくら奇麗事を言つて、他人を助けようとか言つていても結局自分のことを心のどこかで考えている。自分の利益を考えているんだ。

だけどそれ自体は何の問題もない。それは当然のことであり、人間の思考回路はそう出来ているんだ。問題はその事柄で他人に迷惑をかけることだ。迷惑といつても 仕方のない迷惑 と 仕方のなくはない迷惑 というものがあると思う。まあ、そんなことは今はどうでもいい。

この場合の奴等の迷惑は 仕方のなくない迷惑 に該当する。要はする必要のない迷惑だ。

エヴァを利用し、ネギの教育に利用しようとする。恐らくエヴァは何も知らないだろう。自分が利用されているなどは考えてもいないだろう。エヴァはそういうコだ。私とは違う、そこ等辺のゴミのような人間とは違い、物事を真っ直ぐと見通す。そんな心優しいコだ。あいつ等はそんな真っ直ぐなエヴァを利用し、自分達の利益のために使おうとする。何てエヴァに言ったかは分からないが、エヴァが利用されているとは分からないように学園長が誘導したのは間違いない。

だからこそ、だからこそ許せない。エヴァは私の 家族 だ、大切な人だ。そのエヴァを利用しようとするなど言語道断。許してあげはしません。



「……なんのことだか分からないのお」

学園長が言う。言う、言っ……しまった。

私はブチギレタ。

こいつは、まだ惚けるつもりか。私を騙せると思っているのか。私を馬鹿にするな。

エヴァを想う私をなめるな。

私は銃を取り出し魔弾を発射した。魔弾は学園長の心臓に命中する。

そう私は確信したが、魔弾は横から飛び出た腕によって阻まれた。魔弾はその腕が張っている障壁を貫通し、そして腕に直撃して、腕は吹っ飛ぶ。いや、破裂した。魔弾が当たった場所は手の平だったが、破裂したのは肩ぐらいまでだ。

「……気で身体強化してもこれですか」

「タカミチ。何故邪魔をした？」

「むしろ、学園長を見殺しにするのは僕の立場上おかしいと思いませんけど？」

現役からしりぞいた学園長なら、今の速度は見逃していただろうな。だけどタカミチは現役、しかもトップクラスだ。魔弾も腕と同時消しやがった。

「そうだなア。お前の立場上そいつを守らなきゃならないもんな。

あのケツの青いガキが今じゃ、こんな立派な正義の魔法使いか。偉い、偉い。おじさん、びっくりしちゃったよ」

「どうもありがとうございます」

「だけど分かっているのか。いや分かっているよな、分かっているはずだ。お前は私を敵に回そうとしている」と私は言った。「私は敵と決めた人間には容赦しない、そんな子供のような人間だ。それを分かっているお前は私を敵にしようとしている」

タカミチはため息をついて「子供の扱いには慣れていきますよ」と言った。「それにこれはネギ君のために必要なことなんだ。分かってくれませんか」

自分のための間違いだろ。

……こいつも結局は他の正義の魔法使い 希望の偽善者どもと同じか。ナギ達と同じで多少はまともな奴かと思っただけだな。残念だな。残念だ、残念ではある。だけど、それもそれだけのこと殺してやる。

私は銃をタカミチの頭に向けて構えて、トリガーを引こうとした。けどそれは第三者の介入によって成し遂げられる事はなかった。

神楽坂明日菜とネギが学園長室に乱入してきた。

「高畑先生に何してるのよ！」と神楽坂明日菜は叫んだ。それからタカミチの腕の怪我を見て、タカミチの方へ走り出した。ネギは呆然とタカミチの腕があった場所を見ている。

そんな様子を見てみると段々と頭に上った血が下がってくる。新しいゲームのハードを買った頃の喜びと新鮮さが時間と共に失われていく感覚と同じだ。要するに興ざめだ。

「今日は帰ります。ですがエヴァを利用したら許しません。それだけは覚えておいて下さい、学園長」と私は言った。

私は踵を返して部屋を出て行くこととする。そのときに「エヴァちゃん？ 部屋の外にいないの？」と神楽坂明日菜が言ったのが聞こえた。

餅は餅屋、これがあの幻影旅団かよ？もろそうだが、オレ達任せときな（前書）  
アニメ見てないんですけど、ジヨネスの回ってもう終わっちゃった  
んでしょか。

餅は餅屋、これがあの幻影旅団かよ？もろそうだぜ、オレ達に任せときな

「エヴァの人生は過酷だ。過酷と簡単な言葉で表現するのが礼儀に欠けるといえる程にだ。真祖の吸血鬼に望まざりなり、膨大な魔力と強靱な身体能力を得た。だけど失ったものは大きかっただろう。家族や、友達、そして居場所

儂く尊い大事なもの。エヴァは真祖の吸血鬼にならなければ、そういったものが揃った幸せな人生を送っていただろう。だけどそれは仮定の話。昔のことを懺悔し、後悔することは単なる現実逃避に過ぎないのだ。エヴァはそれでも生きようとして、そして現実に生きてきた。非道な人間に苛め抜かれただろう

吸血鬼を化け物と扱う聖職者達に、魔女だと思い込み殺そうとする異端審問官、化け物を恐怖し忌み嫌う村の住民、そして己を正義と信じ悪と決めた者に圧倒的なまでの理不尽を与える正義の魔法使い。彼等は一貫したところ悪くないのだろう、それが彼等にとつての正義であり常識であり必然だ。私がお飯を当たり前のように食べていることが何者かには圧倒的なまでの理不尽になっているかもしれない。私が蚊を邪魔だと思い殺してみよう、私は満足だ。邪魔なものや人を殺し愉快、爽快、絶好調だ。だけど蚊にとっては私など絶対的な憎悪の対象だろう。

勿論そんなのは仮の話、極論に過ぎない。蚊はただ殺されたと感じる間もなく原子になるだろうし、ご飯を食べたところで困る人等ほぼ皆無だ、例えば私がお飯を食べて困るものがいたとしても、そのものは私には憎悪の感情を向けられないだろう。

「っと、話が脱線しましたね」と私は言う。走りながら、ただただ

走りながら、私は思考する。

エヴァはそういう罪悪感のない人間に苛め抜かれてきた。情け容赦のない社会に苛め抜かれてきた。実際、初めてエヴァに出会ったときのエヴァは憔悴しきっていた。身体的にはない、精神的にだ。エヴァはもう崩壊寸前だった、か細い体は触れて折れてしまいそうだが、その心はもっと脆く、拙く劣化をしていた。その心は烈火の炎で溶かされたガラスが固くなり、そこにまた熱を加えたときのように簡単に、本当に稚児が歩く振動程度で簡単に壊れてしまうだろう。そのエヴァに私は家族として接してきた

エヴァが少しでも幸福を味わえるように。そして実際エヴァは幸福を味わえただろう。私の目にはそう思えた。エヴァは私の家族である、妹か娘のようなそんな存在だ。私とアルメンの大事な、大事な、家族なんだ。その生活の中でエヴァの脆くなった心は少しずつ回復していっただろう。思えば上がりかもしれない、単なる自己満足かもしれない。でもエヴァとアルメンにだけは私は本気で接してきたつもりだ。家族　なんてものに私は嫉妬し、希望し、憧れてきたのだから。

エヴァにとっても私は大切な　家族　であろう。だからこそ今回はいけない。エヴァが学園長室の扉の向こうにいたんだっただけならまずい。エヴァがもしも私の話を聞いていたら、私と学園長の話を聞いたらどう思うだろう。私の酷い姿を見て、失望するだろうか。エヴァは純粹なんだ。そのエヴァが酷い姿の私と、人間として腐ってる学園長その2人のやりとりを聞いて絶望するだろうか。

そんな答えはエヴァにしか知らない。だから私はエヴァを求めて走り続ける。走っている途中で雨が降っていることに気が付いた。

大きめの雨の雫が世界を埋め尽くす。雨は私にも当たる、雨は私の金色の髪を濡らし毛先に水滴を溜め、そして落ちる。

私は学園内をただただ走り、エヴァを探す。そして、世界樹がすぐそばにある広場に着いた。そこにエヴァはいた。

エヴァは雨に打たれ、服や髪と全てが濡れきっていた。エヴァは俯いており表情は見えない。エヴァの金色の髪は私と同じように水に浸し続けたように濡れきっていた。ポツンと水滴は落ち、地面に当たり弾ける。この雨はまるでエヴァの心情を表しているみたいだ。

「わたしは海斗が好きだ」とエヴァが言う。「だけどわたしを苛め、クソのように扱ってきた人間なんて大嫌いだ」

私は変わってしまった

エヴァが知っている、私ではもうないだろう。私はそれを自覚している、そんなことを自覚したくないけれど。

「わたしを家畜のように見下した人間が嫌いだ。わたしを人間とは思わない人間なんて嫌いだ。わたしを 真祖の吸血鬼 にして楽しんであいつが憎い。こんな不幸が満ちたクソつたれな世界が憎い。そして私から見て幸せな光景」

家族 というものを与えられているのに、自分が幸せではないという人間に嫉妬し憎悪していた

「だからわたしはお前とアルメンに出会い、そして 家族 になれたことに誇りを持ち最高に楽しかった、嬉しかった、至福の時間だ

った」とエヴァは言う。エヴァは顔を上げた。その目には涙が溜まっていた。「だから、海斗とアルメンがわたしを置いて出て行ったときは本当に死ぬかと思った」

エヴァが嘆いているのは私が危惧していたこととは違ったもう1つの問題。エヴァと私とアルメンを引き裂いた原因だ。

「家が焼けていたんだ。わたしが帰ってきたら、お前とアルメンはいなかったんだ。なあ、こんな酷いことがあると思うか」とエヴァは言う。「わたしのことが嫌いになったのか？ 海斗の口からそれを聞きたい」

いつだってそう、ほんの少しの勘違いで人は誤解する。エヴァと私とアルメンを裂いていたのはただの行き違いだったんだ。滑稽すぎて笑えてくる、少し考えれば分かることじゃないか。簡単すぎて分からないだなんて、ほんと滑稽だ。

私はエヴァに近づき抱きしめようとする。が、手は振り払われてしまった。

「触るな！」とエヴァは叫ぶ。「……わたしに触ったら穢れてしまう」

自分が特異な存在だというエヴァ。私も 真祖の吸血鬼 だというのにそれにすら気付かない。それほどにエヴァは混乱しているのだろう。

だから私はエヴァの抵抗を無視して、エヴァを抱きしめた。抱きしめて初めて分かったが、エヴァのか細い体を恐怖するように震えている。その恐怖は何に対するものなのか。



「私が嫌いになるはずないじゃないですか。勿論アルメンもです」と私は言う。「私達は 家族 なんですから」

抱きしめる力を少し緩めてエヴァの顔を覗くようにする。エヴァの目は大きく見開かれている。エヴァの唇が動く。だけど余りにも小さい声で、雨の音にかき消されてしまった。だけどその唇の動きからこう言っている気がした。なんで、と。

「そもそも、エヴァは心配しすぎなんですよ。勘違いです、勘違い。エヴァと私達の行き違い、家を燃やしたのは私目当ての賞金首ハンター」と私は言う。私自身全く気が付かなかったが、あえて自信満々に言ってみる。「ね、事は簡単なものです」

エヴァの震えはいつの間にか治まっていた。

「エヴァのことは私も好きですよ」

最後にそう言い、また抱きしめてあげる。



餅は餅屋、これがあの幻影旅団かよ？もろそうだが、オレ達任せときな（後書

行き違い。3人家族で1人が旅行を行って帰ってきたら家が燃えてて家族はいない、なんてことになったら絶望しますよね。ということでもこんな話になってしまったわけですが、こんなに遠回りになるなんて…。本当は小事に終わらせようと思っていたんですけどね。

どうです、これが匠の技です。

「それで……黒田君とはどういう関係なんだね？」

「どうもごうもない。あいつはわたしの敵だ」とわたしは言う。「昔の知り合いだ。わたしはあいつを信じていたんだが、見事に裏切られてしまった」

学園長室は喧騒の後だとは思えないほど綺麗に片付けられている、タカミチの肉片は落ちないし、血一滴たりとも落ちてない。タカミチと神楽坂明日菜、それにぼつやは今はいない。先ほどのこともあり、じじいはわたしの動向や部屋の外にも神経を張り詰め警戒している。

「その割には黒田君は君のことを心配していたようじゃが」

「さあな、自分の所有物に傷を付けたくないだけじゃないか？」とわたしは言う。「あいつの変態的思考はじじいも知ってるだろ」

少し気分が悪くなる。だけどそれを表情に出さないようにして、わたしはじじいの目を見る。

「ふむ。ならばエヴァ君も黒田君には気をつけることじゃな」とじじいは言う。……じじいは気付いてないみたいだ。「彼は少し頭がおかしいからのお」

気分が更に悪くなる。けれど我慢だ、我慢、我慢、我慢……。

「ああ、話は終わりか？ もう行っていいか」

「うむ、すまないのお。呼び出してしまって」とじじいは言う。「ネギ君の件も頼むぞい」

ぼうやの実戦訓練か。

「ああ、分かった。じゃあな、じじい」と言い、わたしは学園長室を出て行った。

じじいも歳をとったものだ。若い頃は英雄クラスの力を持っていたというのに、今ではもうその面影すら残していない。平和な時代が続いたというのは分かるが、なんとも不甲斐ない話だ。だが、今回はそれが幸いしたな。じじいの洞察力が昔のままだったら気付かれていたからもしれない。

「ククク」

つと、いかんいかん笑ってはいけない。三流はいつもちよつとしたミスで失敗するんだ、悪の魔法使いたるわたしがそんなへまを起すわけにはいかん。今は平然とした顔でいないとな。

建物を出たところでわたしは後ろの気配に気が付く。尾行か、じじいも最低限の注意はしているってわけだ。

しばらく歩いて、色々な店がある商店街たるところに着く。学園都市というだけあってその店の数は半端ではない、コンビニもあるし、アクセサリー専門だとか、靴専門の店とかもある。更には魔法関連の店も裏にはあったりする。その店の数から学校帰りの学生や先生も沢山いるのだ、かくいうわたしも偶にショッピングを楽しむときがある。そして勿論その店の数から建物が複雑に入り組んでいたりするわけであって、人を撒くには最適だったりするわけだ。というわけで、尾行している奴とはここでお別れだ。路地裏に入っていく。角を曲がったところで転移魔法を使い、学園内の森に移動し

た。ふう、無事振り切れたみたいだ。

「や、アルメン」と背後から声。「どうでした？」

振り返ると予想通りアルメンがいた。メイド服に猫耳に長く綺麗な黒髪。その容姿はわたしの記憶に残るアルメンそのものだった。アルメンは優しい笑顔でわたしを見つめている、けどわたしは返す言葉が出なかった。わたしは今までアルメンに酷いことをしてしまった、殺すつもりで攻撃魔法を放っていたんだ、もしアルメンが死んでいたらと思うとどうしてもわたしは自分が許せなくなる。海斗は「アルメンなら気にしていませんよ」と言っていたが、それでもわたしは罪悪感を拭い切ることは出来なかった。

「……人は完璧ではありません」唐突にアルメンが言う。「完璧な人間なんていません。世界中の人間、現代も過去もそして未来も完璧な人間はいないでしょう。わたしが出会ってきた人も全員何かしら欠点を持っていました。わたしも海斗も、そしてあなたもです」

アルメンはわたしに近づいてきて、そして頬を引っ張った。痛い。

「ですからあなたは何も気にする必要はありません。何か間違いを犯したら謝ればいいのです」とアルメンは言う。「一丁前に悩むなんてエヴァがすることではありませんよ」

ああ、と心の中で呟く。

「これからはここがエヴァと茶々丸の家ですよ」とアルメンは言う。「海斗が先ほど拡張をしたので2人増えても何ら問題はありませぬ」

流石に海斗は手際がいいな。これでわたしと茶々丸も……って茶々丸？

「茶々丸のこと知ってたのか」

アルメンは「はい」と短く答えてログハウスの中に入って行く。わたしもついて行く、入るときに気付いたが認識障害の魔法やら、防災の祝福とか色々な魔法がこのログハウスにかけられているのが分かった。アルメンは魔法が得意じゃないから多分海斗がかけたんだと思う。

「エヴァと茶々丸の部屋は2階です」

「そうか、あとで見てみるよ」とわたしは言う。「ところで海斗は？」

「海斗なら買い物に行っています」

あんなヤンキーみたいな見た目で買い物なんて店員びびるんじゃないか。というか海斗はなんであんなに見た目変わったんだ、正直最初見たとき誰だか分からなかったぞ。ピンクのシャツで胸元を見せて、金髪に眉毛なしなんてチンピラ顔負けだ。最初見たときはわたしは怒ってたからつつこめなかったけど、冷静に考えてみればあれはつつこみ待ちなんじゃないか。つつこむべきなのか、つつこんであげるべきなのか、「チンピラかよ！」ってつつこんでやるべきなのか！ いや聞いてあげないのが情けかもしれないな、もしかしたら重たい理由があってあんな格好をしているのかもしれない。とりあえずアルメンに聞いてみるか。

「なあ、なんで海斗はあんな格好してるんだ？」

「わたしも理由は知りませんが。久しぶりに会ったらもうああいう

格好をしていましたよ」

なんだアルメンも知らないのか。

「さりげなく聞いてみればどうです？　なんでそんなイカツイんだ、と」

そうするか。



でしょう、これが匠の技です。（後書き）

日常をやるうと思っていたら、ネギとの絡みが入る余地があることに気が付き緊急参入。

## 真冬のクリスマスの淫夢

両手に食材の入っているビニール袋を持って私は商店街を歩いて  
いた。そして溜息を吐く。

「まさかあんなことになるなんて！」

ではVTRをどうぞ。

## 回想

『……ところでじじいにわたしが利用されてるって話は本当か？』

やや充血した目は元々瞳孔が赤いこともあり兎のような目になっ  
ていた、今まで泣いていたせいだ。

『そうですね、ネギ坊主の実戦訓練のためにあなたを利用しようと  
していたのは事実です』と私は言った。『というか気付かなかつた  
んですか？』

エヴァは私の質問には答えしないで、俯いて何やらブツブツと呟い  
ている。『殺す』とか聞こえたのは気のせいだろうか。

『……海斗、このわたしが他人に利用されといて黙っていると思う  
か』とエヴァは言った。『否！ 否、否、否！ 断じて否だ！』

稲？

『違うわ！』とエヴァが叫んだ。『兎・に・角・だ。悪の魔法使

いたるこのわたしがまるで裁縫のときに使うあの柔らかい金属の糸通し的に利用されていいとでも思っているのか』

普通に糸通しでいいと思いますけど。それにしてもエヴァの中では悪の魔法使いってキーワードが流行ってるんでしようか、エヴァの教育は間違っていたのではないかと正直私は内心不安だらけです。

『フッフッフ。じじいめ、目にものを見せてやるわ』とエヴァは言った。『勿論海斗にも手伝ってもらうからな、これは決定事項だ異論は認めない』

ええー、嫌だな。

回想終わり

エヴァは未遂とはいえ学園長に利用されようとしていたのが許せないらしく、学園長に仕返しをしないと頭に上った血は一生下つてこないというのです。いや気持ちは分かりますけど、私も人に利用されるのは大嫌いですね。それでエヴァは学園長の計画とは逆のことをして、学園長に仕返ししようというのです。退屈はしなさそうですね。面倒臭いのは嫌なんですよね、私は物語を傍観して物語の大詰めつてときにドカーンと登場して全てを混乱させてから去る、という都合の良く楽しそうな立ち位置が希望なんですけどね。

しかし仕返しですか、楽しそうですね。面倒臭いのは嫌いですが退屈はもっと嫌いなのでこれはこれでありですね、それに 家族のすることを手伝ってやらないなんてそんな無粋なことはいけません。だからエヴァのすることを全てサポートしてあげることにはしましよ、それが私の今回の役割です。

私が最強のクズから最高のスタッフになってあげましょう、エヴァが全力で楽しめるように。

さてそれは兎も角。何だか猫の声と魔力の反応を感じたので寄ってみたのですが、ネギ坊主と神楽坂明日菜、それと茶々丸さんが何やら話しているところに行くわしてしまいました。3人は私には気付いていませんけど、何をそんなに熱中して話しているんでしょう。

「……し訳ありませんネギ先生。わたしにとってマスターの命令は絶対ですの」と茶々丸さんは言う。「マスターのすることは全てわたしがサポートするつもりです。マスターはわたしにとって大切な人ですから」

大切な人。何だ、私とアルメンがいない間にそう呼んでくれる人をつくったんじゃないですか。あなたは幸福者ですね、エヴァ。

ネギ坊主と神楽坂明日菜は少し話し合い、その後にはネギ坊主が杖を構え術を唱え神楽坂明日菜が構えをとる。これは修羅場でしょうか、茶々丸さんはネギ坊主と神楽坂明日菜の内片方だけなら倒せるでしょうけど2対1では流石にキツイでしょうね。ネギ坊主は契約の魔法を唱えると神楽坂明日菜の身体能力が格段に上がる、しかし契約の力が普通より弱いですね、ネギ坊主の未熟さのせいか或いは契約を失敗したのか。つま、どちらでもいいですね。

神楽坂明日菜は茶々丸さんのところまで突撃する、その動きは素人丸出しだが契約の魔法で強化されているので十分に速い。それに元々の資質が良いのだろう、肉体強化の術を3重した私ほどの速度はある。神楽坂明日菜は近接戦闘で時間を稼いでネギ坊主が魔法を唱える、即席の割には実に理に適っている。ここまで、私が感嘆の



った。「なんで、わたしなんか」

それは 家族 だからですよ。茶々丸さんは 家族 なんだから守るのは当然のことです、と言いたいけど残念ながら首と胴体は離れているので空気を送りこむことは出来ない。茶々丸さんは地面に落ちている私の頭を拾い、そして抱きしめる。その表情は俯いているせいで見えない。

「……早く、早くどっか行ってください」と茶々丸さんは言う。そして顔を上げる。「そうしないとわたしはあなた達を殺してしまうかもしれない。今のわたしは自制するほどの冷静さがありませんので」

茶々丸さんは自分のことをロボットだって言っていたけど、私は今彼女がロボットではないことが分かった。だって彼女の表情はまるで

神楽坂明日菜は魂が抜けているようなネギ坊主を連れてどこかへ行った。

「わたしはマスターの大切な人を守ることが出来なかった」と茶々丸さんは言う。それは誰に言うでもない、自分への言葉なのだろう。

さて、と。そろそろ大丈夫かな。私は賢者の石の再生能力を発動させる、すると茶々丸さんの持つている私の首は砂となり消えていった、そして地面に落ちていいる胴体が再生する。

「や、茶々丸さん。帰りましょ」と私は土を払い落としながら言った。



ケツバットしなイカ？（前書き）

今日とんねるずスペシャルだ、ひゃっほおおおおお!!  
あと英検の勉強をするためしばらく投稿を休ませてもらいます。  
では



ケツバットしなイカ？

僕の放った光の矢は誘導式で、明日菜さんが足止めと茶々丸さんの気を引いてくれたことによつて確実に茶々丸さんに当たるといふところまで来ていた。そのときの僕は心の中で正義を選ぶか、生徒を選ぶかで葛藤していた。本当に茶々丸さんが悪い人なのか僕には分からなかった、今日茶々丸さんの様子を見ていたけど茶々丸さんはゴミを拾つたり、お婆ちゃんを助けたり、更には猫に餌まであげていた。そんな……そんな姿を見せられちゃ、茶々丸さんが悪い人に思えるわけがなかった。でも力モ君は容赦なんてしちやいけないつて言う、それに父さんみたいな 正義の魔法使い になるには悪と戦わなきゃダメなんだ。結局僕は茶々丸さんと戦うことを選らんだ。

それでも茶々丸さんに光の矢が当たる直前になったら僕はまた罪悪感が沸いた。光の矢がどれくらいの威力なのか僕は試したことはないけど痛いに違いない、もしかしたら骨折とか火傷とかしちゃうかもしれない。そんな危ないことを生徒にしているのか？ それはダメなことだ。僕は先生なんだ、生徒を大事にしなきゃいけない、生徒に優しくしなきゃいけない。それが正しいこと

正義だ。

でも 悪の魔法使い のエヴァンジュリンさんの手下でもあるんだ、茶々丸さんは。なら悪は倒さなきゃいけない、それが正義だ。でもそうなると矛盾してしまう、生徒を守る立場の先生、悪を倒す正義の魔法使い 。正義ってなんだろう？ 僕はそんなことを考えていた、茶々丸さんに光の矢を当てる直前の一瞬で。それはまるで走馬灯のように、でも走馬灯は死ぬ直前に見るものだと思う、な



つまり、、、、、、、、、あの人死んだ、僕が殺したんだ。

僕は嗚咽を漏らしながら叫び、そして結局嘔吐してまた意識を落とした。

次に目が覚めたとき目の前にはタカミチがいた、その横には学園長先生もいる。今度は記憶もすっかりしていた、あの光景も鮮明に覚えていた。だけど今回は取り乱したり叫んだりすることはなかった、タカミチが何かしてくれただろうか。

「大丈夫かい？」とタカミチは言う。「何があったかは明日菜君から聞いている」

明日菜君から聞いている

ということは僕が人を殺してしまったことも知っているんだろう。恐ろしいことを、大罪を犯してしまったことを学園長とタカミチも知っているんだろう。僕はどうなるんだろう、怒られるだけで済むとは思えない、人を殺すっていうのは常識的に考えて犯罪だ。つまり僕は犯罪者だ、オコジヨどころか殺人罪で死刑になるかもしれない。でも故意ではないし、執行猶予がつくかもしれない、最悪でも終身刑だろう。死ぬことはない……なんて、そんなの意味はない。僕は人を殺したし、その殺した人は 悪の魔法使い じゃない。つまり僕は一般人を憧れの魔法の力で殺したことになる。正義の魔法使い の真逆のことをやってしまったってわけだ、なんてことをしたんだろう僕は。

「人を殺しちゃったよ。僕はどうなるの？ タカミチ」と僕は言う。

「僕はこの罪を償うつもりだよ。なんだってする、死んでもいい。それが唯一の殺してしまつたあの男の人への償いだと思うんだ」

もう覚悟は決めた、僕はこの命をもつて罪を償おう。

「その必要はないよ」とタカミチは言う。それは僕の予想していた返答にはどれにも当て嵌まらなかった。「君の殺した男は黒田海斗って言うてね、人を大量に殺した過去を持つんだ。犯罪者だったこともある、つまりは悪の魔法使いだ。だから君は何も責任を負うことはない」

タカミチは優しい笑顔で僕にそう言った。その笑顔は昔から知っている、馴染み深い、僕の大好きな笑顔だ。僕が良いことをしたときはその笑顔で褒めてくれて、僕が怪我をしたときはその笑顔で慰めてくれて、僕が悪い事はしたときはその笑顔で許してくれた。そんな、僕の大好きな笑顔だった。

「人を何百万と殺す男を君は殺してくれたんだよ。それは凄い事じゃないか、勿論悪人は全員殺していいってわけじゃないけど……。彼は悪人の中でも悪の中の悪の極悪人だからね、僕もこの前殺されかけたしね。君も見ただろう？」とタカミチは言う。僕は黙ってその言葉を聞いていた。「君のお父さんや仲間だって彼に殺されかけたことがあるんだ」

その言葉はただ淡々とタカミチの言葉を聞く僕を覚醒させるに十分だった。

「え、それ本当なの？」

「ああ、本当だ」とタカミチは言う。「だから、別にネギ君は何も悪いことはしていないんだよ。むしろ良いことをした、悪の魔法

使いを倒したんだからね」

倒した

「そ、そうなの？ 僕は良いことしたの？」と僕は照れながらそう言った。

タカミチは優しい笑顔を浮かべながらゆっくりと頷いた。

なんだ、何も悪いことじゃなかったんだ。良かったなー、偶々殺した人があの人で。でも今度からは気をつけないとね、今回は運がよかったから助かったけどもしも殺した人が 悪の魔法使い じゃなくて一般人だったら大変だったもんね。

「さて、ネギ君。君が意識を失ってからもう3日も経っている、そろそろ先生の役職をやってもらわんといかんのお」と学園長先生は言う。「生徒達も心配しておるじやろう」

「はい！ 分かりました」

「そうそう、それと最近では吸血鬼がでるらしいから気をつけるんじゃないよ」

そうだった！ エヴァンジュリンさんの問題を解決しないといけないんだった。頑張ろうっと。

そう意気込んで、学園長とタカミチに礼をしてから部屋を出て行った。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2910r/>

---

君のための魔法

2011年12月29日11時33分発行